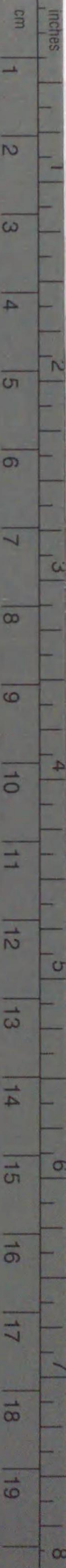


Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



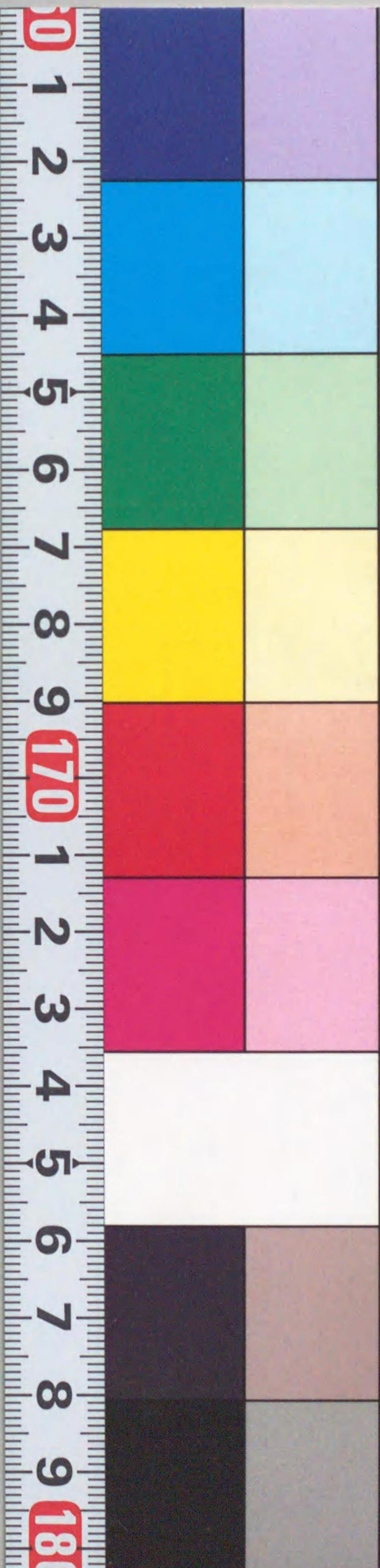
© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



近世擬古文新鈔

改訂版

吉澤義則 能勢朝次 共編全

810.78

Y956k





870.78  
Y956k  
(7)



吉澤義則  
能勢朝次 編

# 近世擬古文新鈔

改訂



336433

## 例言

- 一、本書は中等程度諸學校の上級用副讀本として編纂したものである。
- 一、本書は頭註の外に附録として卷末に主要なる語句の解釋を添へた。これは學生の自習によつて時間の不足を補ひ習學の能率を高めようとした爲である。
- 一、各抄排列の順序は必ずしも該書の製作年代を追はず、又一書中の各節に就ても原文の次第に従つて居ない。これ等は詞章の種類難易を顧慮したからである。
- 一、本書は皆直接原文から抄出した。但し教科書の立場から餘議なく改竄した箇所が無いではない。

例言



一、本書は所々に、試験問題に擬して、全く句讀點を用ひない課を設け、又嘗て官公立學校の入學試験問題となつた文には、参考として其の年次と校名を頭記した。  
一、本書中語句の右肩に \* 印を施したのは、其の語句の解釋が附録中にあるしるしであり、語の横に圈點を附したのは文法上注意すべき箇所であることを示したのである。

大正十四年十月改訂を終りて

### 編者識す

## 近世擬古文新鈔改訂版目次

### 樂訓 (貝原益軒)

- 一 内の樂を本として……………一
- 二 光陰箭の如し……………二
- 三 貧居の樂……………三
- 四 心風雅にして……………四
- 五 櫻のほころび出でたるこそ……………五
- 六 みな月の比……………六
- 七 なが月の比……………七
- 八 月……………七

### 文訓 (貝原益軒)

- 一 ふみ見ること……………八
- 二 知らぬさましたるぞよき……………九
- 三 富貴の家の子として……………一〇
- 四 かたちうるはしく……………一一

目次

### 五 王の盃をこなき……………三

### 駿臺雜話 (室鳩巢)

- 一 手折りし手に吹く春風……………三
- 二 いと口惜しきこと……………四
- 三 藤房・正成・孔明……………五
- 四 慰みぬべきの老の寢覺……………六
- 五 月に對して……………七
- 六 心短くして……………八

### 梅園叢書 (三浦梅園)

- 一 生前死後の理……………九
- 二 後生を願ふに心得違ひ多き事……………一〇
- 三 誠といふ説……………一〇
- 四 人の所長を擇ぶべき事……………一一
- 五 理屈と道理との辨……………一二

一



- 六 人の子を育てんも……………三五
- 七 繼母と前家子との話……………三七

### 玉勝間 (本居宣長)

- 一 吾が教子に戒めおくやう……………三六
- 二 新なる説を出すこと……………三九
- 三 世のつねに異なる新しき説……………三〇
- 四 足ることを知る……………三三
- 五 世の物しり人……………三三
- 六 まづたやすき事を……………三四
- 七 道にかなはぬ世の中のしわざ……………三四
- 八 一言一行によりては……………三五
- 九 富貴……………三六
- 十 ふみ讀むことのため……………三七
- 十一 今の人の歌文……………三七
- 十二 物を書くは……………三八
- 十三 手はよく書かまほしきわざ……………三九
- 十四 後世のまされること……………四〇
- 十五 花のさだめ……………四〇

- 十六 ある人の言……………四一
- 十七 住まほしき里は……………四二

### 鈴屋集 (本居宣長)

- 一 述懐といふ題にて……………四二
- 二 月前納涼……………四四
- 三 初冬時雨……………四五
- 四 雪のあした友だちの許にいひやる四六
- 五 源氏物語……………四六

### 閑田耕筆 (伴 蒿蹊)

- 一 さすがの男なり……………四八
- 二 飼鳥……………五一
- 三 茶の湯……………五一
- 四 はりありの聲……………五二
- 五 范古が言……………五三

### 閑田文章 (伴 蒿蹊)

- 一 春曉……………五五

- 二 納涼……………五八
- 三 年を惜む……………五八
- 四 土さへ裂けて……………五九
- 五 石燈籠……………五九

### 藤簍册子 (上田秋成)

- 一 鶉居と名づけしは……………六〇
- 二 うとかりし人……………六一
- 三 八百日ゆく濱のまさご……………六二
- 四 君ゑみほこらせ給ひて……………六三
- 五 村雨……………六四
- 六 年木……………六五
- 七 月あかき夜……………六六

### 秋成遺文 (上田秋成)

- 一 淺きがまゝに……………六七
- 二 師とても……………六八
- 三 江上の月……………六九
- 四 初雁……………六九

- 五 秋もやふけゆくものから……………七〇
- 六 蜘蛛のいにはかけ奉らじ……………七一

### 花月草紙 (松平定信)

- 一 學問のこと……………七二
- 二 誠のこと……………七三
- 三 みやび……………七四
- 四 文のこと……………七六
- 五 理くつのこと……………七七
- 六 傍見の説……………七七
- 七 めづらしき好……………七八
- 八 人をせむるは……………七八
- 九 膽をねること……………七九
- 十 人の心……………八〇
- 十一 人の評……………八〇
- 十二 治療のこと……………八一
- 十三 花のこと……………八二
- 十四 月のこと……………八三
- 十五 雨のこと……………八四



### 琴後集 (村田春海)

一	法	.....	八六
二	世の人のことわざ	.....	八七
三	世のならはし	.....	八八
四	水上澄みて流るゝ河	.....	八九
五	文一くさを作り出でむには	.....	九〇
六	歌とは	.....	九一
七	手かく業	.....	九一
八	茶の湯にすけるは	.....	九二
九	伊豫簾高うかゝげて	.....	九三
十	思ふ人々	.....	九五
十一	身一つのすさみ	.....	九五
十二	睦月ばかり山里人のもとへ	.....	九六
十三	上田秋成がもとへ	.....	九七
十四	雪月花のさだめ	.....	九八

### 泊泊文藻 (清水濱臣)

一	文に富める人	.....	一〇〇
---	--------	-------	-----

### 松屋文集 (藤井高尚)

二	有明の屋	.....	一〇一
三	形にそへる影	.....	一〇二
四	心のまゝ	.....	一〇三
五	落葉	.....	一〇四
六	きぬたを聞く	.....	一〇五
七	墨田川舟板辭	.....	一〇六

### 檀園文集 (中島廣足)

一	硯に書きてそふる	.....	一〇七
二	秋の山水のかたに	.....	一〇七
三	山春月といふことを	.....	一〇八
四	閑中五月雨といふ題を	.....	一〇九
五	早苗といふことを	.....	一一〇
六	夏夜といふことを	.....	一一〇
七	萩風といふ事を題にて	.....	一一一
八	智といふもの	.....	一一二
一	書	.....	一一三

二	萱ふける軒	.....	一一四
三	萩のまがき	.....	一一四
四	山家初春	.....	一一五
五	柳は	.....	一一六
六	春月	.....	一一六
七	幽栖秋來	.....	一一七
八	つばくらめ	.....	一一八
九	冬月	.....	一二九
十	埋火	.....	一三〇
十一	ごもし火	.....	一三一
十二	夕	.....	一三一
十三	男とあらむもの	.....	一三三
十四	驛	.....	一三三
十五	山家水	.....	一三三
十六	漁邨	.....	一三四

### うけらが花 (橘千蔭)

十七	夜學	.....	一一五
十八	再び浦上がたの蓮見に行ける時の記	.....	一一六

### 附録

一	泊泊舎にて蓮を見る	.....	一二七
二	雁をさく	.....	一二九
三	隅田川の雨	.....	一三〇
四	秋の山ぶみ	.....	一三一
五	山里	.....	一三一
六	文机によりあつゝ	.....	一三三
七	手ぶり	.....	一三三
	語釋	.....	一三五



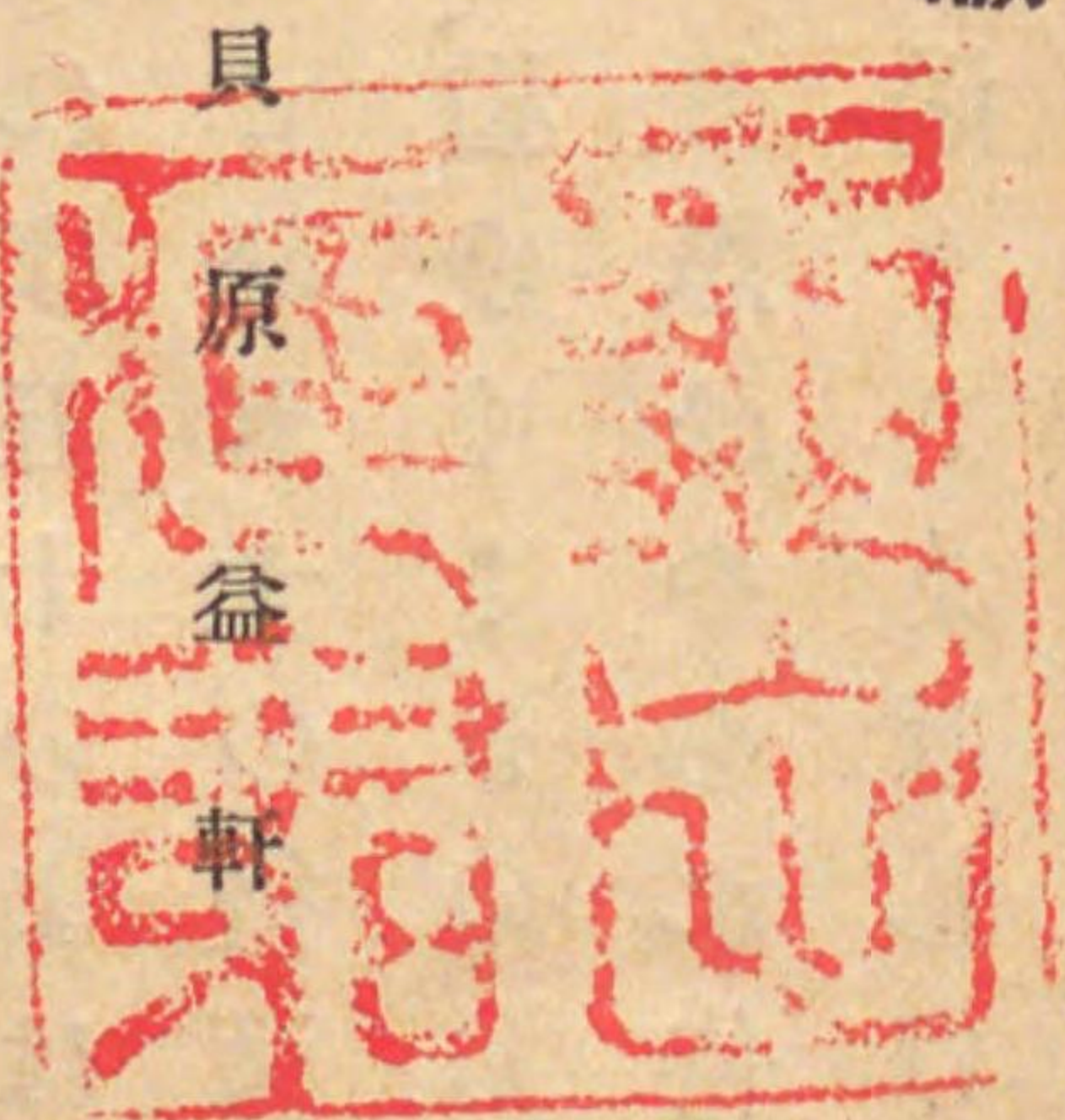
近世擬古文新鈔 改訂版

樂 訓

一、内の樂を本として

内の樂を本とし、耳目を以て外の樂を得る媒として、其の欲になやまされず、天地萬物の景氣\*のうるはしきを感じずれば、其の樂限りなし。此の樂、朝夕つねに目の前にみちみちて餘あり。これを樂める人は、すなはち山水月花のあるじとなりて、人に乞ひ求むるに及ばず。たからもて買ふにあらざれば、一錢を費さず。心にまかせて恣にこ

貝原益軒  
生、寛永七年（二  
二九〇）  
歿、正徳四年（二  
三七四）  
住所。九州福岡  
職業。福岡藩士  
學統。松永尺五、  
山崎闇齋、木下順  
菴に學ぶ。





りて用ふれども盡きず。常に我が物として領すれども人いさはず。如何となれば、山水風月の佳景はもごより定まれる主なければなり。

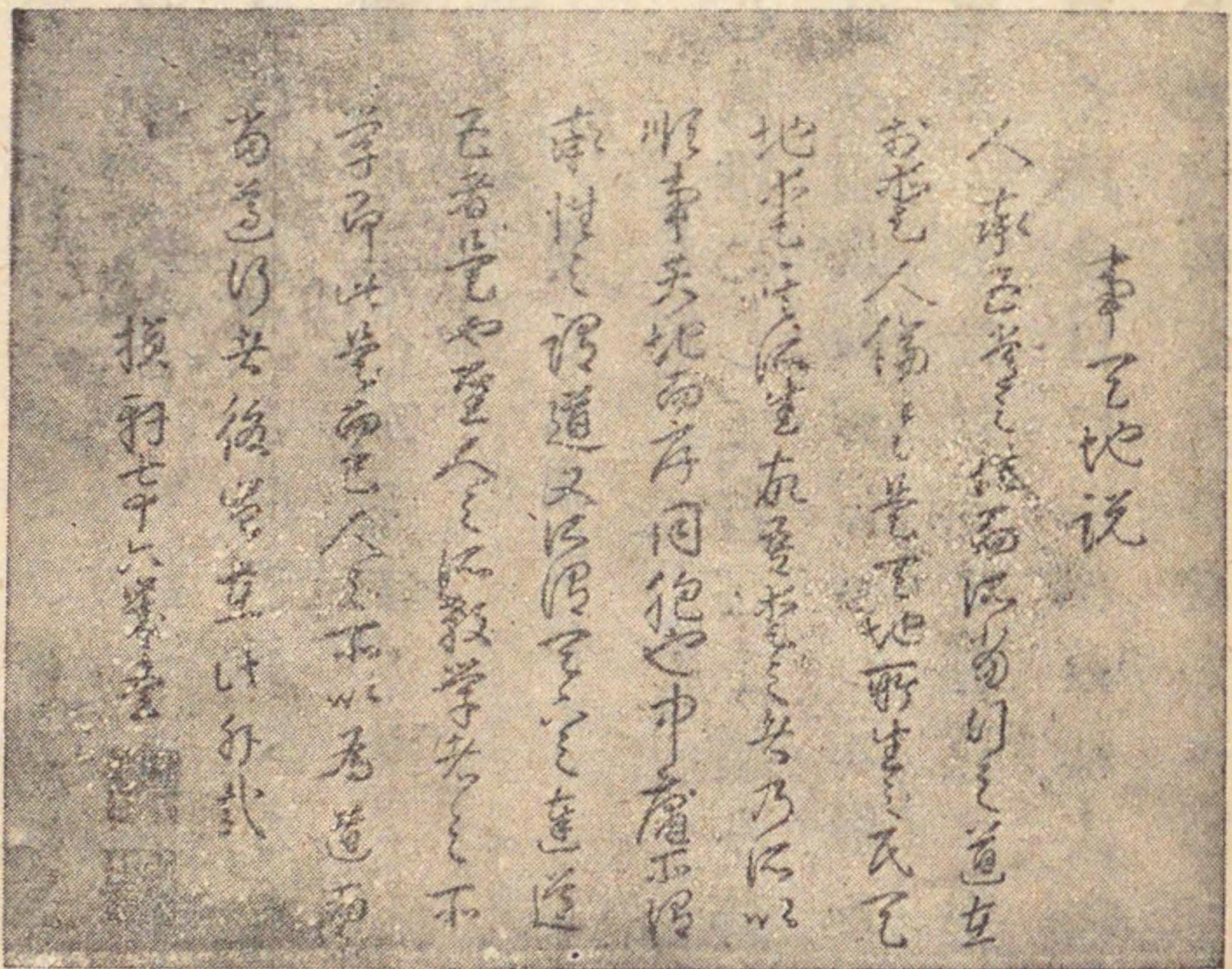
二、光陰箭の如し

光陰箭の如く時節流るゝが如し。いへるも浮けることにあらず。老に向へば猶更に年月の早く過ぐるごあだかも飛ぶが如し。あとをかへり見れば、五十のよはひを過ぎ來しもさのみ久しからず。たごひ五十の後又五十のよはひを経て百年にいたるごも、猶ゆくさきの月日いよゝ早くして程なく盡きなん。ごご思ひやられ侍り、いくほごなき残れる齡を樂みてこそ過ぐさまほしけれ、うれひ苦しみて空しく過ぎんはいごおろかなりや。

◎三九、東高師

◎三九、東高師  
◎三九、水産講  
○とどしに花は  
相似たれど  
年々歳々花相似、  
歳々年々人不同  
(劉廷之)

事と地説



日々にをしむべし。

三、貧居の樂

ごしごしに花は相似たれご、ごしごしに人は同じからず。老かさなれば一ごせの内にもやうやく衰へ行きて、今<sup>\*</sup>の昔にしかざる事を知りて、かねてより悔なからん事を思ひ、時日を惜しみ一日もいたづらに過すべからず。今日くれて明日もありごて侍<sup>\*</sup>むべからず。今日の日の内を



○白眼にして見る  
「籍不<sub>レ</sub>拘<sub>二</sub>禮教<sub>一</sub>、  
能爲<sub>二</sub>青白眼<sub>一</sub>、見<sub>二</sub>  
禮俗之士<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>白  
眼<sub>一</sub>對<sub>レ</sub>之云々」  
(晋書阮籍傳)  
快く交るには青眼  
を以てし然らざる  
には白眼を以てす  
となり。

心安く身しづかにして獨坐するもまた貧居の樂なり。  
世俗の宴遊をこのみ、さわがしき友多きにまされり。學  
好まざる人のごひ來ぬはかへつて情あり。心なき人の  
己がつかれ、ごいごまあるまゝに訪ひ來りて長居する  
はわびし。されごかゝる人を白眼にして見るは情なし。  
禮を失ふべからず。

四、心風雅にして

心風雅にして、古書を読み、詩歌を吟じ、月花をめで、山水を  
好み、四時のおしうつる折々の美景と草木のかはるく  
榮えうるはしきこを見て樂み、貧しけれご飢寒のうれひ  
なく蔬食口になれぬれば味ありて肥濃なる美味をうら  
やまず、淡薄なるはかへつて身をやしなふに宜し。布の

○滿篇の金  
「遺<sub>二</sub>子黃金滿篇<sub>一</sub>、  
不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>一經<sub>一</sub>」  
(漢書、韋賢傳)

衣、紙のふすま、いさゝか寒をふせくに足れり。葎生ひて  
荒れたる宿に起臥しても、風寒のうれひなかるべし。も  
し幸に書をおほく貯へて架にさしはさまば、貧どすべか  
らず。是真の寶なれば滿まんの金にまされり。

五、櫻のほころび出でたるこそ

櫻のほころび出でたるこそ、花に心はなけれご、人の心を  
動してえならぬながめなれ。是我が日の本にて四時の  
花多き中にも第一の見ものなれば、梅ちりて後、この頃の  
異花はみなけおされぬ。されご日比またせく、てやう  
く、咲けるが、あくまで見る程もなく疾く散るは又うら  
めし

よしさらば散るまでも見じ山櫻



花のさかりを面かけにして

と古の人のよみけんも、後の思出にせんごにや情ふかし。

六、みな月の比

みな月の比になりぬれば、端居の風したはしくわらふだ敷きて居るも心よし。池の心ふかく、蓮葉の濁にしまずして、花ならで夕風に匂ひわたるだにも異草にすぐれたり。ここに花の笑の唇ひらけたるは、所せきまで薫りみちて世に似るものなく清らなり。涼を逐うて木蔭にやすらひ、木々の下風のなつかしきに清き泉をむすび、夏を忘るゝ心地するもいさぎよし。光明らけき夜半の月を清き水に宿して見るは更なり、遣水の音なご聞くもいみじう心ゆくばかりなり。

七、なが月の比

長月の比は、秋の花も過ぎ、紅葉もまだしき折なるに、菊は百花におくれてひさり晩節をたもち、霜にほこりて操の色をあらはし、なべての花に時を異にするのみならず、色形匂にも殊にすぐれてあてやかなれば、此の時もし花多くともわきてあはれむべきに、秋の末にひさり盛なれば折にあひていさめてたし。元稹が菊を詠じて、不是花中偏愛菊、此花開盡更無花といへりしは、菊をめてし心猶うすし。

八、月

あたら夜の月なれば、同じくば心知れらん、人と共に見ん

◎大正一、明治  
専門

○元稹  
中唐の詩人、白樂  
天と並稱せらる。

◎大正一三、大分  
高商

○あたら夜の月  
あたら夜の月と花  
とを同じくば心し  
れらむ人に見せば  
や(後撰集、源信  
明)



○ひとりぞ月はさびしきにあはれもいとどまさりけりひとりぞ月は見るべかりける

(千載集、顯昭) 西行といへるは誤ならん  
○大正元、水産  
○今人は云々  
「今人不見古時月、今月曾經照古人」(李白、把酒問月)

こそ本意なれど、同じ心に見ゆる人稀なれば、西行がひとりぞ月は見るべかりけるとよめるも宜なり。もろこしの人も、秋月は俗士と見るべからずさいへり。李白は今人は古時の月を見ずさいへれど、昔の世々の人の眺め來しも此の月なれば、古人のかたみとされるも、昔おぼえて俥せりばし。古今の人の世を去りゆくは、流水の行きてかへらざるが如し。たゞ月の光のみ古今かはる事なきこそよなうめでたくたふさぶべけれ。

文訓

貝原益軒

一、ふみ見ること

○大正七、桐生高染

四時につきて、いつともわかず、ふるきふみ見ることを樂

○三餘の時  
「學者當以三餘、冬者歲之餘、夜者日之餘、陰雨者時之餘」(魏略)

○狄仁傑  
唐の名臣、則天武后に仕ふ。

しみ、つねにして止むべからず。なんぞ只三餘の時にかぎるべきや。春夏は日の長きを愛し、秋冬は夜の長きをよろこぶ。折を得て樂しむべし。日ながけれど事しげく客多ければいとまなし。夜はしづかにして書を見るに功多し。およそ、日ひこ日、夜ひこ夜、ふみ見る益はいかなる樂にもかへがたし。經傳きんでんをよめば見るたびに聖賢の教をまのあたり聞くが如し。たふさぶべきこと限りなく、むなしく過ぎぬる隙をしむべし。狄仁傑の名教の内至れる樂あり、なんぞ俗人こかたることを好まんやといへるもむべなり。

二、知らぬさましたるぞよき

何事も知らぬさましたるぞよき。自らは私わたくしにひかれて



○子路  
孔子の弟子。孔子  
との問答、論語の  
爲政篇に見ゆ。

○浦のはまゆふ  
三熊野の浦の濱木  
綿百重なす心はも  
へどたゞにあはぬ  
かも(萬葉集四)

よく知れりと思へど、いまだよく知らぬこと多ければ、我が心に許し難し。子路の知らざるを知れりとするは、いづはりて知れりとするにはあらず。我が心にはまことに知れりと思へど、我が氣あらく心くはしからずして、あやまりて既に知れりと思へるなり。ひとへに思へば、ただ知らぬことを既によく知れりと思ひ誤ること多し。浦の濱木綿の百重なることを思ふべし。

三、富貴の家の子として

富貴の家の子として、つかさかうぶり心になひ、世の中さかりにおごりならひぬれば、うき世のはかなきたはぶれあそびにのみ心をうつし、學問などのしづかなるつとめに、まめやかに心をよせんことはいさ難くして、身終る

まで人の道をしらず、驕樂にふけりて人のうれひをわきまへず、文字を知らでふみ見るにちからなければ、聖の教を知らざるのみならず、唐のやまこの古の世々の史ふみにうごくして、今のかゞみにすべきやうなし。かくはかなく、て年月をすぎぬれば、古の至れる道にくらく、天地萬物の理を知らず。鳥けだものと同じく生き、草木と共に朽ちなば、人ご生れしかひなくして何の樂かあらん。かくの如くならば、家富めりとも、まここにさいはひ無き人なるべし。

四、かたちうるはしく

かたちうるはしく、物よく言ひ、よききぬ着てまれ人に對し、すがた言葉はすぐれて人のもてなしよく、そのふるま

◎大正三、各醫專  
◎大正十三、廣島  
高師



ひうるはしく、目だつべきほごなれど、文字を知らず古今の事にうとく、かたこさいひて、人の耳にたてば、すがた言葉のうるはしきも空しくなり、人に見おこされ、あさましく下しもさまに見ゆるは口惜し。

五、玉の盃そこなき

すこし才たまありと見えて物書き藝ある人も、其の心平實にして、わが才をかくしてほこらざる人は、おくゆかしくうるはしと見ゆ。多才なる人も、わが才をほかにかゝやかして誇る人は、多くは人をそしる。おのれにほこり人をそしるは、其の不徳なるくせのほごあらはれてあさまし。かゝらざりせばよからましと思ひて、あたら才學あるも玉の盃そこなきが如く思ひくたされて、其の疵うらめし。

○玉の盃底なき  
爲人主而漏泄  
其群臣之語、譬猶玉卮之無當  
(韓非子外儲說  
右上)

室鳩巢  
生、萬治二年(二  
三一九)  
歿、享保十九年(二  
三九四)

駿臺雜話

室鳩巢

一、手折りし手に吹く春風

盛衰榮枯は世の常なり。それによりて志をかへぬは是亦士の常なり。もし時の模様につきて覺悟を變じ、世話に云ふもりもごにつくやうにては、何をもて士と申し侍るべき。

水邊楊柳綠煙糸 立馬煩君折一枝

唯有春風最相惜 慙慙更向手中吹

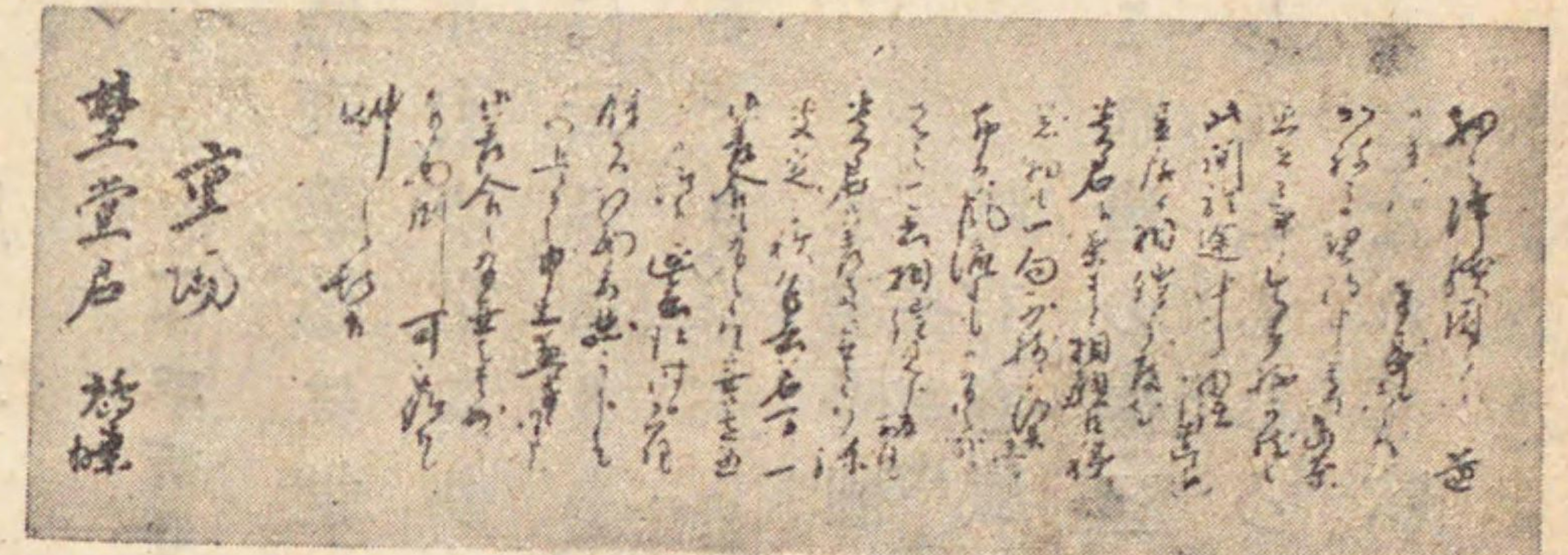
これ唐の楊巨源が楊柳の詩なり。此の三四の句意、婉にしておもしろく侍り。よりて其の意を翁がよめる歌になれて吹く名残やをしき青柳の手折りし枝をしたふ春風

○楊巨源  
中唐頃の詩人、字  
は景山  
○翁  
鳩巢の自稱。



◎大正十一、三重  
高慶

◎三〇、千葉醫專  
◎大正一一、大阪  
醫大豫  
◎五常  
仁、義、禮、智、  
信



楊柳の人に折られてはや木を離れたる  
とて、春風のそれをよそにして吹きなば、  
いかに情なかるべきを、なほその手折り  
し手を去りやらで、をしみ顔に吹くこそ  
いさやさしく覚え侍れ。忠臣義士の盛  
衰存亡をもて心をかへぬに喩へつべし。

二、いと口惜しきこと

儒教世に行はれざりしより、人々義理に  
うごく利欲にささくなる程に、五常の道  
廢れて、風俗日に下りゆくこそなげかし  
けれ。もごよりいやしき身にて、一代の  
風教を維持せんごすとも、わが力およぶべきにあらねば、

○蚘蚘  
蟻の一種、韓愈の  
詩に  
「蚘蚘撼大樹、可  
笑自不量」  
○精衛  
小鳥の一種、山海  
經に  
「發鳩之山有鳥、  
曰精衛、……取  
西山之木石以填  
東海」  
◎大正一四、海兵

◎大正七、專檢

三、藤房正成孔明

ひごへに蚘蚘の樹を撼かし、精衛が海を填めんに似たる  
べし。さはいへご、世をうれへ民を新にするも、吾が儒分  
内の事なれば、これを度外に置くべきにもあらず。いか  
なれば、世の老師宿儒と稱する人の、好みて異説を肆にし、  
又は他道を交へて、仁義五常の沙汰をばよそにするこそ  
うけられぬ。たゞつとめて新奇を競つて俗耳を悦ばし  
め、時好に投ずるなるべし。いと口惜しき事なり。古人  
のいはゆる阿世曲學とはこれ等をいふなるべし。

建武中興の人物にては、搢紳家に藤藤房、韜韜家に楠正成  
もとより輿論の歸する所なり。もし其の人品をいは、  
藤房は公卿輔弼の臣たり、正成は將帥禦侮の臣たり。藤



○龍馬の諫  
太平記に、藤房、龍馬に託して後醍醐帝を諫め奉りしこと出づ。  
○朝陽の鳳鳴、古今事類全書後集に「高帝造奉天宮、御史李善感始上疏、極言、時人喜之、謂爲鳳鳴朝陽」云々。  
○大正四、海軍機關  
○關趙「關張」の書き誤、關羽と張飛をさす  
○三五、東高師  
○四三、海軍機關  
○大四一四、大阪高商  
○黄金の術  
金丹(不老不死の仙藥)を作る術  
○三八、水産講習  
○董生を學ぶとは云々

房龍馬の諫は直言極諫、朝廷を聳動す。まことに朝陽の鳳鳴といふべし。孔明は臥龍なり。道德を懷抱し功名を遺外し、草廬にて一生を終へんこそせしに、はからざるに蜀の先王の三顧に遇ひて、己むこそを得ずして出で仕へしが、一朝關趙が上に立ちて、君臣水魚のごさくなりき。

四、慰みぬべき老の寢覺

日月迭に移つて、白駒の隙過ぎやすく、衰病日に侵して、黄金の術成りがたし。されば犬馬のよはひこれまであるべしとも思はれざりしが、いつしか老の波より來て、こころしは七十あまり五つの春にもなりぬ。あまさへ、近き頃より身に痿疾を得て、手足もあがらず、たちるも惱めるまゝ、昔の董生を學ぶごにはあらねども、此の三こそ春の園

「下帷發憤讀書三年不窺園」(漢書董仲舒傳)

○程朱  
程顥、程頤と朱熹と。  
○鄒魯  
孔子と孟子。其の生地よりいふ。  
○韓歐  
韓退之、歐陽修  
○邯鄲の歩を學ぶ  
「子不聞夫壽陵餘子之學行於邯鄲與。未得其故、行能、又失其故行矣、且匍匐而歸耳。」(莊子、秋水篇)  
○大正一〇、東高師

を窺ふ事もかなはねば、園の中ながら、梢につたふ鶯の音に残りの夢をさまし、枕にかをる梅が香に過ぎし昔を偲ぶばかりになんありける。しかはあれど、幸に若かりし時より學びの窓に年を経る甲斐ありて、程朱の道に従ひて鄒魯の風を尋ね、韓歐が文を好みて邯鄲の歩を學ぶにぞ、老の寢覺も慰みぬべき。

五、月に對して

いつしか秋のけしき立ちて、萩吹く風も身にしむ頃なり。久しく翁のが行かねば、此の程老の寢ざめも覺束なし、いざたづね問はんさて、ある夕暮に、例の人々打つれて來しが、又もまるらんさて歸らんこそせしを、翁さめて、今宵は月もよし薄酒すゝめ奉らん、しひてごまり給へといへ



○玉山倒るゝばかり

「山公曰、番叔夜之爲人也、巖々若孤松之獨立、其醉也、俄俄若玉山之將崩」(世俗容止篇)

ば、翁の心をいかで背くべきさあらばこそ、各座をしめて清談の露やうく、繁き程に、家人やがて心得て、ごりあへぬまでにあるじまうけし、肴取りそろへて、盃出しけり。數獻におよびて玉山倒るゝばかりに見えけり。さて翁いふやう、月に對して昔を偲びては、さながら古人の面影もうつるやうに覺ゆ。いづれの代にか又わが如く月に對して今を偲ぶ人もやあらん。月はさこそ其の世をも照すらめ、もし、あつらへ告げらるゝものならば、月にさは一言をも残さましと思ひ侍りさいふ。

六、心短くして

翁が心は知己を一世にもごむるにも候はず。昔より邪僻妄誕にして根もなき事の盛に世に行はれて、あなかし

○大正元、秋田鐵專

○女郎花の一時  
「秋の野に、なまめき立てる女郎花あなかしがまし花も一時」(古今集、僧正遍昭)

三浦梅園  
生、享保八年(二三八三)  
歿、寛政元年(二四四九)  
所、豊後杵築  
職業、漢學者。杵築侯に進講す。  
學統、藤貞一、綾部綱齋に學ぶ。

○原始反終  
「原始、反終、故知死生之説」  
(易、繫辭上)

がましく聞ゆるは、女郎花の一時ごや申すべき。大方は續かぬものにこそ。世を経て正道へかへらぬはなし。然るを心短くして、早く其の驗を見んと思ふは未練のこご、いふべし。

梅園叢書

三浦梅園

一、生前死後の理

死生の説あきらかならず。やゝもすれば異端の説にまよふ。予易を讀みて原始反終ごいふにいたりて、豁然ごして悟る事あり。死して後は生れざる前の如し。生れざる前吾知らず。死して後吾いづくんぞ知らん。むべなるかな、聖人其の知るべき所をもごめて、其の知るべか



○未生云々  
季路曰、敢問死、  
子曰、未知生、焉  
知死。(論語、先  
進)

らざる所をいはざる事を。かたへの人曰く、しからば人死して靈なし、祭祀も無用の事なるべし。曰く、然らず。人死して靈なしといふにあらず。生れざる前しるべからず。死して後吾何ぞ知らん。故に孔子も未生をしらず何ぞ死を知らん、宣へり。火消えて尚煖なるものは其の氣存することあればなり。況や人情已に死したりといひて、道行く人にわかれたる如く、跡こふ事もなく打捨ておかるべきや。是れ人情止む事を得ざるよりおこれり。祭る時にいたりて、吾心ありし昔の事なごつごつごに思ひいでられ、なき面影かくこそありしか、かくぞせし。こおもひつゝけて、誠をつくし祭る時、其の誠の心おほふべからず。鬼神感格洋々乎として上にあるが如く左右にあるが如し。此の境よくく思ふべし。(巻上)

二、後生を願ふに心得違ひ多き事

今の人、後生願ふも施しをするも、十が八九名ご慾ごなり。人ご毫釐の利をあらそひこりて、堂塔を建立し、奴僕にからきみめせてかたへに施し、口舌争論の片手に念佛申す



は、却行して道を急ぐが如し。いまの後生ねがひ施しする

○阿鼻梵語(Avi-  
ら)の音譯  
無間、無間地獄。  
○九品 九等の品  
位  
上品、上中品、  
中上品、中中品、  
中下品、下上品、  
下下品、  
淨土往生に九品ありて、各々來迎をうけ寶蓮の華臺に乗じて往生すといふ。  
○五戒、不殺生、

人を見るに、阿鼻焦熱の物語りに肝をけし、九品蓮臺に生れて百味の飲食に全盛を盡したき欲よりなるべし。さなきは、彼人こそかゝる善根をなしつれど、人の稱讚にあはん事を求めてなり。然れども其の身五戒を外にし



不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒、  
○十惡 殺生、偷盜、邪淫、惡口、兩舌、妄語、綺語、貪欲、瞋恚、愚癡

十惡を事とし傍に佛に誦はんは、醫師の藥をすて、能書（能のうがき）をよみ、疾の瘥えんことをもごむるが如し。先づ五戒を守り慈悲ふかく物にあらそふ事なくして、心しづかに後生ねがはんはまことの道心者なるべし。（卷上）

三、誠といふ説

一勺の水を海に入れて海の水増したりといはんは愚なり。まさずといふは妄なり。水をくはふる所は我にして、増すさまさることは我にあらざる物は、しひて其の辨をもごめずして可なり。吾にある所の誠をつくす、是君子の道なり。誠さほうそをいはずる事このみ心得たらんは愚なる事なり。ある人司馬温公に誠に入る方を問ひければ妄語。

◎四四、東北農大  
◎大正四、海兵

せざるより入るごぞ。成程妄に語らずうそをいはずぬよ  
り誠の道には入るなれども、虚言をいはずぬを誠とはいは  
ぬなり。いつはりをいはずぬに對する信（まこと）は少し。偽なき  
に對する信は大なり。  
深き谷の蘭も遙なる山の紅葉も、人なしごてもよく薫り  
うつくしく照ればこそ、人至りたるごきも香清く色麗は  
しけれ。人の至るを待ちて香をはなち色を出さんごせ  
ば筈（はず）にあふ事あるべからず。常々心にかけて帚灑（ほうらい）した  
らん。座席ご、俄に蜘蛛（くま）のい取り柱ふきたらん。はいかで見  
まがふべき。人平生をたしなまずして、其の期に臨み偽  
に文（かき）らんは誠の俄掃除なるべし。（卷中）

四、人の所長を擇ぶべき事



○わたりもの  
來品 船

近頃片桐石見守は茶人のきこえありけるが、煙草の火入ひいれ唐金からかねのわたり物にていかにもおもしろき器なり。人みな良き香爐なりといひけれど、石州そのまゝにして闇か  
れける。ある人その仔細しじゆをさふ。石州の曰く、是れ火入  
ごすれば上品なり、香爐ごすれば下品なりとなり。誠に  
この心をもちて人をつかはす、人々己おのれいつ一盃ばいの器量をつく  
し、國家の益えきもなるべきか。(下卷)

五、理窟と道理との辨

理窟ご道理ごへだてあり。理窟はよきものにあらず。  
たごへば親羊をぬすみたるはおやの悪しきなり。親に  
てもあれ悪は悪なれば直に訴ふべしといへるは理窟な  
り。親羊を盗みしは悪ながら、親悪事あればごて子是を

○親羊をぬすむ  
論語子路篇に直躬  
者の説あり。

いふべき様なしごてかくしたるは道理なり。人死して  
はふたゝびかへらず。歸るべきみちあらばなげきても  
歎くべし、かへらぬみちなれば歎きて益なしといへるは  
理窟なり。人死して再びかへらず。歸るべき道あらば  
歎かずごもあるべけれど、かへらぬ路こそ悲しけれなご  
歎くは道理なり。(中卷)

六、人の子を育てんも

人の子を育てんも有りのまゝにして教無からんはをし  
き事なり五穀も生えたるまゝにてくさぎる事もなく培つちか  
ふ事もなくば必ずよくはみのるべからず兎角手を入れ  
てだによく登あることは稀なるものなり生れつきよしと  
てをしへざるはよき刀とてねたばつかぬがごこしよき



刀のうへにねたばつきたらんにはなほよくきれぬ  
 べし生質うつくしからん人も裸になして出だしたらん  
 には文なくぞあるべきうつくしき人にうつくしき衣紋  
 引きつくるひたらんこそほいなるべけれよきこいふに  
 かぎりなく理に窮なければなり。  
 又は愛に溺れてわきの人の指南さへ親の心にはひがご  
 ごとおぼえたゞさむからんひもじからんこのみいひ思  
 ひその我まゝ氣随もやがてなほらんひごゝならば家業  
 にももごづくべしごおもふうち月日人をまたねば早指  
 南のころもすぎぬ。心ありてよき事いふをば渠をにくむ  
 ご心得あからさまにそしりにくむこれ劔のうへにみつ  
 をぬりて小兒にあたふる如し一旦あまく快よしといふ  
 も遂には舌をやぶるべし。(中巻)

七、繼母と前家子との話

世に繼母繼子の中にて十に七八はよからぬものなり是  
 れ説あり實の親はたごひ杖をさりて指南なごするごて  
 も恩愛たがひに深きがゆるゑに暫く有りては互に如在な  
 くなりゆき他人も見咎めもせぬものなり繼しきは世の  
 習ひごて子ははや定めて繼母なれば心中に打ちさけは  
 し給ふまじごいふもの己に胸中に横たはりてうせずこ  
 れ不和をなすの基なりよりて假初にいふ事もむかへて  
 聞く故にむねに逆ふなりましてや其の子に教訓なごせ  
 んにさなきだに金言耳に逆ふならひなればわが過は思  
 はずして是もまましき故なり誠の親ながらへてあらば  
 かゝるうき目にはあはじなご世をうらみ述懐し頑是な



きわかき同志理非わかたぬ隣の媪や嬬なごその品は何  
ごもしらですはやこの人もまゝ子にくみすこて彼の子  
ご囁きかたり長しき異見はつゆなくていろくくとそ  
ろをかはれ互にへだて多く重り果は怨敵の思をなすに  
いたる。(上卷)

### 玉 勝 間

本居 宣長

一、吾が教子に戒めおくやう

吾に従ひて物まなばむこともがらも、わが後に又よき考の  
いできたらむには、必ずわが説とまごにななづみそ。わがあし  
きゆゑをいひてよき考を廣めよ。すべておのが人を教  
ふるは、道を明かにせむさなれば、かにもかくにも道を明

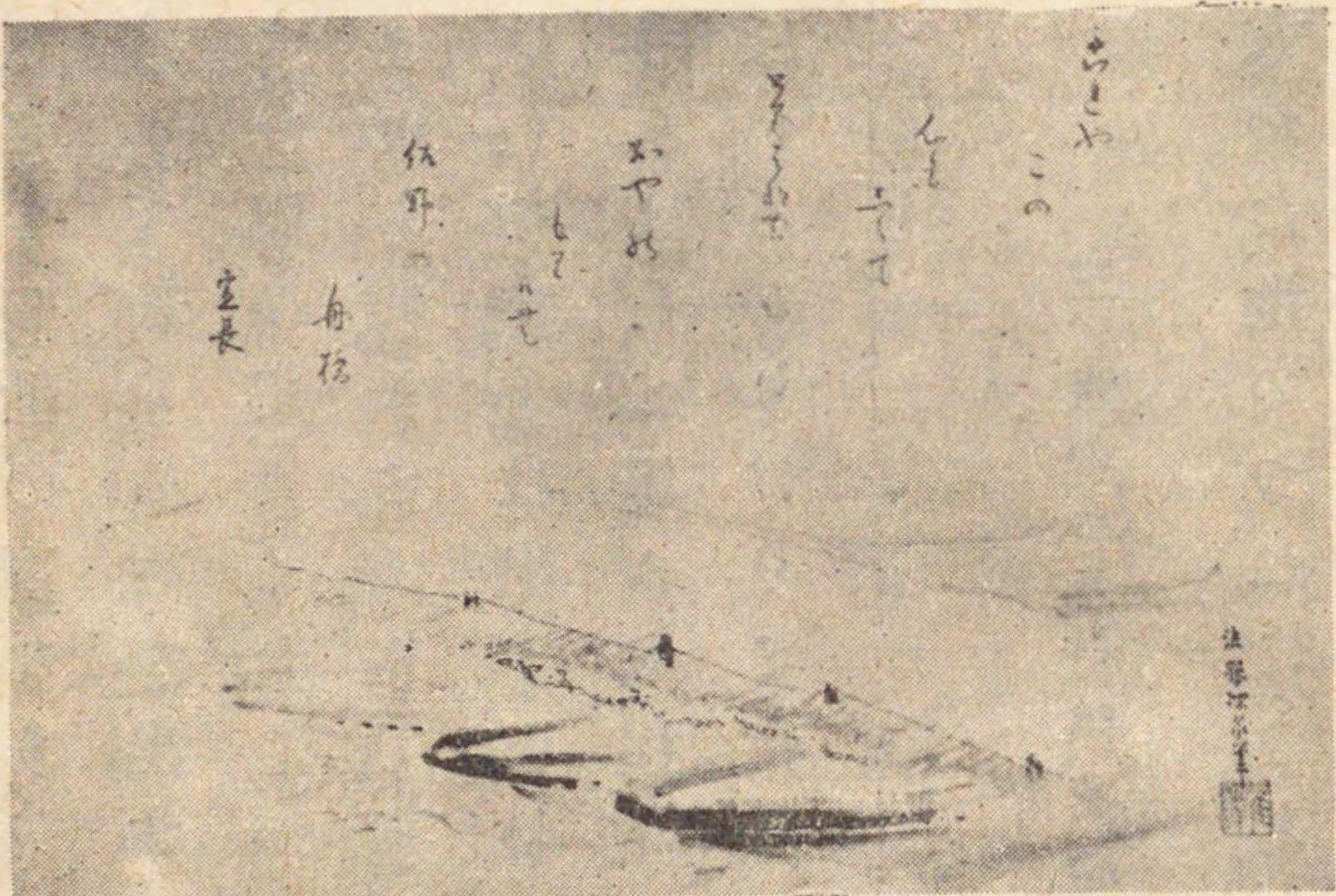
本居宣長  
生、享保十五年(二  
三九〇)  
歿、享和元年(二  
四六一)  
住所、伊勢松坂町  
職業、醫者。古學  
の大家  
學統、眞淵に國學  
を、景山に儒學を  
學ぶ。  
◎明治四〇、神戸  
高商  
◎大正九、海兵  
◎大正十、東京蠶  
糸

かにせむぞ、吾を用ふるにはありける。道を思はでいた  
づらに吾を尊まむは、わが心にあらざるぞかし。

二、新なる説を出すこと

近き世學問の道ひらけて、大か  
た萬のとりまかなひ、さとく賢  
くなりぬるから、とりくくに新  
なる説とまごを出す人多く、その説よ  
ろしければ世にもてはやさる  
ゝによりて、なべての學者未だ  
よくもとゝのはぬほごより、吾  
劣らじと世に異なる珍しき説  
を出して、人の耳をおごろかす

◎大正三、東高師





◎大正六、神戸高  
商  
◎大正一四、富山  
高校

ここ今の世の習なり。  
すへて新なる説を出すはいご大事なり。いく度もかへ  
さひ思ひて、よくたしかなるよりごころをさらへ、いづく  
までもゆきごほりて、違ふ所もなく動くまじきにあらず  
ば、たやすくは出すまじきわざなり。その時にはうけば  
りてよしご思ふも、程経て後に今ひとたびよく思へば、な  
ほわろかりけりご我ながらだに思ひならるゝ事の多き  
ぞかし。

三、世のつねに異なる新しき説

大かた、世のつねにことなる新しき説をおこす時には、よ  
きあしきをいはず、先づ一わたりは世の中の學者に憎ま  
れそしらるゝものなり。あるはおのがもごよりより來

◎大正六、東高師

つる説といたく異なるを聞きては、よきあしきを味ひ考  
ふるまでもなく、始よりひたぶるにすてゝ取りあげざる  
者もあり。あるは心の中にはげにと思ふふしもおほく  
あるものから、さすがに近き人のここに従はんことのね  
たくて、よしごもあしごもいはで、たゞうけぬかほして過  
すたぐひもあり。あるはねたむ心のすゝめるは、心には  
よしご思ひながら、その中の疵をあなたがちに求めいでゝ、  
すべてをいひつけたむごかまふる者もあり。

大かた新なる説は、いかによくてもすみやかに用ふる  
人まれなるものなれごも、よきは、年をへても、おのづから  
遂には、世の人の従ふものにて、あまねく用ひらるれば、其  
の時にいたりては、はじめにねたみそしりしごもがらも  
心には悔しく思へご、おくればせに従はむも猶ねたく、人



わろく覺えて、心よからずながら、古きを守りてやむことも  
がらも多かり。しか世の中の論さだまりて、皆人のした  
がふ世になりては、始よりすみやかに改め従ひつる人は、  
かしく心ささく思はれ、ふるきにかゝづらひて、とかく  
さゝこほれる人は、心おそくいふかひなく思はるゝわざ  
ぞかし。

四、足ることを知る

足ることを知るさいふは、もろこしの人のつねにいみじ  
きわざにすめる。ここなるを、これまここにいさよきこと  
にして、しか思ひさらば、ほご／＼につけて、たれも／＼心  
はいと安かりぬへき。わざにぞありける。しかはあれご  
も、高きみじかき、ほご／＼に望みねがふことの盡きせぬ

◎大正十一、高等

ぞ世の人のまごゝろにて、今は足りぬ。さおぼゆるよはな  
きものなるを、世には足ることしれるさまにいひて、さる  
かほする人の多かるは、例のからやうのつくりごにこ  
そはあれ、まここにきよくしか思ひされる人は、千萬の中  
にも有りがたかるべきわざにこそ。

五、世の物しり人

世の物しり人の、ひとのさきごこのあしきを咎めず、ひご  
むきにかたよらず、これをもかれをも捨てぬさまにあげ  
つらひをなすは、多くは己が思ひざりたる趣をまげて、世  
の人の心にあまねくがなへんとするものにて、まここに  
あらず、心ぎたなし。たごひ世の人は、いかにそしるとも  
わが思ふすちをまげて従ふべきことにはあらず。人の

◎四四、東高師  
◎六正二、新潟醫  
◎大正四、東高師  
◎大正一〇、東京  
高齋



ほめそしりにはかゝはるまじきわざぞ。

六、まづたやすき事を

◎大ニ、各醫專

物學ぶごもがら、物しり人にあひて物問ふに、ごもすればまづ古書の中にも、よに難き事として、誰も説きえぬふしを、えり出で、問ふならひあるは、いごあぢきなきわざなり。よく聞えたりと思ひて、心もごめぬここに、思ひの外なるひが心得の多かるものなれば、まづたやすき事をいく度もかへさひ考へ、問ひも明らめて、よく得たらん後にこそ、難きふしをば思ひかくべきわざなれ。

七、道にかなはぬ世の中のしわざ

◎大正五、各醫專

道にかなはずさて、世に久しくありならひつることを、俄

◎大七、專檢

にやめむごするはわろし。たゞそのそこなひのすぢを省き去りて、あるものはあるにてさしおきて、眞の道を尋ぬべきなり。萬のこを強ひて道のまゝに直し行はむごするは、なかくに眞の道の意にかなはざるごあり。

八、一言一行によりては

人のたゞ一言たゞ一行によりて、その人のすへてのよきあしきを定めいふは、からぶみの常なれごも、これいご當らぬごごなり。すへてよき人といへごも、まれにはごごわりにかなはぬしわざも交らざるにあらず。あしき人といへごも、よきしわざもまじるものにて、生けるかぎりのわざ、ごごによきあしき一かたに定れる人は、をさくなきものなるを、いかでかはたゞ一言一行によりて



定むべき。

九、富 貴

◎明治四四、東蠶糸

世々の儒者身の貧しく賤しきをうれへず富みさかえをも願はずよろこばざるをよきことにすれどもそは人のまことの情こころにあらず多くは名をむさぼる例のいつはりなりまれ／＼にさる心ならむものありともそは世のひがものにくそあれなにのよきことかあらむ。

◎大正六、高等

こそわりならぬふるまひをしてあながちに願はむこそはあしからめ。ほご／＼につこむべきわざをいそしみ勉めてななりのぼり富み榮えむこそ父母にも先祖にも孝行ならめ身衰へ家貧しからむはうへなき不孝にこそありけ。れたおのがいさぎよき名をむさぼるあまりにまこ

この孝を忘るゝも亦唐人もろこしびとの常なりかし。

十、ふみ讀むことのたとへ

◎三八、高等  
○須賀直見  
松坂の人、宣長の門人。

須賀直見がいひしは、廣く大きなる書をよむは長き旅路を行くが如し。おもしろからぬ所もおほかるを、經行きては又おもしろくめさむる心地する浦山にもいたるなり。又あしつよき人は速く、よわきは行くことおそきもよく似たりごぞいひける。をかしたさへなりかし。

十一、今の人の歌文

近き世の人の歌ごも文ごもを見あつむるに一ふしをかしと目とまることはほご／＼にあまたあめれれごそれはたいかにぞやおぼゆるところはまじりて大方きずなく



さゝのひたるはをさゝ見えずたゝかいなでにこゝか  
しこえんなる言葉をつかひよしめきてよみなし書きち  
らしたるをば人のもてはやしほめたつれば心をやりて  
したりがほすめるいごかたはらいたくをこがましくさ  
へぞ思はるゝ。

十二、物を書くは

すべて物をかくは、事のこゝろをしめさんごてなればお  
ふなゝもじ定かにこそかゝまほしけれ。さるをひた  
すら筆の勢を見せんこのみしたるは、いかなることゝも  
よみとき難きが世に多かる、あちきなきわざなり。  
常にかきかはす消息文なごも、文字よみがたくては、いひ  
やるすぢゆきこほらず。よむ人はた苦みて、頭傾けつゝ

◎大正二、高等

かへさひ讀めごも、つひによみえずなごしては、こゝよみ  
がたしご、かへし問はんもさすがになめきやうなれば、た  
ゝおしはかりに心得ては、事たがひもするぞかし。

十三、手はよく書かまほしきわざ

よろづよりも手はよくかゝまほしきわざなり。歌よみ  
學問なごする人は、ここに手あしくては、心をさりのせら  
るゝを、それ何かは苦しからんご云ふも、一わたりごわ  
りはさることながら、なほあかずうちあはぬ心地ぞする  
や。

われいご拙くて、つねに筆さるたびに、いごくちをしうい  
ふかひなくおぼゆるを、人のこふまゝに、おもなく、たんざ  
く一ひらなごかき出で、見るにも、我ながらだにいごか

◎四四、東高師  
◎大正四、東北大  
農科



たはに見ぐるしうかたくななるを、人いかに見るらんご  
はづかしく胸いたくて、若かりし程になごてならひはせ  
ざりけんご、いみじうくやしくなん。

十四、後世のまされること

古よりも後世のまされること萬の物にも事にも多し或  
は古にはなくて今はある物もおほく古はわろくて今の  
はよきたぐひ多しこれをもて思へば古はよろづに事た  
らずあかぬこと多かりけんされごその世にはさはおぼ  
えずやありけん今より後また物の多くよきが出でこん  
世には今をもしか思ふべけれご今の人事たらずさはお  
ぼえぬが如し。

十五、花のさだめ

◎四〇、高等  
◎大正四、神戸高  
商  
◎大正五、岡山醫  
專  
◎大正九、東高師  
體育科

◎大正九、國學院  
大豫

人の花を見てさまざまに言ふは、皆おのが思ふ心にこそ  
あれ。人はまた思ふ心こそなるべければ、一やうに定む  
べきわざにはあらず。又今やうの人のもてはやすめる  
花ごも世に多かるを。數へ出でぬはこそさらめきたるや  
うなれご、歌にも詠みならず古さ物にも見えたることな  
きは、心のなしにや、なつかしからずおぼゆかし。されご  
それはた一やうなるひが心にやあらず。

十六、ある人の言

櫻の花ざかりに、歌よむ友だちこれかれかいつらねて、そ  
こかしこそ見ありきけるかへるさに、見し花ごもの事語  
りつゝ、來るに、一人がいふやう、まろは歌よまむご思ひめ  
ぐらしける程に、けふの花はいかに有けむ、こまやかにも



見ずなりぬごいへるは、をこがましきやうなれご、まごこ  
はたれもさもあること、をかしくぞ聞きし。

十七、住まゝほしき里は

◎大正一四、京都  
醫大豫科

天の下三ごころの大都おほみやの中に江戸大阪はあまり人のゆ  
き、多くらうがはしきをよきほごのにぎはひにてよろ  
づの社々寺々なごいにしへのよしある多く思ひなした  
ふとくすべて物きよらによろづのこごみやびたるなご  
天の下に住まゝ、ほしき里はさはいへご京をおきて外に  
はなかりけり。

鈴屋集

本居宣長

一、述懐といふ題にて

◎大正九、神宮  
◎大正十、東京商  
大

昨日は今日の昔にて、はかなく過ぎゆく世の中をつくづ  
くご思へば、あはれ吾がよもいくばくぞや。手を折りて  
かぞふれば、はやみそちにもあまりにけり。命長くて七  
十ちやちそ生けらむにてだに、早くなかばは過ぎぬるよ  
ご思へばまだよごもれるやうなる身も、行先程なき心地  
のして心細くぞおぼゆる。

◎明治卅七、高等  
◎同四一、高等  
◎同四三、専檢

かくのみは、かなく、心なき本草鳥けだもの、同じつらに、  
何すとしもなく明し暮しつゝ、生けるかぎりの世をつく  
して、徒に苔の下に朽ち果てなむは口惜しくいふかひな  
かるべきこと、思ふにも、萬まにまいたり少く拙き身にしあ  
れば、何事をしいで、かは世の人にもかずまへられ、なか  
らむ後の世に朽ちせぬ名をだにごめましごいと、人  
に似ぬおろかさ、へごりそへてぞ、悲しく心うかりける



◎大正一〇、神宮

さりさてはた身をよくなきものにはふらかしはつべきにもあらず。かくのみ拙くおろかなる心ながら、何わざにもまれ、怠なくわざと心にいれて勉めたらむには、つひにはひさつゆゑづけて、なほのめに仕出づるふしもなごかはなからむさあいな頼みにかゝりてなむ。

二、月前納涼

やうく、内外暗くなりゆくに、さゝやかなるわらはの出で来て燈火ちかくともせば、いでやけちかくていさあつかはし、今宵は燈籠にてをありなむ。此の火消ちてよこいふ。げにさも侍らむさて立ちて去ぬる程もなく、前裁のしげみに立てるに火いれたる、ほのかなる影に青葉のつゆきらく、ご見えて、同じく吹く風も殊に涼しくぞおぼ

ゆる。夏の月なきほごは、庭の光りなき、いごむつかしくおぼつかなきものなるに、此の光りなからましかば、いと物のはえなからましをさて、皆人めで合へるに、あるじのしたり顔なるもこそわりなりかし。かくてよひ過るほご、こだかき松にほのめく影は、月出でたるならむさて、東のつま戸押しひらきて待つほごさばかりありて、いさ花やかにさし出でたるは、又似るものなくす。しくおもしろきには、さうろの光も今ぞむごくに消たれにたる。

三、初冬時雨

神無月の初物へゆきけるに、日いさ短き頃や、遠き所にし有ければ、急ぎつれごかへさはさく暮れにけり。夕月



◎大正十三、神戸  
高商  
○山のはならで  
あかなくにまだき  
も月のかくるよか  
山のはにげて入れ  
ずもあらなん(伊  
勢物語)  
○さだめなき  
神無月ふりみふら  
ずみ定めなき時雨  
ぞ冬のはじめなり  
ける(後撰集)

の影に玉ざゝの露の所せくおき渡したるがきら／＼と  
見えたるなご中々をかしき冬枯の野邊のけしき暗なら  
ましかば口惜しからましご思ふにも入方近く幽かなる  
光のいごあかぬ心地するに空さへ俄にくもりて山の端  
ならで月もかくれいみじく暗くなりて風あら／＼しく  
吹き來ぬるはげに定めなき此頃の空けしきかなご見る  
にはしたなく打ちしぐれ來ぬれば足を空に走り歸るほ  
ごしごゝにぬれぬ。

四、雪のあした友だちの許にいひやる

今朝のけしきめづらしくは御覽せずや冬になるより何  
時しかこのみ日毎に待ち渡りしに昨日の夕風ゆふかぜいたく吹  
荒れ雲のたゝずまひもいみじくさえわたりて飛ぶ鳥の

○給ふ  
四段活用の時と下  
二段活用の時との  
區別を明かにすべ  
し。

景色まで必ずふりぬべき空ごは見給へしかごいごかく  
まで深くごは思ひ給へかけざりきかし。  
明くれ心へだてぬ友だちは斯からぬ折だに何事につけ  
ても先づ思ひ給へ出でらるゝわざなるをましてかく珍  
らかなる朝ぼらけを心なき身の獨のみ見侍らむごこの  
いご惜あたらしく思ひ給ふればよし跡つけても人の訪ひ給は  
ましごかばこよなくをかしさもまさりぬべきものご思ひ  
給ふるに如何にごだにおごづれもし給はぬはいと思は  
ず恨めしくなむ。  
此の景色さりごも見過しがたくは思さるらむものをご  
は思ひやり聞えさすれご知ろしめすやうにいご初はつ々し  
き口には何事もいはれ侍らず筆のしりとるはかせだに  
侍らでごりつくるひ侍らむ様も侍らねば思ひ給ふる程



の心もたゞおしこめてなむ。

五、源氏物語

おのれ教へ子ごものためにはやくより此のものがたりをよみさきて聞かすることあまたかへりになりぬるを。あだし書ごもはかばかり長からぬだに説くにうむ心もまじるを。これはさしも長き書にて年月をわたれごもいさゝかもうむ心出でず度ごこにはじめてよみたらん心地してめづらしくをかしくのみおぼゆるにもいみじくすぐれたるほごは知られてかへすがへすめでたくなん。

(玉の小櫛序)

◎大正一四、横濱高商  
◎大正十四、大阪女專

伴蒿蹊  
生、享保八年(二  
三九三)  
歿、文化三年(二  
四六六)

閑田耕筆

一、さすがの男なり

伴 蒿 蹊

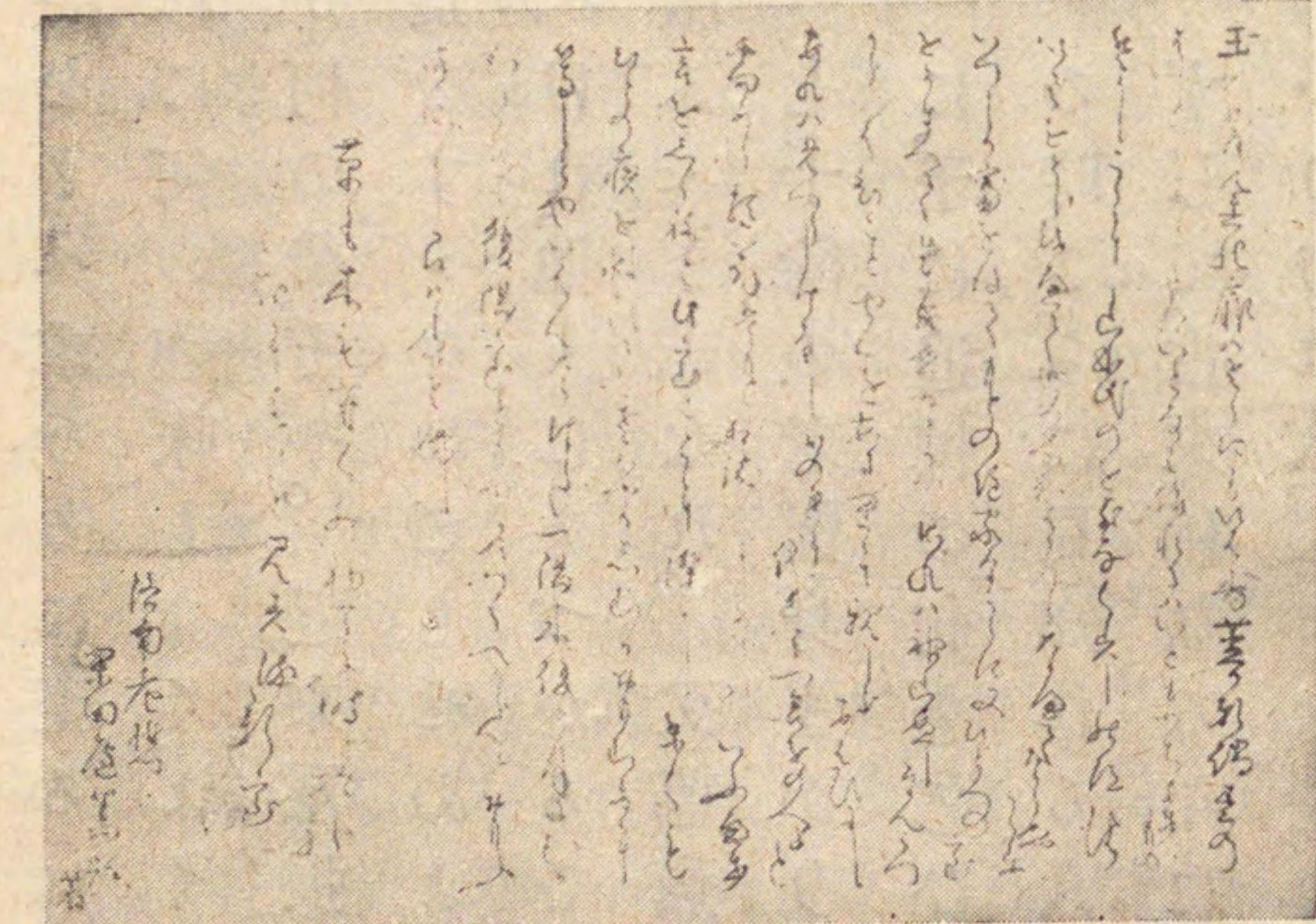
住所。京都大佛の邊。

職業。國學者にして歌人也。

學統。有賀長伯及武者小路實岳に學ぶ。

○秦人越人の肥瘠を見る  
全然没交渉なる意の諺

近來年賀又は追福の勸進を無縁の人にも乞ふこと流行す。心得がたき事なり。凡そ賀も悼も相識のうへ、千代



も生きのびよこも、身まかるをば誠に悲しごもおもへば。其の意をよむなり。所謂秦人越人の肥瘠を見るごとく、まだ知らぬ人には情かつて動かず。さるを詠む人はいつはりをいふなり。乞ふ人はおのが賀は何百首に及べり、高名の人々には誰々なご誇るの料さす。甚しうしては長崎に縁を求め、異國人の



○横井也、俳人尾張藩士、鶉衣の作者

○句集 其角の五元集にあ

○古來稀なる年 「酒債尋常行」有、人生七十古來稀」(杜甫、曲江詩) 七〇歳を古稀と稱す。

詩をさへ求むるに至るは笑ふべし。唐人旅館のつれづれに何の趣味もなく、よくもあらぬ詩を書きおこせたるが何の榮ぞや。近來尾張の士横井也有といふ人、六旬の賀をすゝむれどもせぬよしの文章に、妻子こそ悦びもすべけれ、他人にあづかるこそかはさ書けるこそ、けだかく倣ふべき志なれ。又芭蕉門人其角が句集に

七十餘の老醫身まかりて弟子ごもこぞりて泣くまゝに、予に追悼の句を乞ひける。其の老醫いまそがりける時、さらに見知れる人にもあらず。哀にも思ひよらずして、古來稀なる年にこそなごいへご、さかくゆるさかりければ、

六尺も力落しや五月雨

ご見ゆ。さすがの男なり。(卷二)

二、飼鳥

飼鳥を好む人は非にして、飼はるゝ鳥は奇特なるものなり。巢ながらに蓄はれて籠の内をおのが處とし、山野の廣寬なるを知らず。子鳥の時は付親の音を大事に聞きうけんごす。親鳥と呼ばれては、子鳥あまたつごへるを門弟子のおもひやすらん、まづ音を立てんごしてはよく餌をしたゝめて後、あるは暫し休らひ心をしづむるさまにて鳴き出づるが甚だつゝしみて引色ひきいろまでまさしくくり返し、教ふる趣なりごぞ。人は教ふるも學ぶも利慾といふものゝ病になりて、其の正を得ざるも多きに、小鳥の振舞感ぜざらんや。(卷三)

三、茶の湯



茶の湯の益は、いごふつゝかにあらくしき人も、これを翫へば起ち居おこなしく、物を取りあつかふにも見ざまよくなりぬ。又主客の禮節、たとへば夜會にあるじ手燭を携へ出で、客を迎へ、燭を石上なごに置きて禮して退く、客其の燭をこりて庭の木立なご見るふりして、わざとなく主の歸る道を照らすなごやうの心づかひ、禮の實にかなひて此の意をめぐらさば陰徳なるべし。さるに俗流の弊風、得がたきを求め金錢を費し、あるはまた其の産業ならぬ人も黠智あればこれをもて利を射るにも及び、心ざまよからずなりゆくもまゝ見ゆ。富豪の家に茶を翫ぶことを禁ずるがあるも、子孫過奢に及ばんことを懼るゝとなり。

四、はりありの聲

蹴鞠の伎の立合に、人には蹴よきやうにして渡し、蹴にくき所をこりてあつかふなご、萬の心ばへかゝらましかば。ご思はるゝを、其の伎にのみごゝまりて、他の交りにうつすべきごごゝも知らぬは念なし。されごもさすがに勝負をあらそひ、われよく人悪しかれご思ふさまには似ず。たゞし此の伎日毎に半日を費し、はりありの聲に暮を待つは惜むべし。(卷四)

五、范古が言

三十年前范古といへる畫人ありしが、長崎に學び京に住めりき。その人業をつぐべき弟子なく、纔に貧生の扇面を畫きて食料に充てたしご願ひし者兩人あり。又この人を信じて、ごかくの家事をも心を付けてまかなひし富



○藍より青く水より寒し  
「君子曰、學不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>己、青取<sub>レ</sub>之於藍、而青<sub>レ</sub>於藍、冰水爲<sub>レ</sub>之、而寒<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>水。」(荀子、勸學篇)

商の弟子一人ありしのみ。其の言に曰く、おのれは弟子をとること嫌ひなり。其の故は初學のほごは夜晝ななく入り來て學ぶが、や、筆力も出來、人にも知らるゝ程になれば、誰が弟子といはるゝをにくみて、他人師のことをさへば、その人ももごは知る人なりしなご、よそ事にいひなすもの、自他の上に數多知れり。それに懲りたりといはれき。その後晝には限らず、萬の藝能についてかうやうの人共を見きくにつけて、この范古が事を思ひいでぬこの弟子といふものゝ意いかにぞや。師に及ばざるは論なし。もし藍より青く水より寒き程ならば、かへりて手がらさいふべきものを、大かた世の人も誰が門人なりさいひはやすを、いなく、さらすさいひて、しひて人の口を塞がんとすごも得べからず。畢竟その心術（しんじゆつ）のあしき

を憎まるゝが損なりといふことを知らずや。悲しむべし、吾が才能を售らめや、とこまへてかへりて滞貨（たいか）となりぬ。

閑田 文章

伴 高 蹊

一、春 曉

雞（とり）の八聲もわきて花やかに聞きなされて、年立ちかへる空の光は、岩戸のひま見え初めし昔もかくやご心浮き立つなむ。若き時にはかはらぬ。やうく（まじ）如月（らつき）となりては、野山の梅さきいでぬらん、川ぞひ柳もみごりならん、明けはてばごく霞を分けてなご思ひて、鶯のねぐらながらの聲待つほごの心地またたのし。まいて花よりしらむ彌

伴 高 蹊

五



○後にや風の霞みつゝ花散るみや風の朝ぼらけ後にや風のうさも知られむ(續古今集、宜秋門院丹後)

生の山のながめ、後にや風のうさも知られんと聞えし散りがたの景色など、これがために旅ねせし所々も思ひいでぬる折は、魂も身にそはずこそ。

二、納 涼

夕月はいつしか隠れたるに、いづこよりうかれ來ぬらん、時過ぎたる螢の一つ二つ飛びわたるもをかしと見る程に、心しれる友の引つれて訪はるゝが、思ひかけずめづらしきにしも、先づ此比の暑さをぞいひしろふ。いこそめてけづり氷に准らへんさて水にひたせる果物出したれば、いでその氷室のわたりはいかならん、又白波のまねきよする渚もゆかしさいひ出づる人あるに、何かその海山のけうさき所はゆく道のほごにたふれなんかし。近き

○糺 京都下鴨糺の森  
○西川 京都の西を流るゝ川、桂川をさす。

○夕がほ棚 たのしきは夕がほ棚の下すゝみ男はてゝらめはふたぬして。

を思ひめぐらすに、糺をもとにてかも川の流は人ここにきそひ遊べば、なかなか水さへぬるむへかめり、西川こそいづこよりもよからめ。さいふ。あながちに河邊ならずとも、木立ものふり遣水の音なひ静にきこゆる所あらましかば、さもいふ。いなそは夏のみかは、世の塵の至らぬ所は、いつも羨まれぬるものを、ごあらがふに、又夕顔棚の下涼みに人目は、づこもなきさまして、はたつものたなつものゝ物がたりせんは、羨しからずやさいへば、中におこなしき人の、おのれ等もかう訪ひ交して、心おかず語らふは、其の夕がほのかげに劣らんやは。たゞ誠に涼しかるべきものは、心なり、身の程々にしたがひ、貪らず傷らず富めるもまごしきも、あめのまに、私の思をけちて、なん、己に恥づる所なくば、いこそすが、しからざらめや。



○巨椋の江  
山城國紀伊郡にあ  
る湖沼。

○花は根に  
花は根に鳥は古巢  
にかへるなり春の  
とまりをしる人ぞ  
なき(千載集、崇  
徳院)

さいふに、主の翁はうなづきながら、いたうこそ理ことわりだちた  
れ、ふかくは論うぜであれな、その心の譬にもすなる蓮の花  
なん巨椋おぐらの江よかめり、小舟よそひて朝すゝみに見みはや  
さんの契あるを、共におはせかしといへば、たれもかく聞  
くは先づ涼しと悦ぶ。

三、年を惜む

始あるもの、終ある理はしらぬ人もなければ、あふをよ  
ろこび別を悲しむはかしこきも愚なるもかはる所有ら  
じかし四よちの時の序ついでも花は根に鳥は古巢に歸るをはじめ  
てみそぎにすつる夏の夕暮虫の音ねのかれくに尾花が  
袖のしほれゆくもみなあはれなるにこりて一とせの遂  
に暮るゝこそ言はん方もなければ老ぬれば何事につけて

も心弱よきものから今年も今は末の松山と打ち唱ふるも  
袖に波こそ越えぬれ。

四、土さへ裂けて

土つちさへ裂けて照る日もやうくかかげろひゆく比少し息  
出づる心こころちに湯あみいそぎで端居はたぢすめればよその夕立  
のあまりならし。一すぢ吹きおこせたる風の袂たもとをかへせ  
ばあふぎもうち置きて何心もなく嘯なげくほごにやがてく  
れはてぬ。

五、石燈籠

神佛のお前に立てるはむかしよりの事なるべし。今の  
世は人の庭のせばきも廣きも、唯このものこそむねこころとお

○末の松山、奥州  
にあり  
「老の波こえける  
身こそあはれなれ  
今年も今は末の松  
山(新古今集、寂  
蓮法師)  
「ちぎりきなかた  
みにそでをしぼり  
つゝ末の松山なみ  
こさじとは」後拾  
遺集、清原元輔)  
◎大正一四、京城  
高商



ぼゆれ。木がくれに火影ほかげのしめやかにきら／＼しからぬはさるものにて、ひるのためいごよし。たゞの石だにあるを、このものゝ苔むしたるに雨のかゝりたる、花もみちのはつかに散りてごままれるなごは、梢ながら見るよりもをかし。霜の所まだらにおける、雪にうもれたるも、大かたこの物めでぬ人はあらしな。

藤つた 簞たん 册ふ 子み

上田 秋成

一、鶉居と名づけしは

庵を鶉居と名づけしは、聖人鶉居せうこ穀食こくじきの謂にあらず、鶉は常居なしといふによれるなり。このいほりにある夜ぬす人入りて、いさゝかある物をつぎもていにけり。あ

上田秋成 生、享保十七年（二三九二）歿、文化六年（二四六九）住所。大阪、京都長柄。職業。醫者、古學和歌に長ず。系統。藤原宇萬伎の門人。○聖人鶉居「夫聖人鶉居而穀食」（莊子天地篇）聖人は居の安きを求めず食も自ら求めずとなり。

○此の庵攝津長柄に住める時のこと。

した思ふ。

我れよりも貧しき人の世にもあれば

いばらからたちひまくゝるなり

その入りし壁のこぼれを、窓に作らせて盗窓と名づけて、風を入るゝ便りよしと人に語りしかば、あなしれ／＼しとてあしく云ふとも聞きし。（卷二、歌集より）

二、うとかりし人

とし月うとかりし人のもごより、度々おとづれすれご聞えぬはいかにぞや。うらみつべきものぞこいひおこせしに

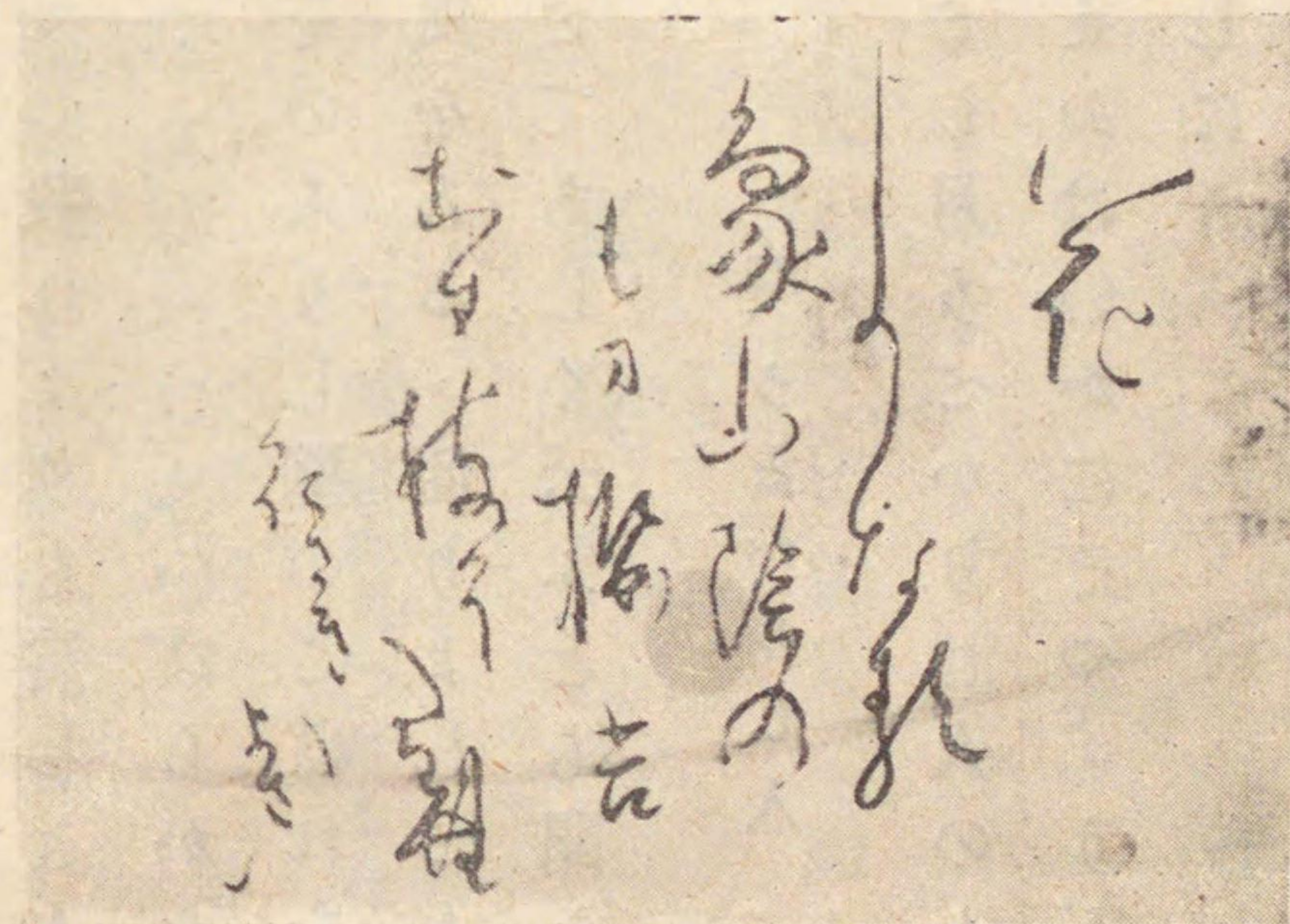
なかくにわが怠りをしるべにて

うれしき人のこゝろをぞ見し



といひしかば、心さけぬとなん。又の便にいひこしゝなり。  
(同上)

○大將殿  
源頼朝なり。この  
文は西行法行のこ  
とに就て記せり。



のふのまけじ心もあらずなりぬるぞ。八百日ゆく濱

三、八百日ゆく濱のまさご

大將殿見おこせ給ひて、昔は藐姑射の山の御みやづかへせし人の世をはかなきものにおぼししみて、身は黒くやつしたれご、月花のなげきのほまれは、物の心なき吾妻人さへ聞知りたるぞ。文字の敷だに歌とのみ思ひしも、かうさし向ひてはも

の眞砂の中には、玉こて拾ひ收めたらんをかたりて聞ゆべく仰せたうぶ。(卷四月の前)

四、君ゑみほこらせ給ひて

○君  
頼朝をさす。

君ゑみほこらせ給ひ、口こく心ささき法師なり。こよひは月見る夜ぞ、物語今は將してん。人々ごかはらけとりはやし、曉かけて遊ばん。まれ人は酒のまさるべし。鹿猿の中に立ちまじりて、歌よめこいふこも詠むまじ。た我が前にて遊べ。風ひやゝかなるにもあかず飲み、物きたなげに食ひちらす人々は、あたゝかにもこそ。此の火さり法師にまゐらせよこて白がねもて作りたる猫の形したるを取り傳へて、君より賜はるこて、前に置きたり

(同上)



五、村 雨

みな月立ちぬれば、峯なす雲の夕ごごに立つも崩るゝも、  
 天にますいづれの神のたくみならん。蟬なく木かげの  
 やごりに汗をぬぐひ、岩間の清水をむすびてあかぬ人の  
 行きつかるゝさまなるに、風さと吹きくる後より、黒き雲  
 の追ひしきて降り来る村雨は、瓶にたゝへし水をくつが  
 へすが如くに、「御格子おろせ、簾よなご立ちさうごきつ  
 つ、見たまへれば、大庭のしらまなごは、忽ち浅川の瀬に流  
 れあひて、殿守とのもりのごもの宮づこらこゝかしこの御垣のく  
 まゝにはひかくるゝなご、いごめざましな。落ちたぎ  
 つ瀬の水中には、知らぬ濁の岩を越え岸を崩しつゝ、水蒿  
 まさると見しも、唯片時に流れ落ちて、水蔭草の露おもげ

になへふし靡きあひたる、けさよりの暑さ忘るゝ夕なり  
 けり。(卷四、十雨言)

六、年 木

あら玉の年をおくり迎ふるわざこそ、千年のいにしへ今  
 のうつゝ、人もかはらぬよろこびはすなりけれ。春のま  
 うけ、つかさゝの衣はかまの色あひゆほびかにあらた  
 ならんがめでたし。民草もおのがほごゝにつけて、染  
 めぬひするめでたし。貧しきは解きあらひてうずるい  
 そぎのあはれながら、そもよろこびする心ばへなんおろ  
 そげならずめでたし。よね積みはへ、もち臼つき、海のも  
 の山のもの何くれこおくりかはす、あかずたのしき。お  
 はら賤原、大江山いく野の道を、都にかづきもてはこぶ年

○大原賤原  
 何れも山城國愛宕  
 郡にあり。  
 ○大江山  
 山城國乙訓郡大枝  
 山なり。



○蜀の山元たらん  
〔蜀山元、阿房出〕  
〔杜牧之、阿房宮  
賦〕

○大正十三、米澤  
高工

○月は流れを  
いしかはやせみの  
小川の清ければ月  
も流れをたづねて  
ぞすむ（鴨長明）

○竹の中より生れ  
しかほよ人  
竹取物語のかぐや  
姫をいふ。

木のにぎはしきを見れば、蜀の山元たらんこいひしをさへおぼゆるかし。（卷四、年木）

七、月あかき夜

月あかき夜を誰かはめでざらん。ふん月望のこよひ、庵を出で、わづかに杖をひけば鴨の河づらなり。雨ふらぬほごなれば、月は流を尋ねてやすむらん。おごをしるべに、ごめくれば、むへも清しさて人々手にむすびなごして遊ぶ。風高く吹き雲消え影さやかにて、何をか思ふくまのあるべき。月見れば、すゝろに物の悲しきぞとは、竹の中より生れ出でし貌よ人の天にいまやの別れをしむにこそ。（卷四、初秋）

秋成遺文

上田秋成

一、淺きがまゝに

あはれ世に立ち交はるべき身は、其の程々につけて智さ  
いふ物のあらまほしき。そも習ひもて付けたらんが己  
が性の如なれるはいごも難しかし。常にはかごくし  
く打ちふるまへるも、いでや事にさし當りては、我が心か  
ら頼もしからぬよ、父母のたま物ならぬをいかにせん。  
世のしれ者に嘲めらるゝ身の、人には立ち交はるべうも  
有らじなご、やうく思ひしめるも、此の二十させばかり  
が程はかなき世に立ちさまよへるを、おぼし返すにより  
てなりけり。さるは

○習、性となる。  
書經太甲篇に「茲  
乃不義、習與性  
成」



冬深み。落葉がしたの山の井の  
浅きがまゝにうもれ果て。なん。

とぞ思ふ。(鶉の屋)

二、師とても

師とても、参りつかうまつる其の始に、よくえらびて膝折  
らずば、かひあるまじき事なり。良き師にあふは世のさ  
ち人なり。おろそげなるに問ふは、まち人なり。さる人  
も年月に思ひわたりつゝ、其の教にたがふことも、たゞく  
古の跡をふみて、我は道にすゝむべきなり。師につきて  
は魚も干さそを行くこいへご、其のまねぶりてのみあら  
ば、おのが心のあやしきなり。師も我に似よごのみ養ひ  
たつるには、生れ得しまゝには生ひたゞずぞあらん。こ

は師の心のかたくななるが、又道におろそかなる故なり。  
(つゞら文)

三、江上の月

月は中空に照りかゝやきて、晝よりもけにあかく、さす  
みわたり、常世のまれ人のかりく、さ鳴きて來たるぞい  
ごめづらしな。海の色は青にびのきぬ、引きはへたらむ  
如くに、さすがに風ひやゝかなれば、衣かさましを、こいふ  
べき人もなきわたりに、今は飲みほし食ひみちて、かたみ  
にすゝろさむく、かへらや、舟ばたを叩きて、揖取にうた  
へこいふ。かれも酔ひたればにや、棹の歌いとをかしげ  
にうたふ。

四、初雁

○きぬかさましを  
秋風の寒き朝けを  
さぬの岡越ゆらむ  
君に衣かさましを  
(山邊赤人)



○菅の根、山鳥。  
おほほしく君をあ  
ひ見てすがのねの  
長き春日をこひわ  
たるかも（萬葉集  
十）  
あしびきの山鳥の  
尾のしだりをのな  
がくし夜をひと  
りかもねむ  
（八丸）  
○はるがすみかす  
みていにし  
春霞かすみていに  
しかりがねは今ぞ  
鳴くなる秋霧の上  
に。（古今集）

菅の根の長き春日、山鳥のながくしてふ秋の夜も、ひこ  
日ひと夜の名だてにして、過ぎ行く月日はいそまなかり  
けり。春霞かすみていにし雁の聲は、耳の底に残りて、き  
のふかとおもほゆるに、今日は霧のまがひに、木々の紅葉  
を慕ひて落ち来る聲するは、待つ人にしもあらぬものか  
ら、いそめづらしくなん。遠き境の人をしのび、あるは人  
の夜寒を思ひやるは、防人の妻のおのがせこが玉章やか  
けて来つらんご打ながめ、寒さも思ひやられてあはれな  
り。又老の寝ざめ慰むよすがにもなり、はた涙おとす種  
ごなれるも、聞く人の心なるべし。（初がりの詞）

五、秋もやふけゆくものから

秋もやふけ行くものから、なほ土さへさけぬべき暑さ

をいかにし物し給ふらむご、うしろめたかりつるに、御せ  
うそこを得て落居はべりぬ。一日まうのぼりしふしは、  
何くれごあるじし給ひしぞ。かたじけなき。出立もいと  
ちかづきぬ。今更に別れまるらするかなしさを思へば、  
何しに世にここには、なれむつれまつりけむご、なかく  
になむ。（文反古）

六、蜘蛛のいにはかけ奉らじ

月見るは世こそぞりて中の秋の遊びとすれご年毎に野分  
吹立ち雲のまよひ安からず或は雨にさへられ詩つくり  
歌よむ人の腹稿ごかいふものむなしくすごやさは春の  
花の前のみしづ心なしごにはあらず此の望の夜ごろよ  
尙あつけきも夕吹くかぜにはらひつくしてさやけき空



に出るひかりのますみの鏡も打むかはるゝがいとめでつべく思ふはかたは心こやおぼすらむしか言ひし人も唐にもありしかとおぼゆ白河の出居はき清めさせぬ蜘蛛のいにはかけまつらじ御駒あゆませ給へ道芝の蟲の音もこそあはれならめ。(文反古)

### 花月草紙

松平定信

#### 一、學問のこと

かの人には雪ほたるあつめし窓に年をつみて、文見る道に心をつくし侍るなり。されば世の中の事にはいごうごく侍りさいへば、さるこそ誠の道まねぶ人なりけれごほめものするものもありごや。もごより道まねぶ者は五

松平定信 生、寶曆八年(二四一八) 歿、文政十二年(二四八九) 住所、奥州白河城主、江戸にも住す 職業、大名、老中をもつとむ  
◎大正五、桐生高染  
◎大正五、岡山醫專  
◎大正七、小椋高商  
◎大正十三、小椋高商  
○雪、盛あつめし。晋の孫康及車胤の故事

○五つの常、五つの道 五倫、父子有親、君臣有義、夫婦有別。長幼有序、朋友有信、五常 仁、義、禮、智、信

のつね五のみちよりして、人を治め己を修むる道まねぶより外の事はなし。されば世のことにささく、今のあたりのみかは千させの前つ世のこそみぬもろこしの昔いまの様より、さかり衰ふるさざし、人の心のうへより、仕ふる道のくさくへに至るまでも明なるをこそ、道まねぶ人ごはいふべけれ。この世の事におろそかにてはいかて道まねぶ人ごはいふべからん。

#### 二、誠のこと

わがまことより貫き出づれば見ざることも見え、きかざることもきこゆめりさいふは、いと至りしここに、それをばかの孔子もむそちにて耳順ふことのたまへりしぞかし。さるに我がごもがらの色にそみ香にめづる心は

◎大正十四、神戸高商 ○耳順ふ 子曰、吾十有五而志於學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲不踰矩。(論語學而篇)



さらなり、いさゝかもほりする心あれば、誠をおほふにぞ  
そのさかひに至ることなき。

維新の光を浴びて  
く解ふ鐘を  
るまゝのや  
るまゝのや  
乃事思ふも  
感位可

定信

酔  
おし  
今日忘

三、みやび

風流好むもの今の世いと  
多かれど、いづれを誠のみ  
やびごはいひも定めん。  
只月を見花をみるごても  
いかでいはん。歌よみか  
らうた作るごていかでい  
はん。いまのみやびごい  
ふは、先づ我が名を銜ひて  
んご思ふより、をかしご思

はでも、古人のこのみしものは物まねびして、それもて名  
得んごするもあるべし。うたよむごても、よその心より  
よみ出でよその口まねびして、人にてらひてほまれ得ん  
ごごをのみ思へば、心にもあらぬことをよみなし、或は奈  
良の都のふるごごを集めて作りなせご、よみなす心のう  
ちは今の世の末が末なるふりを改めず、かくて古にかへ  
せりご思ふごごあるべし。又は世につかふる道をもよ  
そにして人に高ぶるみやびも有りなん。

たゞやんごごなき人は、花を見月を見るとてもいかで心  
のまゝにすべき。我獨りおもしろしごて夜更くるまで  
月花の宴に耽らば、大炊ごの、あたりはさらなり、從者な  
んごをはじめごして、睡るごごもえせじ。君はおそくい  
ねばおそくも起き出でなん。末つかたの者は猶早く起き



○槊横たへてからうたよみ  
魏曹操の故事、月明星稀、烏鵲南飛の詩を賦せるをいふならんか、曹操、曹丕共に詩人として有名なり。  
○弓に矢はげて源義家前九年役衣川の戦の時の故事

出でぬべし。ごおもひやりて、名残惜しごも打ちすて、ねやに入るをこそ。其のほご得しみやびとはいふべけれ。いでや、武夫ならば、かの槊横たへてからうたよみ、弓に矢はげて歌よみし。なんごはまごこのみやびなるべし。

#### 四、文のこと

學問は人の道まねぶごごなり。からうた作り文作るはせんなしと、よく人の言ふごごなれごみやびは花の香りの如く物のうるほひの如し。まいてかの國の文字をおぼえてふみよむとも、文字のつかひ様にて深さ浅さのたがひめあるものにて、かの國の人のごごは知り得がたか。んめれご、さすがにからうた作り文作れば、おのづからことばの外なる心をも得るものごかや聞きぬ。されば爲

ずにはしかじかし。なごて、これを禁ずべき。

#### 五、理くつのこと

ごごわりなきがごごわりのまごごなりごごわりの如行はる、物ならば何のかたきごごもあらじをさも知らで人とあらそひ政をそしりなごしてたかぶる者はごごわりのまごごを知らぬとやいふらん。

#### 六、傍見の説

かたはらよりいふことはいごよくあたるものなりかの人には衰へたまひしといへごかみ見てもさは思はずかれは今かくすれご後には悔い思ふべしなごいへごしらざるものごかし私の心だになくば傍にて見るごおなじ

◎大正一四、山梨  
高工

◎四三、高等  
◎大正一四、北海  
道大豫科



かるべし。

七、めづらしき好

よつの時の移りゆくけしきこそまたなくおかしきを、さ  
かざる折の花を咲かせんとし、ちるころにちらさじと思  
ふはいとくるし。ちれば又こん年はさきぬべし。いか  
に心をくるしむとも霜しろく氷かたき折に、はちすの咲  
くべきこそわりなし。されど咲くをまちちるををしむ  
は道なり。ちるをよそにして心とせぬはみちしらぬ心  
なるべし。

八、人を責むるは

人を責むるはあらはなるを責むべしとか聞きし先づ面

◎四〇、海兵  
◎四三、新潟醫專  
◎四四、高等  
◎大正八、神宮皇  
學館  
○よつの時、四季

◎大正一四、大分  
高商

あらためたらばよしとこそ言はめ。彼はごらの皮きたる  
羊なりとはいはじ羊にもせよ虎のかはきたらば虎にし  
てこそ養はめさらば千里をば走らずとも羊の力のおよ  
ぶだけは走りもし。なん外をせめてうちをせめざれとむ  
かしより聞きしを。

九、膽をねること

膽をねるといふは如何にして得んととたづねしに、天命  
を知るにあり、此の知るはまここに知るをいふなり。只  
こがねなどの欲は去りやすし、好名の欲ぞいとかなしき。  
古にも父君の命に背きて身を潔くし、朝廷の事をそしり  
て直をうる。これをしのぶならば何かしのび得ざらん  
とまで古より言ひしをや。只その天命をまここにしり

◎大正一〇、米澤  
高工



て疑ふことなければ、つゆも心の煩なく塵ばかりもけが  
れなし。かの浩々たる氣さもいふらん。

十、人の心

わが悪しきをば桀紂をひきてなだめ、人のよきをば堯舜  
をひきいで、とがむ。かれはかゝるあしき事なしぬと  
いへば、げにさあらんこいふ。このものかくよき事し侍  
りぬといへば、いかゝあらんいぶかしこいふ。げにも人  
はあしき心あるものかなこ言へば、よき名得まほしと思  
ふが故に人のあしきにて我が心をなだめ、人のよきをば  
妬むよりいでくるなりこいひき。

十一、人の評

唐の君と臣との道は、我が國の道はたがへれば、いひわく

へき事にはあらねど、范蠡が功とげて後船にのりて去り  
しを、かたき事のやうにいへど、代々のいさをし遂げし人  
の終りよからぬより見ればよしこはいはん。されど船  
をうかへて去るこことだにならば、難きこことはあらじこい  
ふを、よきをば、よきになして見たまへ、よきをもその上  
のここといひて責むるはいこ悪しき心ぞや、聖ならではゆる  
す人はあらじこ。

十二、治療のこと

◎四一、高等

やんごごなき人俄にいたづきにかゝれりけり。たやす  
からぬ様なりければ、今この醫師一人にまかせむもいか  
ゝなり。彼れもくすしの道には世の常ならねば、これこ  
心を合せて薬てうぜよこいへば、はじめのくすし首ふり



てさらばその世のつねならぬ者に任せ給へ、かゝるとみのいたづきを療治せむに、人ご語らひてはいかで出で來へき。こいひければ、げにもこて、初のに任せてければ、そのいたづきも速に怠りぬ。

十三、花のこと

◎大正元、醫專

なしと聞けば有りこいはまほしく、あしきこいふをばよきと事かへて言はんこそ、いごねぢけたるこそなれ。櫻てふ花は我が國のものなるを、から國にも有りこて、さまざま例たぐひなご引きつくれご、櫻かいたるもろこしの畫もなぐ、かなへりご思ふおもからうたもなければ、無しとこそいふべけれ。いでや櫻こいはでしも、花ごだにいへばこと木にはまぎれぬもの。を、ほのぐと明けゆく山際、雲か雪か

さばかり咲きみちたるも、かすみこめたる夕まぐれ、花のけはひもおぼろに見えて、此處にのみ暮れのこすけしきなごいふは淺かりけり。まいて蔓つたののびやかなれば、近劣りするなごいふは、かのここかへてまざえおふ心にいふこそなりかし。

十四、月のこと

◎大正六、高等  
◎大正八、専檢  
◎大正一四、東京  
女大

月のさしのぼる頃、曙のそらおぼえて横雲のたなびきたるに、やゝ匂におひそめたれご遠山の梢えだにいざよひて、姿も見えず、からうじてさし昇りけり。梢のうさも晴れにけりと思へば、いつしか雲の一つ出で來たるが、近よる程あやにくに月の方より雲の中にかき入るやうに見ゆ。こはいかにせむご暫しばしうちまもるに、雲の端はたつかた赤う見ゆ



るにぞ。出で離れたらば、はやかゝらむくまはあらじ。思ふに、いつのまにか又白雲の月待ちがほにたなびきて見ゆれば、胸うちつぶれてうち見るに、初の雲より出でたるひかりいそ新しうみえて殊にさやけし。かの待ち居たる雲にむかへば、又はせ入るもいそつらし。

十五、雨のこと

◎大正八、京城醫專

すへて春は雨こそのごかなれ。軒ばよりかすみわたりていごこまやかに降れるが、衣うるほせごも降るごは見えず。軒の玉水も間遠に音して住みすてし蜘蛛のいに玉ぬくけしき、庭の面の枯生の底に緑やゝそひゆくも、柳の糸の動きもやらで露そふもごもにいごのごかなれ。燈火かゝげても何ごなく光しめりたるに、鐘の音のほのか

にひゞき來るも心すみわたりぬるものぞかし。

夏の暑さにたへかぬころ、雲のみなぎり出づる勢ありて、風ひごしきり吹き落ちたるに、柳蓮葉なんごの葉うら白く見せたるもすゞし。やがて大きやかなる雨の間遠に落ちたるが、後にはしきりに降り來て物音も聞えず、土のほひ來るもいと心地よし。軒端は玉のすだれかけたらんやうに、たま水の絶間なく落ちたるに、庭は一つ湖となりて、あるは瀧おとし又は水はしらせたるに、人々しばし物いはでうちまもりたるもをかし。やゝ雲うすくなれば、池の面には數ふるばかり雨見えて、小鳥など庭へをどり出で、餌ひろふさまなり。はじめ雲のたち出でし方は、はや空の一しほみごりに見えて、虹なんご見ゆるに、木々の緑の庭濼にかげ見ゆるもいとすゞし。



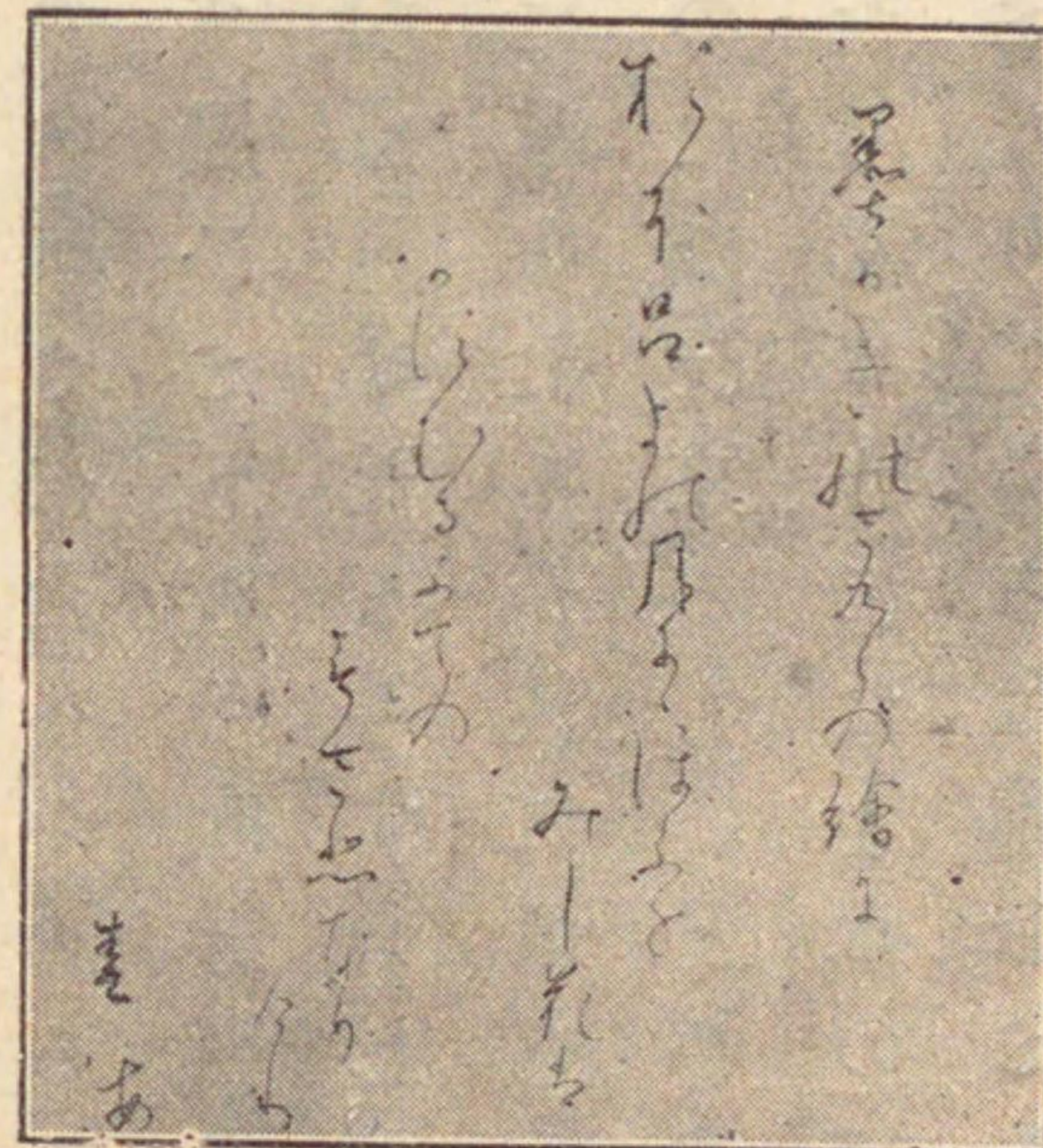
琴後集

村田春海

村田春海 生、延享三年（二四〇六） 歿、文化八年（二四七一） 住所。江戸深川本誓寺 職業。和學者。 學統。國學を眞淵に、漢學を淇園等に學ぶ。 ◎大正八、高等 ◎大正十三、大坂外語

一、法

よろづ何の業にも古より法となすしるべありて、それによらざらん。はまことの心を得難く、其の法を得たるはまめやかなりさて、人もうべなふめり。こはもごよりさることながら、ふかく事のもごを考ふるに、萬の事はじめに法を設け置きて、後にそのわざをなし出づるに、はあらず。そのわざあるが上にこそ。法てふことは出で



來めれ。かゝればわざは本にて法は末なり。何の業にもよく心をふかめて其の道に入りたらん人は、われより法をはじめつべし。（燒畫記）

二、世の人のことわざ

空蟬の世の人のことわざ、よろづに様々なれど、時にそむき折にあはでつきくしからざらんは、いみじきふしなり。ごも、いかで心のゆくわざなるべき。されば夏の日は埋火のあたゝかなるを思はず、冬にひみづの涼しさをば忘れつべし。古の人も春の綱代八月の白襲をこそ、すまじき事のためしには引出でたりけれ。かゝればはかなきすさみも、折にあひたるはをかしく、見所なき草木も時を得たるはめづらかなん。覺ゆめる。しかはあれど

◎四〇、高等

○春のあじろ云々 「すさまじきもの、ひるほゆる犬、春のあじろ、三四月の紅梅のきぬ、（中略）八月のしらがさね」（枕草紙）

◎大正八、高等



人草しげき衢の所せく門立ちならべたらんあたりには、  
時を過ぐし折を失ふたくひ多くて、月にたよりよきは花  
にうとく、水に由あるは山はるかにて、四つの時のめぐる  
に随ひて、心をやるべきすまひはいさもく、難しや。

(隨時樓記)

三、世のならはし

あはれ世のならはしこそ。はかなきものはあなれ。貴き  
賤しき品いさ異なりこいへごも、おのがじし心ゆくばか  
りなるは稀にて、たゞ足らはぬ事のみぞ多かりける。花  
を思ふさては梢の嵐を恨み、月をめづるとては尾上の雲  
をいさふためし、誰かは免るべき。林に宿る鷓鴣はわづ  
かなる小枝の陰をたのみ、流れに水もこむる鼠はたゞ腹

◎三七、仙臺醫專  
◎四一、七高  
◎大正十三、福島  
高商  
◎大正十三、小樽  
高商

○林にやどる鷓鴣  
「鷓鴣集」深林「不  
過」一「枝」。偃鼠飲  
河、不「過」滿腹「  
(莊子)

を満たすに過ぎずこそ、古の人もいひつれ。かゝる理  
をだにわかたば、限りあるこの世に限りなき事を思ふべ  
きかは。(知足庵記)

四、水上澄みて流るゝ河

みなかみ澄みて流るゝ河も、おち行く末となりては、やう  
くあらぬ塵あくたにけがれて、遂にもこの清き姿をう  
しなふ事あり。詞の道も又かくの如し。あがれる世の  
みやびかなりし手ぶりも、あまたの年なみをわたりては、  
いつしかとささびたるならはしこそ多くは出で來にた  
れ。かれ古はみなもとなり、今は末なり。その源にあり  
てはもごめずとも、おのづからに、すみ行くながれに従は  
む事はやすかるべきを、後にありては、あくたを拂ひて、こ



ごさらに清き瀬をたづぬるわざなれば、いと難しごもか  
たしや。(庚子道の記序)

五、文一くさを作り出てむには

すへてふみ一くさを作り出でむには、おのがひこり思ひ  
得たるふしありて、人のたすけとも成りぬべきすぢあら  
ば、なしてもありなむ。はかしくしき心もあらで、たゞ人  
の言へることのみ拾ひ集めつゝ、おのが思ひ得たらむさ  
まに言ひなさむは、いご品おくれたるわざなり。なまな  
かなる初學うしなまひの人は、ごこのゆるゑよしをもよく知らねば、い  
ちはやきわざなりご思ひぬべし。されご心ある人の見  
ば、おのづからあなづりおとしむべき業にこそあなれ。

(若桂序)

六、歌とは

おほよそ空蟬の世にありごある人折にふれ事に遇ひて  
心に思ふ事あらざるはなし其の思ふ事ことひたぶるなる時  
は、あながちに心に包み持てあらむ事を得ず其の心につ  
ゝみ得ぬ時は必ず聲にたてゝなげく其のなげくにつけ  
てはやがて言ことに出でゝうたふ其のうたふ時は詞ことばにあや  
あり心にこそわりありこれをしもぞ。歌うたはいふなる。

(厚顔抄補正序)

七、手かく業

人のことこゝろわざ多かる中に、しなわかるゝものは手かく業  
になんありける。そが中に先づうち見てけちめいちじ

◎大正十一、京都  
府立醫大豫科



るきものは、ゆきかひぶみの書きざまなりけり。はかな  
き筆のすさみに、あやしくもあてにも、いやしくも見ゆめ  
るものにし。あれば、いごつゝましきわざなりや。

(行きかひ文の序)

八、茶の湯にすけるは

昔びこの茶の湯にすけるは、事そぎ物おろそかなるを好  
めりしに、今の世には、得がたき品をもごめ、あたひなき  
さはひを争ふ事こそなりにたる。さるはもごしづけき  
心を養ひ、世の塵をのがるべきわざなるを、今は時にきそ  
ひ、人に銜ひて、よろづほこらしげなるは、人の心のうつろ  
ひゆくこと、すべて世のならはしこそはいへど、うたてある  
わざとぞなりにたる。(長曾彌又玄におくる序)

九、伊豫簾高うかゝけて

いよす高うかゝげて、ふけゆく影をひこりうちまもりて、  
つらく思ひ見れば、おのづから心の塵も名残なくて、な  
べてよろづのことくさこそ、くまなく思ひ出でらるれ。  
さるは干草の花に露のほひを添へ、絲竹の音のひき  
をすますらんたぐひの艶になまめいたるよのつねのを  
かしさをば、更にもいはじ。いでや澄みのぼる光の高く  
あらはれて、人の目ごめむに、まばゆきばかりなるも、時  
のまにあやなき霧のまよひにかき消たれて、たゝ闇かこ  
ばかりたごり、中空にしばしありと見ゆるも、やがて西に  
なるここのごめ難きや。浮世の雲定めなくて、昨日は  
さかえ、けふは衰ふる世の有様こそ先づおぼゆれ。

◎大正一四、名古屋高商



又淺茅が露にやざれども、所せくもおぼえず、海原の波に  
浮かびても、廣きを知られざるは、たかきみじかきおのが  
じしの住かのきはくにつけて、身のやすかる心しらひ  
によそへつへきもあはれなり。

又おちたぎつ瀬々の白玉はこれがために心清さをませ  
ご、野澤の水のにごりに宿りても、さらにみしぶの汚しさを  
をきはざるは、世にたがひ時に忤ふ事なくて、光を韜み  
跡をかくすさかいふらむさかしき人の心のおくさへ汲  
みし。られぬべし。

又有るを有りとも見ず、無きを無しとも定めあへぬ聖心  
のさとりも、たゞ此の光をみがきてこそ照すべけれ。か  
ればいたづらに我が世の傾くを歎き、老なるものご  
のみ打眺めむは、いとく心あさしや。(對月言志といふこ

とを題にて)

十、思ふ人々

つれづれ降りくらしたる長雨も、やうくはれ間おぼ  
ゆるに、かゝる夕をたゞにやは過すべき、春のゆくへをも  
しのばん、花の名残をも見ばや、いざこて、葎生の門おごろ  
かすなるは、我が相思ふ人々なりけり。(花ををしむ記)

十一、身一つのすさみ

そもく花は春にありて賑はしきにより、月は秋にあ  
りて悲みをぞ起すなる。今この朽ち翁が心にごりてい  
は、身既に老いにたれば、つぼめる花の盛り待ち出でん  
樂もなく、品いやしければ、花々しき世を経て時にかをら

◎大正一〇、北海  
大豫科

○朽ち翁  
老翁のこと、春海  
自らをいふ。



ん願ひもかけず。たゞ鏡に打ち向ふ折しも、頭の霜を見  
ては月の影かど驚き、かたぶく齡を思ひては入り方の月  
ぞ。身によそへつべき。かゝれば花には自らにうごく、月  
にぞ心の引かれける。さはいへ、こは我が身一つのすさ  
みなり。大凡人のためにはいかでかまねびも出でん。

(月花のあはれ)

十二、陸月ばかり山里人のもとへ

◎大正一〇、小樽  
高商

○谷の戸  
谷の戸をとちやは  
てつる鶯の待つに  
音せて春も過ぎぬ  
る。(拾遺集)

年あらたまりては、なに事かおはすらむ、春の日數もまだ  
あさきに、岡への下もえは、今しも御袖にたまるばかりも  
摘み初め給ひつや。谷の戸のはつ音は、いつよりか御朝  
いの枕をばおごろかしまゐらせたる。いさなむゆかし  
き。こゝには、こぞの雪の名残にや、風のけしきも冬めき

て、猶かすみもやらねば、ちまたの柳のうちけぶり行かむ  
程も心もこなう見え侍り。

十三、上田秋成がもとへ

春たちかへるのどけさは、わきて都の空こそゆかしう侍  
れ。いまは巖いわはの中なる住ひをふりすて給ひて、巷の花柳  
に立ち交らひ給ふらむは、いかに心ゆく御住かならまし。  
巢ごもれる谷の鶯いかなれば

都の春に心ひかれし

となむ聞えまほしき。されごうき世の塵の逃れがたか  
なるも、猶市のうちに隠れけむ古人のためしにならひ給  
ふへければ、世のさが知らぬ人々このみ、みやび交し給ふ  
らむは山住やますみのつれづれならむよりは、こ推しはかり参ら

○市のうちにかく  
れけん古人  
「小隠々ニ陵斂」大  
隠々ニ朝市」(王唐  
瑠、反招隠詩)



○遠くて近きたぐ  
ひ  
遠くて近きもの、  
男女の中、極樂の  
道(枕草紙)

するものから、いたづらに千里のよそにありて、萬まのあ  
たり聞え承らぬこそあかぬ業なれ。さはいへ、雁の翅の  
行きかひだに絶えずば、中々に遠くて近きたぐひこや思  
ひ慰み侍らむ。柳の糸のくりかへしつゝ、今年もごだえ  
なく、聞え参らせばやと思ふを、ゆめ鶯の鳴く音な惜しみ  
給ひそ。

十四、雪月花のさだめ

の。ご。け。き。春のあした、うら／＼ご紐さきそむる花の心を  
ご。は。む。に。は。先づかしこの野さは、この山ざご霞をし  
ぎ巖をたごりて、うるはしき蔭を求めてこそ。類なき匂を  
も見るべけれ。おごろなる垣根のうち、あやしき伏屋の  
前に、一木二木を移し植ゑたらむは、なかく／＼に花のおも

てをぞふせつべき。

眞萩さく秋のさかり、くまなき月の光は所をわかねご、あ  
るは高殿のすだれをからげて千里の空をのぞみ、あるは  
行く川の流れにうかびて水底の影をもてあそびてこそ  
心の雲もはるべけれ。小家すきまなく立ち並びひろか  
らずかこへる庭にうづくまり居て見んには、塵あくたの  
けがしきも澄み渡る光にいよゝあらはれゆきて、かへり  
ては月うさかれこそ覺ゆめる。

葎にさちたる門のうちもたゞ一夜の中に玉しく庭ごう  
つろひ、あばらなる板屋が軒も時の間に銀をちらせるば  
かりに姿をかへもてゆきて、朝夕のいぶせきも更に覺え  
ず。また目なれたる市の巷も忽に景色をそへていひし  
らぬ山里の思をなし、行きかふ商人の簞笠までも見所あ



り。こ。覺。え。は。か。な。き。木。草。萬。の。も。の。も。さ。な。が。ら。め。づ。ら。か。な。り。と。の。み。目。こ。ゝ。め。ら。る。ゝ。は。た。ゝ。居。な。が。ら。に。し。て。境。を。う。つ。し。所。を。か。ふ。る。こ。や。い。ふ。べ。か。ら。む。か。く。て。こ。そ。心。に。た。ら。は。ぬ。こ。こ。な。く。外。に。う。ら。や。む。べ。き。ふ。し。も。あ。ら。ね。

(雪をめで)

清水濱臣

### 泊 泊 文 藻

#### 一、文に富める人

牛に汗し棟木にみつばかりなりとも、心のみやび所せくしてつみおける言の葉數少なからんをば、いかで文ふみにこめる人こは言はん。よしや一厨く子こにをさめ足らぬ程なりこも、腹はらにこめたる言葉つきざらましかば、千卷五百卷

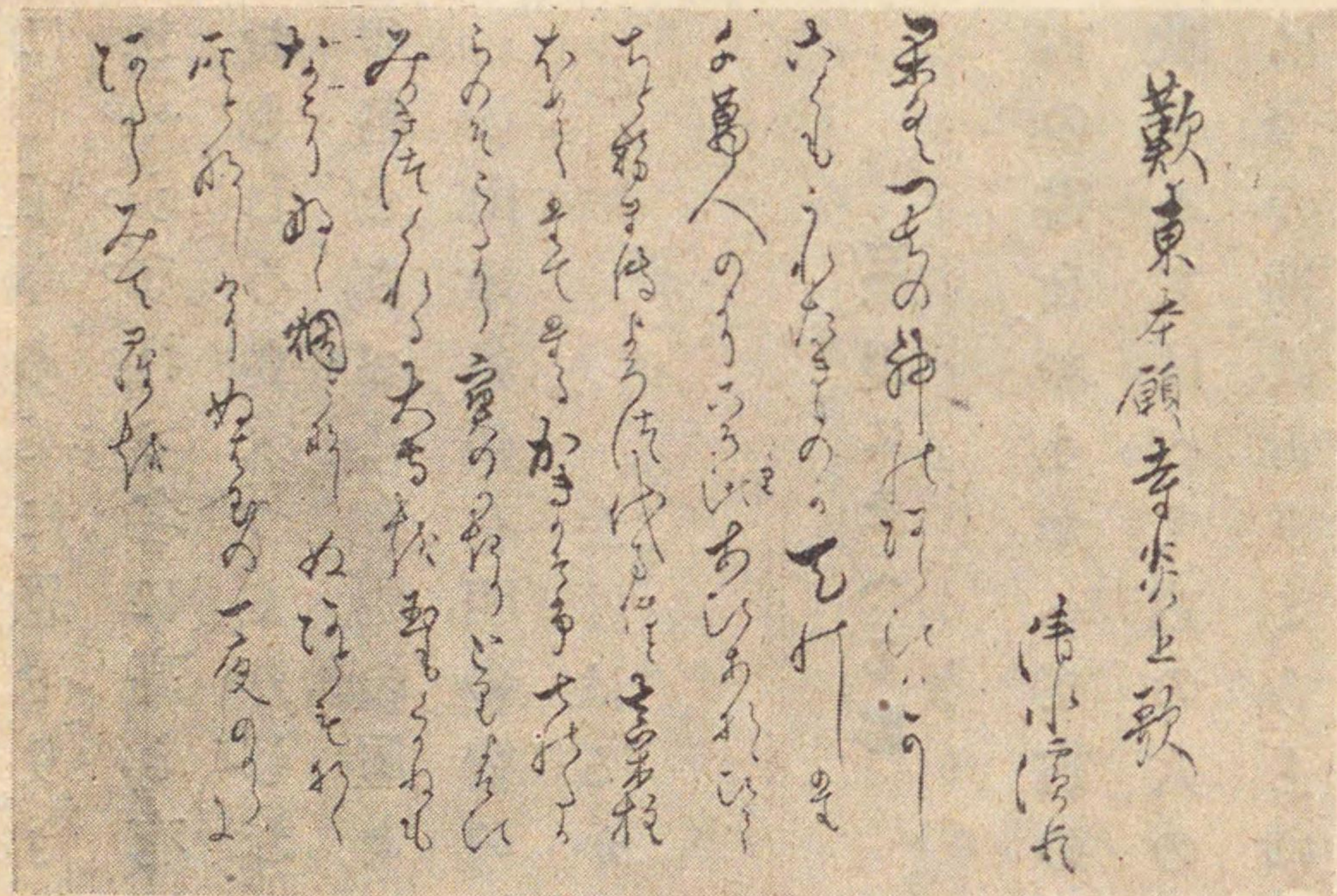
清水濱臣  
生、安永五年(二四三六)  
歿、文政七年(二四八四)  
住所、江戸の上野、浅草等  
職業、醫者。古學和歌に長ず。  
學統、村田春海に學ぶ。  
○牛に汗し  
書物の多きこと。  
柳宗元の陸文通墓表に  
「其爲書、處則充棟宇、出則汗牛馬」

ゆたかなる主あるしとこそいはめ。文の屋やと名におふ屋の主

こゝに思ふことあれかし、こゝに心こゝこむるふしなからじや。(文章窟記)

#### 二、有明の屋

夕ぐれ待たでさしのぼるもをかかしきものから、曉あけかけて待ち出でたるばかりえんにもあはれにもおぼゆるはあらじ。中空ちゆうくうに光をさまりたるなごりさへいいと似るものなしや。しらぬ千里せんりの他處たよ



歎東本願寺炎上歌

清水濱臣



にして心<sup>\*</sup>あてに思<sup>\*</sup>やりき<sup>\*</sup>こ<sup>\*</sup>ゆる<sup>\*</sup>いかにぞや。あるまじ<sup>\*</sup>きやうなれ。名に高き有明の嶺を軒より西に見なして、おもしろき家づくりしおはすと聞<sup>\*</sup>くは、やがて其の家名をさへに有明の屋とたへ<sup>\*</sup>きこえまほしくて

山の名の有明の宿の軒の月

かげはるかにも思<sup>\*</sup>ひやるかな

(有明の屋の記)

三、形にそへる影

古の書をか<sup>\*</sup>うがへて古の人の心<sup>\*</sup>しらひをうか<sup>\*</sup>ひ、古の歌をあ<sup>\*</sup>ちはへて古の人の詞づかひをわきまへ、さて後には今の世にありとあらゆるこ<sup>\*</sup>ご<sup>\*</sup>く<sup>\*</sup>さ<sup>\*</sup>を、書にも作り歌にもよみぬへきこごなり。そこに心<sup>\*</sup>うさ<sup>\*</sup>き人たちは、古の

書<sup>\*</sup>ら朝夕にし古の歌<sup>\*</sup>ごもそらにうか<sup>\*</sup>ぶごも、心もちひ大よそならんからには、その詠みいづる歌た<sup>\*</sup>古人の口まねびばかりにて、たごは<sup>\*</sup>形にそへる影のたちるふるまひ違はず見ゆるものから、手にさ<sup>\*</sup>はらふこごなきにひさしかりぬべし。いご口惜しく心おくれたるわざにはあらずや。(春郷家集序)

四、心のまゝ

いでや水を見よ、荒海のしほのみちひも、山川のたぎつはや瀬も、鏡なす池の面のさ<sup>\*</sup>なみも、水の心にかはることある。廣きには深く、早きには勢つよく、所せきにはおのづからこまやかに、ほご<sup>\*</sup>にそのけ<sup>\*</sup>ちめ見ゆるぞかし。人の心<sup>\*</sup>おきてもまたしかぞあるべき。時得る折は

◎大正六、東北農大



仕への道にいそしかりしも、時失はゞ又しづけさを樂みて、盛なるを喜ばず衰ふるをもくやまず、よく天地のおのづからなる理を思ひこりて、世につれ時に従ひ、身をみさをにもてつけ、羨まず歎かず、其のほごくに心を慰めうき沈む世の淵瀨をやすく流れ渡るこそ、行く水の清き真心ごはいふべく、世を身のまゝとし身を又心のまゝとすごはきこゆべけれ。(心適菴記)

五、落葉

○神代もきかず  
「ちはやぶる神代もきかず龍田川からくれなるに水くくるとは」  
(古今集。在原業平)  
○水もなく水もなく見えこ

神代もきかずごながめけん龍田の川の秋の末、水もなくごつゞけたりし大堰川の冬の初こそ、聞きわたるにもいかばかりなる紅葉の淵ならましごゆかしけれ。吉野川の春のくれも、花のしがらみかけて思はぬにはあらぬも。

そわたれ大井河岸の紅葉は雨とふれども  
(後拾遺集、藤原定頼)  
○唐のなにがしの江、云々  
蜀江の錦をいふ。蜀の地の川(即ち錦江)にて濯ひあげて織り成せる錦なり。尤もうるはしき錦と稱せらる

の。から、かくばかり優なる紅葉の錦にはたち及ぶまじうなん。唐の何がしの江にさらすごか聞けるも、知らぬ境思ひよそへられて

花田色の帯かごまがふ河の面に

ゆはたご見えてちるもみぢかな

(落葉浮水といふ題にて)

六、きぬたを聞く

近しご聞けば遠し。遠しごきけば近し。しきるもたゆみ、たゆむもまたしきる。雁がねの聲の砧をさそふにやあらむ、砧の音の雁がねに通ふにやあらむ。あなあやしあなあやし。そもこの音のかなしきか、住む里のさびしきか、打つ折のうきゆるか。皆あらず、聞く人の心のさび

○大正四、山口高商



しきなり。(砧をきく詞)

七、墨田川舟板辭

○日も暮れぬ云々  
武さしの國と下總  
の國との中に、い  
と大なる川あり、  
それを隅田川とい  
ふ。(中略)かぎり  
なく遠くも來にけ  
るかなとわびあへ  
るに、渡守「はや  
船にのれ、日もく  
れぬ」といふに、  
乗りて渡らんとす  
るに云々(伊勢物  
語)  
○耳をたふとみ云  
々  
張衡の東京賦に  
「莞爾而笑曰、若  
客所謂末學膚受  
貴耳而賤目  
也。聞く所を尊  
び現在見る所の  
ものをいやしむ  
ことなり。

日もくれぬと急がしけんそのかみの渡し舟にはあらじ  
ものから、同じ流に年を経し破舟の萱間に朽ちし名殘所  
々むしばみたるさへなかくにをかしきは、世の中に寶  
ごする阿武隈河の埋木、最上川の舟板にも何かはをされ  
りご見なすべき。いでやかれをのみゆかしみて是をし  
もめでざらんは、唐人の言の葉に、耳をたふとみて目をい  
やしむごか言へるたごへにひごしかりなんかし。古物  
あつかひ好むくせある稻川ぬし、この朽板に何にまれ一  
言をご請はるゝまゝに、つか短き筆にまかせたるそゝろ  
ごごかくなむ。

松屋文集

藤井高尙

一、硯に書きてそふる

よろづの調度なご目なれぬさまにやうかへて作りたる  
は、今めかしきにしばしは目とまれご、よく見ればそばつ  
きざればみて心劣りし、昔やうにてうるはしきは、うはべ  
はきえて見ゆれごやうくに見まさりするものなりか  
し。それよりも人のちから入れつくれる所のすくなく、  
おのづからなるは猶まさりけり。(卷下)

二、秋の山水のかたに

ものゝあはれは秋ぞまされるご昔の人のいひしはさる

藤井高尙  
生、寶曆五年(二  
四二四)  
歿、天保十一年(二  
五〇〇)  
住所。備中、賀陽  
郡宮内。  
職業。吉備津宮宮  
司。  
學統。國學を宣長  
に、和歌を榊井一  
室に學ぶ。

○ものゝあはれは  
春はたゞ花のひと



へに咲くばかりも  
のゝあはれは秋ぞ  
まさされる(拾遺集)

○柳さくらを  
見わたせば柳さく  
らをこきませせて都  
ぞ春のにしきなり  
ける(古今集春、  
素性法師)

○しくものぞなき  
てりもせずくもり  
もはてぬ春の夜の  
おぼろ月夜にしく  
ものぞなき(新古  
今集、大江千里)

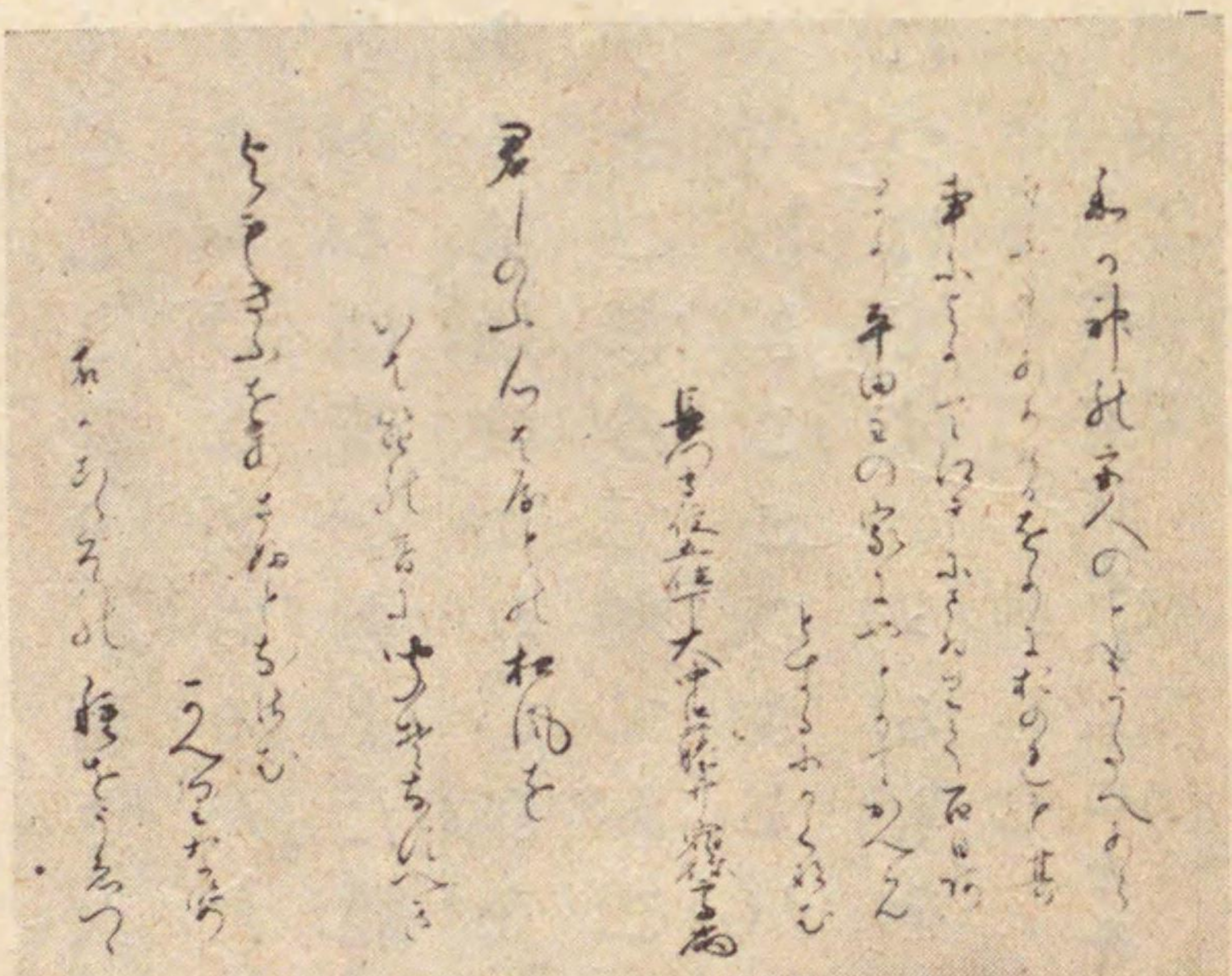
○心しれらむ人  
あたら夜の月と花

事ぞかし。この山水やまみづのかたよ、木々のもみちもまだ色う  
すき頃なれば、こゝはとさりわきてほむべき所なけれど、  
そこはかとなく霧わたれるが、いひしらぬけしきにて、柳  
櫻をこきませたらむ春のながめよりも、げにあはれにい  
みじくあくよなうおぼゆごかや。(巻下)

三、山春月といふことを

しくものぞなき昔のなにがしがいたく愛あしも此頃の  
月ならむこそ、ろに心うかれて暮るゝより端近くゐて  
ながめつゝ待つに霞ふかく立おほひていとくらくらうい  
ぶせきに山ぎはのやうくあかくなるは出づるなりけ  
り霞も少しは晴れて照りもせずくもりもはてぬながめ  
はさやかなる秋よりもまさりて心しれらむ人に見せば

とを同じくば心し  
れらむ人に見せば  
や(後撰集、源信  
明)



や。この月ばかりにもい。は。ま  
ほ。し。う。な。む。(巻上)

四、閑中五月雨といふ題を

むぐらの宿はさらぬ時だに淋  
しきならひなるを、五月雨ごごゆの日  
をふればいとくいぶせさもま  
さりて、たけきこゝは空をの  
みうちながめつゝ、はれまなし  
やこいふぞ此頃のこゝさななりける。ほごなき庭に草  
もたかくなり、柴がきなごも打うよるほひて、たゝ軒にかけ  
たる蜘蛛の糸に玉をぬきこめたるのみぞ、はかなき宿のひ  
かりにて、いさゝかつれくまぎるゝ見物になむ有ける



(卷上)

五、早苗といふことを

たなつ物作るはいごもくからき業なれど、さなへごる  
 様はくるしげにも見えず、歌うたひの、しりてこゝろゆ  
 くけしきなり。若き女ごものきたなげならぬあかきた  
 すきかけなご、さるかたに花やかなるよそひしており立  
 ち、あるは苗をあまた籠に入れ畔づたひはこびもてゆき、  
 あるは媪のかれいひをあやしきものに入れて持ちつゝ、  
 うまごをゐて来て、あこよくこよぶなごさまくくだ  
 くしきこの、さすがにあはれなる事ごも多かり。所  
 につけてはかゝるもをかしきみものになん。(卷上)

六、夏夜といふことを

○夏はよる云々  
 「夏はよる、月の  
 頃はさらなり、や  
 みもなほ螢とびち  
 がひたる云々」  
 (枕草紙)

夏はよる、月の頃はさらなりと、清少納言のいひけるさる  
 こそぞかし。暮れはて、夕やみの程はしばし物むつか  
 しげなれど、それも遣水のほごりに篝火たかせなごすれ  
 ば、をかしきほごなるひかりに、木の葉の色の青やかにき  
 らくご見えたるいごすしげなり。月出で、は又更  
 にいはむ方なし。端居してながむるに秋よりもまさり  
 てあかずこそあれ。(卷上)

七、萩風といふ事を題にて

秋のはつ風待ちごるたよりにこてみぎりに萩を植ゑお  
 きたるに年々に廣ごりつゝ、軒をあらそひて生ひのぼれ  
 ば、うたて所せうも茂りゆくかなごはてくはいふせき  
 までに思はるゝに風のやごりになりて打ちそよめけば



○心づくし  
木の間よりもり來  
りる月のかげ見れ  
ば心づくしの秋は  
來にけり。(古今  
集)

◎大正一四、福島  
高商

聞くたびに物思ひのもよほさるゝもいごゝわびしさり  
さてこの音なからまし。かば。ながき夜の寝ざめくまぎ  
るゝかたなく淋しからまし。げに昔びごもいひしごごご  
にかくに心づくしなる秋にぞありける。(卷上)

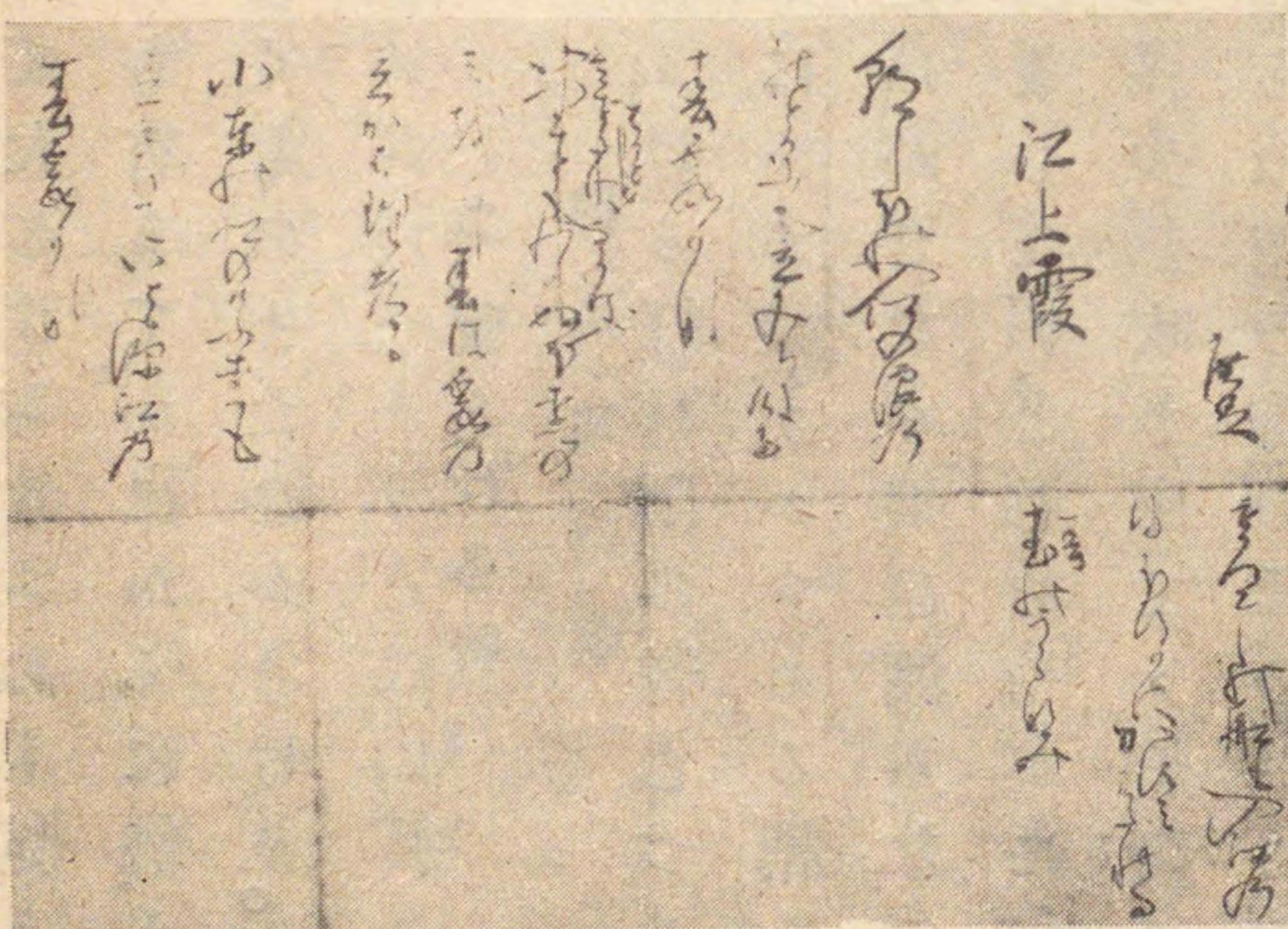
八、智といふもの

古ご今ごはごごなるごごも多かれごものしれば智ご  
いふものほごごに大きになればおもひはかりせま  
らずして古か。り。つれば今はかうくしてごごなみ  
くならぬをかしきかうがへも出で來ぬ。くよき人に  
なるわざにしあれば上なくたふごごものになんかくめ  
でたきものなるを鳥獸はすぐれたるもえせずわくらは  
に人ご生れて學ばでや。は。あるべき。(松の落葉)

樞園文集

中島廣足

中島廣足  
生、寛政四年(二  
四五二)  
歿、文久四年(二  
五二四)  
住所。長崎、大阪  
熊本等  
職業。肥後細川侯  
國學師範役。



一、書

夏日のくれがたきをも知ら  
ず、冬夜の永きをもおぼえぬ  
は、書見る心のたのしきにな  
むありける。さるはみちみ  
ちしきすちのはさらなり、家  
々にしるせる何くれのふみ  
又かりそめの筆すさびなど、  
からやまごいにしへ今ご、い  
ごさまさま多かる中に、わが



たてたるすぢならぬも、見もてゆくまゝには、ようある事  
ごも有りて、かにかくに飽かずおもしろく、樂しきは、書に  
しくものまたなかりけり。

二、萱ふける軒

萱ふける軒は雨の音しづかにて、池水のあやこまやかな  
るにいさ深うかすめる梢より翅しをれたる鳥ごものそ  
こはかさなく飛び渡るなごいさいたうをかし暮れぬれ  
ばましていとしめやかにて見る書さへ今一きは心し  
みぬ。風少し吹き出で、燈臺の火のまたきたるに何とも  
知らぬ花の香のほのかにうちかをりたるなごをかし。

三、萩のまがき

かき數へたる七くさにはもれにたれご、なほをぎばかり  
あはれなる物はなかりけり。やうくしげく成行ころ  
ほひより朝夕露もすゞしげに打なびきつ、いつしかご  
秋たつ風に音たて、人待つ夕はそれかとのみおぼめか  
れ、ながき夜の窓の下には文机のねぶりをおごろかしな  
ご、唐國のなにがしがわらへに言問ひけむさまもおもひ  
出らるかし。

四、山家初春

年月の行へもしらぬ山賤はと詠めりしやうなるすみか  
には、改まりし春のしるしも無きものから、きのふけふ晴  
れ渡りぬる。日影に、峯の霞も立ちそめて、やうく瀧のひ  
ゞきのきこゆるは、うち出づらむ浪の初花のけしきも思

◎大正二四、山口  
高商

○かきかぞへたる  
秋の野に咲きたる  
花をおよび折りか  
きかぞふれば七く  
さの花  
萩の花尾花葛花な  
でしこの花をみな  
へし又藤ばかりあ  
さ顔の花

(萬葉集、八)  
○唐國のなにがし  
予謂童子此何聲  
也、汝出視之、童  
子曰、星月皎潔、  
明河在天、四無  
人聲、聲在潮間。  
(歐陽修、秋聲賦)

○年月のゆくへ  
年月のゆくへもし  
らぬ山がつかは瀧の  
音にや春をしるら  
む(拾遺集、右近)

○うち出づらむ浪  
の初花



谷風にとくる氷の  
ひまごとにおち出  
づる浪や春の初花  
(古今集、源富純)

ひしられぬ。

五、柳 は

柳はひろき庭の池のほさりなごに植ゑわたしたるはさ  
らなり門のあたりに生ひたてるが、ほのかにひらけたる  
まゆを行手に見渡したる、いみじう懐しく住む人さへゆ  
かしくぞ覺ゆる。昔は都の大路のたてぬきに、いご多く  
植ゑられたりさか。げに櫻にこきませたらむ春の錦は  
またしくものあるまじうこそ。

○櫻にこきませた  
らむ  
見渡せば柳さくら  
をこきませて都ぞ  
春のにしきなりけ  
りる(古今集、素  
性法師)

六、春 月

梅はさくうつろひて櫻はまだしき程つれぐとながめ  
くらしたる空に、珍しくさし出でたる月のにほひふかう、

○しくものもなき  
夜のさま  
照りもせずくもり  
もはてぬ春の夜の  
おぼろ月夜にしく  
ものぞなき(新古  
今集、大江千里)

○ちゞのこがれ  
「春宵一刻價千金  
花有清香月有陰」  
(蘇東坡、春夜詩)

七、幽栖秋來

そこはかとなく霞みあひたる梢ごものいごなまめか  
しう、身にしみておぼゆるは、げにしくものもなき夜のさ  
まになむ。ふけゆく風はまだいご寒きに、すだれは下し  
たれごいも寝られず、やうく夜も短きほごおぼえて、山  
寺の鐘の音におごろきがほなる鳥の聲もをかしうきこ  
ゆ。立ち出で、見れば、入方の空はいご深く霞みて、月の  
ゆくへもたごしきに、少しあかり行く山際のけしき  
は、まここにちゞの黄金にもかへつべくなん。

八重むぐらは軒をあらそひておひのぼり、はかなき門さ  
へいつしか閉ぢはてたるに、庭の萩原音たて、俄に吹き  
くる夕風は、いごあわたしく過ぐる月日も知らぬ住家



に、年もなかばにさか、うちつけにおごろかしがほなるも  
な。か。く。に。心。づ。き。な。く。な。む。か。く。て。野。分。立。ち。な。ば。い。か  
に。荒。れ。ま。さ。ら。む。さ。す。ら。む。ま。れ。に。も。誰。か。は。訪。れ。ん。ご。思。ふ  
に。い。ご。心。細。き。も。の。か。ら。そ。れ。こ。そ。は。厭。ひ。離。れ。ぬ。る。世。の  
本。意。な。れ。ご。思。ひ。な。す。に。も。な。ほ。か。く。あ。な。が。ち。に。た。づ。ね。來  
た。る。秋。こ。そ。わ。り。な。け。れ。

八、つばくらめ

い。と。う。ら。か。な。る。日。思。ふ。ご。ち。う。ち。つ。れ。ゆ。く。大。路。に。つ。ば  
く。ら。め。の。こ。な。た。か。な。た。に。飛。び。か。ひ。て。ふ。ご。袖。の。下。す。ぎ。た。  
る。手。に。も。捕。へ。つ。べ。く。て。い。と。を。か。し。雨。の。な。ご。り。の。な。ほ  
か。わ。か。ぬ。方。な。ご。に。下。り。ゐ。て。ひ。ち。を。ふ。く。み。つ。わ。ら。は。べ  
の。走。り。く。る。に。驚。き。た。ち。遠。く。翔。り。ゆ。く。も。を。か。し。梁。に。巢

◎大正一四、廣島  
高師

く。ひ。て。い。つ。の。程。に。か。あ。また。の。雛。お。ほ。し。た。る。が。飛。び。來。る  
親。を。ま。ち。て。口。の。か。ぎ。り。開。き。つ。鳴。き。騒。ぎ。た。る。さ。ま。は。い  
み。じ。う。こ。そ。あ。は。れ。な。れ。

九、冬 月

人。の。ゆ。き。か。ひ。も。絶。え。た。る。大。路。の。こ。ほ。り。わ。た。れ。る。を。踏。み  
な。ら。す。足。音。我。な。が。ら。い。ご。を。か。し。く。お。も。ほ。ゆ。か。る。月  
夜。を。し。も。す。さ。ま。じ。ご。い。ひ。け。む。昔。の。人。こ。そ。心。え。ね。な。ご。い  
ひ。し。ろ。ひ。つ。や。遠。く。あ。く。が。る。に。風。の。い。ご。寒。く。身。に  
し。み。て。や。う。く。醉。ひ。心。地。も。さ。め。ゆ。く。興。つ。き。て。歸。る。ご  
い。ふ。ふ。る。ご。ご。も。あ。なる。も。の。を。ご。て。お。の。く。た。ち。歸。る。に、  
夏。な。ら。ま。し。か。ば。な。ほ。い。づ。こ。ま。で。か。は。あ。く。が。れ。な。ま。し。と  
思。ふ。も。い。ご。を。か。し。く。な。む。

○かゝる月夜をし  
も  
「すさまじきもの  
にして見る人もな  
き月の寒けくすめ  
る、二十日あまり  
の空こそ心細きも  
のなれ」(徒然草)  
○興つきてかへる  
「造門不前而反、  
人間其故、徴子曰  
本乘興而來、興盡  
而反」。(晋書、王  
徴子傳)



十、埋 火

○いとさむきに  
「冬は雪のふりた  
るは、いふべきに  
もあらず、霜なん  
どのいと白く、ま  
たさらでもいとさ  
むき、火なんど急  
ぎおこして、炭も  
てわたる、いとつ  
きんし」(枕草  
紙)

いさ寒きに火なご急ぎおこして炭もて渡るもいごつき  
くしご、少納言の筆ずさびにもものせられたる、げにさる  
事にて、冬はたゞこれのみぞまらうごのあるじまうけに  
も成りぬめり。雪ふりつみたる日、かねてちぎりしを訪  
ふに、おもひしもしるく南面清くはらひてすだれ高く卷  
きあげたり。おほきやかなる火桶のよきほごに埋める  
火に、やがてさしむかひたる心地いみじううれしく、いた  
りふかきあるじの心も思ひしらぬ。今も打ち散るを  
見つ、何くれの物がたりするほご、猶炭をこてこり出で  
たる、手づからさしそふるもおかしきに、酒さかなもてい  
で、折り焚くべき紅葉も無かめるを、やがてこれにてあ

○折りたくべき紅  
葉

「林間暖酒焼紅  
葉。石上題詩拂  
綠苔。」(白樂天、  
送王十八歸山)

たためてこそは、こいふに、雪の寒けさもかつくわすら  
れてなむ。

十一、ともし火

いご廣き殿のうちにくましくしき所もなく、あまた挑げ  
たるごもし火の光は、晝よりもけせうに、心もはれしくし  
うこそおぼゆれ。またほのかなる火影を小簾のうちふ  
かく見。いれたる、そらだきものなつかしう薰り出で、立ち  
さまよふ人のかげさへゆかしう見ゆ。文机のもごなる  
はさらなり、友だち打ち集ひて近うかゝげたるいとをか  
し。夜ぶかき雨の音におごろきたる枕上に、影かすかに  
またきたる、いみじう心細し。

十二、夕



◎大正七、專檢

遠山寺の入相の鐘、ねぐらに歸る夕鳥も、いつしか聲しづまりて、むかへる書卷もやう／＼見え成行くに、心ゆくわたりはいと口惜しきものから、暫し打おきて端の方に、出づれば、暮れのこる梢ごものほのかなる山の端に、はつかにあらはれたる三日月の影こそいさをかしけれ。

十三、男子とあらむもの

◎大正十四、高等

をのこごあらむものゝ家にのみやは、こ心たけくおもひたちしも日かずふるまゝにいごこひしう今も立ちかへらまほしき心地するをしひてねんじてへめぐるにいつしか年月も重なりぬ。

十四、驛

◎大正二一、高等  
◎大正一四、大阪  
女專

治まれる世は、うまやちの行きかひもにぎはしく、人宿す家はた建ちつゝきて草引きむすぶ思もなきものから、さすがに打ちこけてしも寝られぬは旅路のならひなるべし。曉の鐘はいづこも同じひゝきにて、いごこく立ち出づるはたご馬の聲々、枕上に聞えて心地よげなるに、家なる人々も起き出で、朝げの事なごかくまかなひありくほご、やう／＼物さわがしくなりて、物になひゆく男ごもの鄙歌うたふなご忙はしげにきこゆ。

十五、山家水

◎大正十一、大分  
高商

岩もる水のほのかなるを、竹の樋もて簀子のもごにまかせやりつゝ、あやしき水槽にたゝへたるが、夜晝となくしたゝる音の、いみじう心すみて、浮世の塵も清うすゝぎは



てぬ。心地す。おきふし安き獨住には、山の鳥ごも、いたう馴れて、朝夕に此の水のほごりにおり來つゝ、羽うちそゝぎなごするも、またなき友ご思ひむつばれてなむ。

十六、漁 邨

◎明治三十九、專檢  
◎大正六、山口高商  
◎大正十、大倉高商  
◎大正元、米澤高工

あまの住みかばかりあはれなるものはなし。いごたよりなき海邊の風もたまらぬ松蔭なごに、たゞかりそめにつくりたる藁屋ごものさま、浪うちよせなば、やがて流れも失せぬ。へう、いとほかなげに見ゆるを、繪にかきすさびたるなごは、なかくにをかしきものから、さて住ひなば、なに心地かせまし。ご思ひやるだに心細し。一夜宿りて見れば、なみ風のひゞき枕をゆすりて、つゆまごろまれず。曉方となりの家々目さまして、なりはひの

事ごもなるべし、あやしう聞きしらぬ事ごもを、おのがじし聲高にいひかはしたる、げに蟹のさへづり珍しうも、をかしうも。

十七、夜 學

◎四三、東京女高師  
◎大正四、高等

寺々の初夜の鐘のひゞきもをさまりて、皆人もねたるに、いごうれしう、燈火あかくなして文机に打ち向ひたる、いみじう心すみて、晝見たりしあたりの、何心なくて過ぎにしも思ひひしられて、深き心ばへあるくだりも、おのづから解き得らるかし。かゝげつくしてもなほねぶたさも知らず、油さし添へつゝ、見もてゆくに、遠き世の人もたゞ差向ひ語らふ心地す。さうし作りてをかしきふし、あるはふご思ひ得たることなごをば、墨おしすりつゝ、書き



つけなごするもをかし。雞の聲は夜深きに。やと思ふに、  
いと疾く明けはなれたる、しばしこて打ちねむる夢のう  
ちもあだしごこならむやは。

十八、再び浦上がたの蓮見に行ける時の記

こぞも見つる浦上がたの蓮、今年もよそにやはこて、そ、  
のかす人のあるに、六月十六日の宵過る程より月にあく  
がれて舟より物す。宵の間はいさゝか曇りつれど、更け  
ゆくまゝにいと清うすみわたれり。道にて聞きつるほ  
ごゝぎす、またも鳴くは、慕ひ來つるにやこいごをかし  
こく舟をこめつゝ來鳴くほごゝぎす  
うへ聞きはやす心知りけり  
浪のうへは玉をしきたらん様なるに、棹にさはるは桂な

○棹にさはるは桂なるべし

みなその月の上よりこく舟のさをにさはるは桂なるべし(土佐日記)

るべしなご打ち誦じつゝこなたかなた漕ぎめぐりて、早  
く出し某が舟に行きあひむやひしつゝ、浦上のかたへさ  
しのぼす。酔ひ心地のさすがにねぶたきを、かたみにつ  
きしろひおごろかしつゝ  
いかでかは枕さるべき郭公

鳴くねごもなふ月の夜船に

あけゆく景色いはむかたなし。

月もまた影さやかなる浪のうへに

山のはうつるよこ雲のそら。

うけらが花

橘 千 蔭

一、泊酒舎にて蓮を見る

橘(加藤)千蔭  
生、享保二十年(二  
三九五)  
歿、文化五年(二  
四六八)  
住所。江戸、本所  
回向院。  
職業。江戸の與力  
をなす。  
學統。眞淵の門人



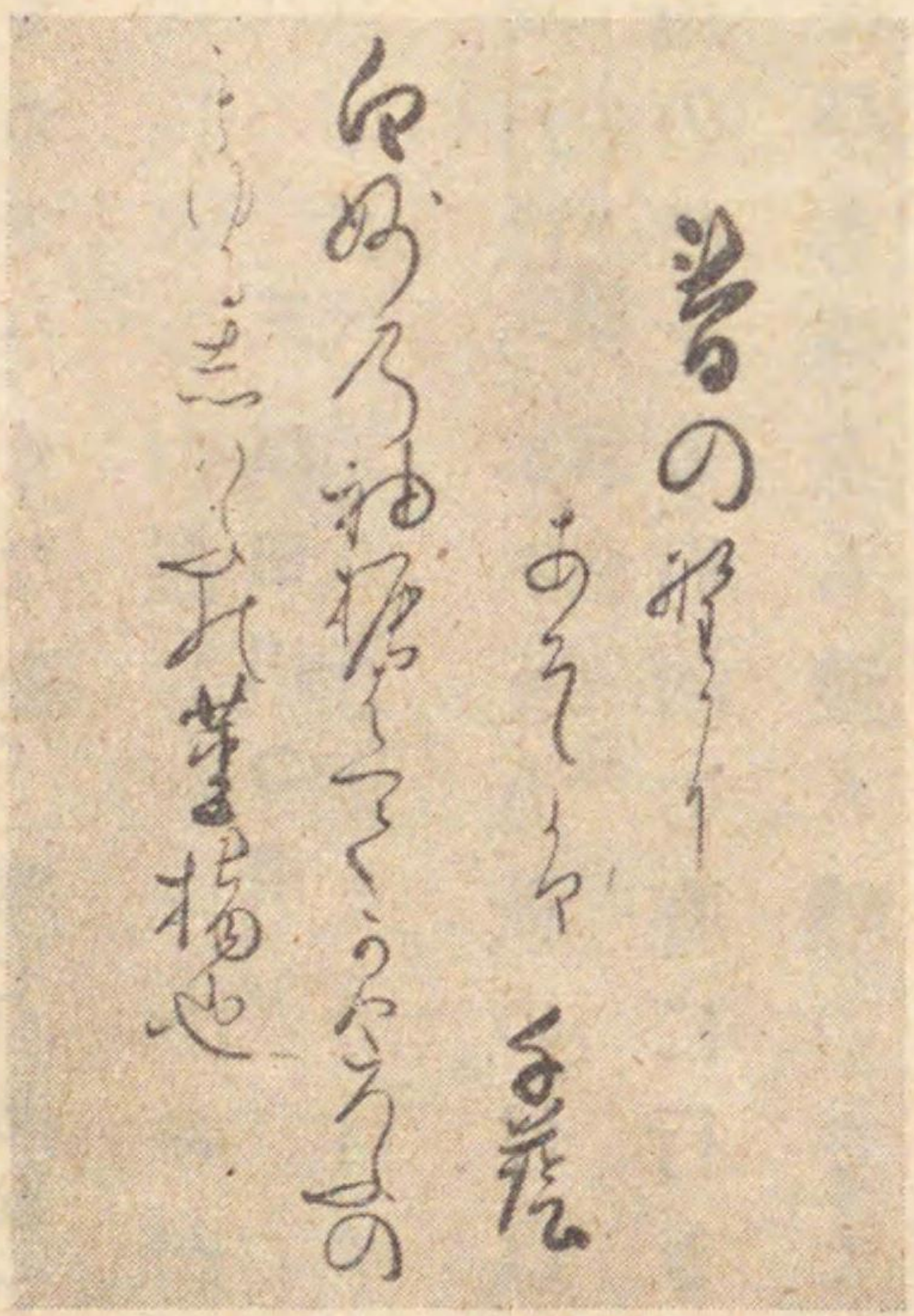
○さゞれなみもて  
名をおほせたる屋  
清水濱臣の泊酒舎  
(さゞさみのや)

大比叡うつされたる上野の岡の麓比良の大わだなせる  
池水のほごりに、さゞなみや志賀のさゞれ浪もて、名をお  
ほせたる屋あり。白妙の富士のみ雪もきえあらがねの  
土さへ裂くこいふなる頃、人皆涼みせんとして其のやごり  
に集ひて、高きやにのぼりて見渡せば、池の面は紅のゆは  
たと見ゆるぞ、蓮の花の咲きみちたるにてはありける。  
おひたてる葉の廣ごりたるは、宮路ゆくうま人の衣笠の  
如く、浮きたるは大庭に百の司のわらふた敷きならべた  
る如く、葉に置ける露は白玉の五百つ集ひを解きみだし  
たるになむ似たりける。池の水清らにすみて、あそぶい  
ろくず思ふこごなげなり。人々衣の紐を解きさけ、おば  
しまに寄りゐて、酒くみかはす程、彼の岡の木高かる瑞枝  
吹きこす風の涼しきに、えならぬ香のかをりくるもたご

しへなしや。(卷七 藤原濱臣が泊酒舎にて蓮を見る辭)

二、雁をきく

そもく雁は、常世の國をや。出でけむ、三越路よりや。來ぬ



らむ、ある時は眞木たてる  
荒山のあしたの霧にむせ  
び、ある時はみるめ刈る八  
汐路の夕べの浪をつばさ  
にかけて、草の枕だに結び  
あへず、天路はるかにおも

ひあがりて、夕暮の雲のはたてに、聲は小舟こく唐櫓にか  
よひ、姿は薄墨にかける文字に似て、一つら過ぎ行きつゝ、  
遠方の田面に落ちくる様さへ、おほごかにして、其の時し。



も、萩の葉におこなふ風、萩が枝に亂るゝ露くまなき夜半の月、染めかくる木々のもみち、千たび八千たび、打ちすさぶ砧の音、おしこめてあはれなる折に逢ひぬるが、限りなくめでたくなむ。(卷七、初雁をきく辭)

三、隅田川の雨

葉月はつかあまり、秋のけはひのなつかしくて、例の隅田川のほごり、石濱の庵に行きてやごりぬ。有明の月のにほひも、霧立ち渡る曉のさまも、所がら世に似ぬものから、こゝは雨のそぼふる日なむ。殊にあはれは深かりける。もとより萱ふける庵なれば、音だになくて、軒の雫の三つ四つ落ちそむるより、籬の萩の下葉の色付きたるが、ほろ／＼と散るもあはれなり。水の面は動くこともなくて、鏡

の如くなるに、雲の濃きうすきうつろひて、かつ浮びかつ消ゆる水沫にこそ、雨のけはひはしるかりけれ。水脈の一筋は、さしひく汐にもまぢらで、とはに花田の色にながれいにて、沖に出づめり。これや水上の秩父の山の眞清水の落ち来るならむ。(卷七、隅田川のほとりなる石濱の庵にて雨の中に作れる文)

四、秋の山ぶみ

あしたの霧の絶間より、木々の紅葉このもかのもに匂ひ、分けゆく山路はやゝうら枯れにたれど、八千草の花猶色をつくせり。虫の聲もそこはかさなく聞えて、げに春見ましよ。といひけむもうべなりけり。やう／＼登り行くほごみ山おろしに霧はれ渡りて、國のまほらもつばらに見わたさる。足穂の山はそがひにしみさび立ち、みな



の川は源二をの峽より湧き出づる眞清水にて、末遠白く流れいぬめり。すそわの田居はるかに色づきて、雁雲井よりおち、端山のしもと陰しげくして、鹿の聲かすかなり。

(卷七、秋の山ぶみといふを題にて)

五、山 里

耳になり、弾の音をきかず、目に旗手のなびきをしも見ぬおほん時代に逢ひては、何事につけても憂しごわびしと怨みかこつべき事やはある。されば世を避くごしもあらねご、あきじこる市のちまたに近き賑はしさをいごひて、此の山里には移ろひ住めるになむありける。

(卷七、山里の月といふを題にて)

六、文机によりあつゝ

文机によりあつゝ、程なき壺の中の草木をのみあはれみて、思ひたらはせるにしもあらず。名ぐはしき吉野の山の奥をこめ、久かたの天の橋立をたづね、常磐なる松が浦島にわたりてぞ、心ゆくかぎりなるべきを、遠く出でたゝむも、いたつがはしくものうければ、いぶせき庵のうちに籠らひ居るよ、ますらをの雄心なしごやいはむ。そも又己がさがなればいかゞはせまし。

(卷七、山水のかたうつしたる繪を見るといふを題にて)

七、手 ぶ り

そも、古と今ご手ぶりのうつりもてゆく如く、言葉もはた變りゆくものなれば、今の事を古ぶりに書かんはいご難きことにして、石上ふりにし書らよく見わたして、我

◎大正一四、長崎  
高商



ものこそせざれば、斯くはなしがたきわざぞかし。たはぶ  
れごと書けるは、思ふ心ありてなるべし。見ん人心あら  
なん。このはしにいさゝか書いつけてよご、某が請ふま  
ゝにかくなん。(都のてぶり序)

# 近世擬古文新鈔 改訂版 終

## 附 録

### 語 釋

#### あ の 部

あいな頼み(鈴一) 頼みがひない頼み。あて  
にならぬ頼み。  
あかぬ(玉十四) 不満足な。心ゆかぬ。  
あかぬ業(琴十三) 心ゆかぬこと。不満足な  
こと。  
あがれる世(琴四) 上世。古代。  
あきじこる市(うけ五) 商賣をしてゐる町。  
秋のけはひ(うけ三) 秋の景色。秋のやうす。  
あくがる(櫃七) 浮かれる。浮かれ行く。  
あくよなう(松二) 飽くといふ時なく。  
あげつらふ(玉五) 議論すること。  
あこよ(松五) 吾子よの意で。坊や〜  
といふと同じ。  
朝い(琴十二) 朝寐のこと。  
朝げ(櫃十四) 朝餉。朝食。  
浅茅(琴九) 丈の低い茅。芝。  
あさまし(文五) 興がさめる。事の意外なの  
にあきれる。

あさめらる(秋一) 嘲弄される。いやしめら  
れる。  
あしろ  
網代(琴二) 川瀬に、網の代りに竹木を編み  
つらねて、其の終に簀をあてゝ魚をとるも  
の。冬期に宇治川で水魚をとるので有名。  
これを春に見ると冷い感がある。  
あだしごと(櫃十六) 他の事。  
あだし書(鈴五) 他の書物。  
あたら(文五) 惜しいことに、残念にも。  
あたらし(鈴四) 惜しい。  
あたら夜(樂八) 惜しむべき夜。  
あぢきなき(玉六、玉十二) 無意味な、つま  
らない。  
あつかはし(鈴二) あつくるしい。  
あづかる(閑一) 關係する。  
あてやか(樂七) 上品、優雅。  
跡とふ(梅一) 後世の弔をすること。追福す  
ること。  
あながちに(玉三、玉九、閑文二、琴六、櫃  
八) 無理に、しひて。  
あなるものを(櫃九) 有るなるものをの略。  
あるのだに。  
あばらなる(琴十四) 荒廢してゐる。あれ  
てゐる。

あはれ(松五) 情趣。(櫃八) 可憐な、おも  
むきのある。  
あはれむ(樂七) 賞玩する。  
阿鼻(梅二) 梵語で、無間と譯する。地獄の  
一で、罪人の苛責の絶え間がないから無間  
といふ。  
あま(櫃十六) 漁夫。  
あまたかへり(鈴五) 數回、幾回も。  
蟹のさへづり(櫃十六) 海邊の漁人の言語が  
鳥の囀る様で、聞き分けにくいことをいふ。  
あめのまに(閑文二) 天命のまゝに。  
あやしき(櫃十五、琴十四) 粗末な。きたな  
げな。見ぐるしい。  
あやなき霧のまよひ(琴九) すべてのものを  
朦朧とさせる様な霧の立ちさまよふこと。  
あらがねの(うけ一) 「土」の枕詞。鑛(あら  
がね)は土中にある故に。  
あらがふ(閑文二) 争ふ。争論する。  
あらじものから(泊七) 「ないであらうとは  
いふもの」の意。  
あらぬ塵あくた(琴四) くだらない塵埃。あ  
らぬ―あらまほしくないこと。  
あらはなるを責む(花八) 表面上にあらはれ  
た所を責めること。内心の問題にまで立ち



入らないこと。

ありならひつること(玉七) 世間に行はれ習慣になつてゐること、元から慣れて來てゐること。

あるじす(秋五) あるじまうけすと同じ。饗應すること。

あるじまうけす(駿五) 饗應の準備をする。もてなしをする。

青にび(秋三) 花田色にやゝ青味のかゝつた色青。味がよつたあさぎ色。

いの部

池水のあや(櫃二) 池の水上の波紋。

池の心ふかく(樂六) 池が深く。池の心とは池の底のこと。

いさぎよし(樂六) 氣持がさつぱりとする。いさぎよき名(玉九) 清廉潔白であるといふ名譽。

いさはず(樂一) 争はない。

いざよひて(花十四) たゆたふ、躊躇する。月が梢などのあたりにぐづぐづしてゐて中急にさし昇らぬことを多くいふ。いざよひの月。

いそぎ(藤四) 準備。

いそし(泊四) 忠實である。

いそしむ(玉九) 忠實にはたらく。

いたつがはし(うけ六) わづらはしい。面倒な。

いたづき(花十二) 病氣。

至りしこと(花二) 窮極の理想的な境地。

いたり少く(鈴一) 造詣が浅い。

いたりふかき(櫃十) 萬事に心よく行きとどく。趣味造詣の深い。

異端の説(梅一) 自己の主張する道と異なる道を主張するもの。儒教の立場より見れば、佛教や道教などは異端である。

いちはやきわざ(琴五) 敏速なこと。轉じて機敏ですばしかくすぐれてゐるといふ意。

いで居(秋六) 應接間、客間。

糸竹の音(琴九) 管弦の音楽の音。

厭ひ離れぬ世の本意(櫃七) 浮世を離脱した自分の境涯としての本望。

いばらからたちひまくる(藤一) 茨、枸橘の隙間をくぐる。茨の垣をくぐつて盗みに

入る。

いひおこす(藤二) いつてよこす。

いひけつ(玉三) 言ひ消す。

いひしらぬけしき(松二) 何とも口では言へない美景。

いひしらぬ野山(琴十四) 何とも口では言へない美しい野山。

いひしろふ(櫃九)(関文二) 言ひ合ふ。論じあふ。

いぶせき(うけ六)(松三) 陰鬱な。汚ない、いやな。氣持のはれぐししない。

いまそがり(関一) います。おはす。居られる。居るの敬語。

今の昔にしかず(樂二) 昔と今を比較すれば現在に及ばない。

今めかし(松一) 當世風である。氣がきいてゐる。

いも寐られず(櫃六) 安眠出來ない。ねられない。

入相の鐘(櫃十二) 日暮方につく鐘。

いろくず(うけ一) 「うるくず」ともいふ。魚のこ。

うの部

うき世の塵(琴十四)(櫃十四) 俗世界に於ける様々な束縛や煩ひ。

うき沈む世の淵瀨(泊四) 榮枯盛衰常ならぬ世の中といふこと。

うけぬかほ(玉三) 承認し難いといふやうな顔付。不賛成らしい顔。

うけばりて(玉二) 自分をたしかに其の物事に値ひするものだと思ふ。得意になる。

うけること(樂二) 出たらぬ、根據のないこと。

うしろめたし(秋五) 不安である。心配である。

うそぶく(関文四) 詩や歌を吟誦する。

うたて(松七) 發語の如く使用されてゐる。情なく、の意。

うたてあるわざ(琴八) なさけないこと。浅ましいこと。

うちあはぬ心地(玉十三) 似合はないといふ氣持。相應してゐないといふ心地。

打ちすさぶ砧の音(うけ二) しきりに打ちならす砧の音。

うちつけに(櫃七) 突然に、だしぬけに。

内の樂(樂一) 自己の精神的な樂。

うちまもる(花十四)(琴九) じつと見つめる注視する。

空蟬の世(琴二)(琴六) 空蟬は宛字で、現身である。即現在の世、現世。

うつゝ人(藤六) 現在生きてゐる人。

埋火(琴二) 灰の中に埋めた炭火。

うつろふ(うけ三) 一、うつる映ずる。二、移りゆく。(琴十四) 變る。

うとかりし人(藤二) 疏音であつた人。おとづれを絶えてゐた人。

初々しき口(鈴四) 未熟な口。

うべ(樂八) もつとも。道理。

うべなふ(うけ七)(琴一) 承諾するゆるす。同意する。

うまご(松五) 孫のこと。「むまご」ともいふ。うま人(うけ一) 貴人。あて人。

うまやち(櫃十三) 驛路。宿驛のある街道。うら枯る(うけ四) 草木の梢、下葉などの枯れること。

とを思つて見よとの意。

うるはし(松一)(文四) 端麗なこと。端正なこと。

えならぬ(樂五) なんとも言へない。

衣紋(梅六) 裝束をととのへて着用すること。又は其の裝束。

えん(泊二) 艶。やさしくうつくしい事。

おの部

おきな(翁)のがり(駿五) 翁の許へ。

おこす(琴十三) 寄來す。送つて來る。

おこたる(花十二) 病氣のなほること。

おちたぎつ(琴九) 瀧の様にみなぎりおちる。

おどろかす(櫃十八) 眼をさます。眠をさます。

おどろきたる枕上(櫃十一) 目覺めた枕もとに。おどろくは目がさめること。

おどろなる(琴十四) 草木の亂れ茂つてゐる。同じつら(鈴一) 同列。同列。

おのがじ(櫃十六) めいめいに。各自に。各の思ひに。己一盃の器量(梅四) 自分の及ぶ限りの力



量。自分としての最上の能力。

おぼしま(うけ一) 欄干。手すり。

おふな(玉十二) 己れ相應に。我が及ぶだけ。

おほす(櫃八) 養育する。そだてる。

大炊どの(花二) 食物を調理する所。主として貴人の邸宅にいふ。民間の臺所に同じ。

おぼつかなき(鈴二) 心もとなし。不安な。覺束なし(駿五) 不安である。何となく心もとなし。

おほどか(うけ二) ゆつたりとしてゐること。あせらず迫らぬ態をいふ。

おぼめかれ(櫃三) ぼんやりとそれかと思はれる。

おぼゆ(花十三) 似る。「曉の空おぼゆ」とは「あけがたの空の様によく似てゐる」との意。

大よそ(泊三) おろそかに同じ。

大わだなせる(うけ一) 大海の如き様をしてゐる。「わた」は海の意。

面あらためたらば(花八) 表面を改めたならば(内心の如何はさしおいて)

おもなし(玉十三) 恥し。面目なし。あつかまし。

おももの(琴十三) 供御。陛下のめしあがるもの。

思はずに恨めし(鈴四) 思の外にうらめしい。案外なほどうらめしい。

おもひくたす(文五) 輕蔑する。輕んずる。おもひしもしるく(櫃十) 豫想してゐた通りに。

思ひ足らふ(うけ六) 満足する。思ひはかりせまらず(松八) 思慮に餘裕があること。

思ひむつばる(櫃十五) 睦まじく思はれる。親しみ深く感じられる。

おろそげ(藤六) おろそかげ。おろそかといふ意。おろそげならず(熱心) おろそげ(秋二) 拙き、まづき。

恩愛(梅七) 親子、夫婦等の愛情をいふ。

かの部

架(樂四) 書架。書物棚。

かいつらねて(玉十六) かき連ねての音便。連れ立ち合つて。

かいなで(玉十一) 一通り、一わたり。通り一べんに。物の表面にふれるだけで奥儀をしらぬこと。

かたくな(玉十三) 頑固。見ぐるしい。

かたこと(文四) 不完全な言葉。かたこと言ふ―間違つた不完全なことをいふ。

かたは心(秋六) 完全ならぬ心。偏見、かたよりし心。

かたはに(玉十三) 不出來で、まづくて。かたはらいたし(玉十一) 傍で見ると笑止千萬なこと。

かたみに(櫃十八) お互に、かはるゝ。

かつん(櫃十) 不十分ながらもあどにか。まあ。まづ。

かど(秋一) 才氣があること。かしこいこと。

かにかくに(櫃一) あれやこれやと。あれにつけこれにつけて。

かにもかくにも(玉一) とにもかくにも。ともかくも。何にしても。

かはらけとりはやし(藤四) かはらけ―盃。酒をくみかはすこと。

かへさ(鈴三) 歸り。歸途。

かへさひ(玉十二) 繰り返し。第何回も。かへさひ思ひ(玉二) 繰り返し。思ひ見ること。

かへらや(秋三) 歸らうよの意。

かほよ人(藤七) 美人。顔よき人。

かみ(泊七) 古へ。昔。紙のふすま(樂四) 紙製の衾。紙を外被にして作つた藁蒲團。てんとくじ。

萱間に朽つ(泊七) 水邊の草むらの間で朽ちる。萱は、かやばかりでなく「あし」もさしてゐると見ればよい。

からうた(花四) 唐歌。漢詩のこと。唐金のわたりのもの(梅四) 唐金製の舶來品。

唐金―青銅。支那から製法を傳へた故にいふ。

からきめめせて(梅二) 辛き目にさせて。つらい目にあはせて。

からぐ(琴十四) かゝぐに同じ。揚ぐ。からぶみ(玉八) 支那の書物。

からやらのつくりごと(玉四) 唐様の作り事。支那人風な外面的作爲。つくりごと―内心と異つた風に言動すること。

がり(駿五) がり―許へ、所へ、の意。人のがり―人の許へ。翁のがり―翁の所へ。

かりそめ(櫃十六) 一時的に。極く粗末に。雁の翅のゆきかひ(琴十三) 消息文の往來。手紙のとりにやり。

浩々たる氣(花八) 浩々―廣大のかたち。公明正大なこと。公明正大でゆつたりした氣持。

かうがへ(松八) 考。思ひつき。

かうがへて(泊三) 考へて。かうぶり(文三) かうぶり(冠)に同じ。位階の意味。

かゝげつくす(櫃十七) 「かゝげる」とは燈をかきたてること。「かゝげつくす」は燈をかかげつくす即燈油のなくなること。

かゝづらひて(玉三) 拘泥して。篝火(松六) かゞり火。鐵の籠を木の柱に下げその中で火をたいたもの。戸外の明りのために用ひる。

かざるふ(閑文四) 光のかくれて陰になること。

かしがまし(駿六) がやゝとやかましい。うるさい。

かすまへられ(鈴一) 勘定の中に入れられる。人並に取りあつかはれる。

風もたまらぬ松蔭(櫃十六) 吹いて來る風もとまらずに吹きぬけるやうな松の木蔭。

かた(松二) 形。繪又は彫刻などを廣くいふ語。

かれ(琴四) かゝる故に。こんなわけだから。故に。

かれいひ(松五) 乾飯。ほしいひ。旅の時などの辨當。こゝは辨當の意。

かれゝに(閑文三) 聲の囁れる様にいふ。聲などが、とだえゝになること。

枯生(花十五) 枯れてゐる芝生。感格(梅一) 格―いたる。來る。自分の誠意に感じて靈や神が來ることに用ひる。

神無月(鈴三) 陰曆十月の稱。

きの部

氣あらく心くはしからず(文二) 氣質が粗放で周密でなく、又精神の働が緻密でない。

聞きはやす(櫃十八) 聞いて賞讃する。はやす―ほめそやすこと。

きこえ(梅四) 評判。きこゆ(泊二) 申し上げる。きこえまほし―申し上げた。

きざし(花一) 前兆。徵候。しるし。まへぶれ。

如月(閑文一) 陰曆。二月の稱。鬼神(梅一) 故人の靈魂をいふ。

奇特(閑二) 殊勝な。感心な。



衣笠(うけ一) 絹又織物を張つた長柄の傘。

古へ貴人にさしかざしたるもの。

碓(泊六) 布帛などを打つ時に用ひる木や

石の板臺。衣板(きぬいた)から来た語といふことでは、其の衣を打つ音をいつてある。

昨日は今日の昔(鈴一) 昨日といふも、今日から見れば昔であるとの意。月日のはななく過ぎゆくことをいふ。

きはん(琴九) 分際々々。程度々々。

肝をけす(梅二) ひどくおどろき恐れること。

肝がつぶれるといふに同じ。

却行(梅一) 逆行。あとしざり。

禦侮の臣(駿三) 國家朝廷を侮り寇をする敵を禦ぎ挫く所の臣。

玉山倒る(駿五) 人品のよい人が酔ふ様をいふが、一般には單に酒の酔のまはつたことをいふ。

義理(駿二) 正義道理。

霧のまがひに(秋四) 立ちこめてゐる霧にまがれて。

金言耳に逆ふ(梅七) 金言一善言。自分の身のために良い事を言はれるのは、聞きづらい。身のためを言つてくれるのでも聞く方では腹をたてること。

く の 部

くきん(花一) 種々の事柄。

くすし(花十二) 醫者のこと。

口説(梅二) 争論と同じ。

草の枕(うけ二) 古昔の旅は草を引き結んで枕とした。それから轉じて旅長の意に用ひる。草枕をむすぶ一旅ねをする。

くさはひ(琴八) 物事の種となるもの。即ち材料の意。本文章では品といふ程の意。

草引きむすぶ思(檜十四) 草枕の旅をする思。物うく苦しい旅の思。

くだく(松五) わづらはしい。ごてくしてゐる。

口とく(藤四) 口疾くの意。口達者。

くま(しき所) 隠れて見えないうな所。

蜘蛛の(花十四) 蜘蛛の網。

雲のはたて(うけ二) 雲の横に綱長く旗のなびく様になびいてゐるもの。

臥龍(駿三) 蟄伏してゐてまだ昇天しない龍。出仕せぬ英雄や在野の人傑をいふ。

勸進(閑一) 僧などが金品の寄附をすゝめ乞ふこと。轉じて年賀又は追福の時に他人

の詩歌等を乞ふこと。

け の 部

景氣(樂一) 景色のこと。

經傳(文一) 經書(四書五經の類)と説明書(春秋の三傳の如きもの)

けらとき所(閑文二) 人氣うとき所の意。おそろしい所。

けおさる(樂六) 「け」は接頭語で、おされるの意。壓倒される。他に立派なものがあつてそのために見ばえのせぬことをいふ。

けがしき(琴九、琴十四) 汚なさ。

けせうに(檜十一) 顯。あらはに。いちじるしく。きはだつて。

けぢがくて(鈴二) 近くての意。

けぢめ(琴七) 差異、ちがひ。

けつ(閑文二) 消すこと。

けづり氷(閑文二) 削りたる氷。

けに(秋三) けに一殊に、一層。げて一成程、實際、實に。

けはひ(うけ三) 景色。様子。

犬馬のよはひ(駿四) 自分のつらぬ年齢、卑下の語で、馬齢ともいふ。

こ の 部

穀食(藤一) 穀とは生れたての鳥で、自分で食を求められない。必ず母鳥から食べさせてもらふ。これを穀食といふのである。

好名の欲(花八) 名譽、名聲などを欲する慾望。

こきまげて(檜五) 交ぜあはせて。

心あてに(泊二) 推測に。

心うかれて(松三) 心が浮き立つて。何かの興味のために心がおちつかぬこと。

心うとし(泊三) 或る點に注意しないこと。ボンヤリしてゐること。

心おきて(泊四) 心の掟。即心の持ちかた。

心おそし(玉三) 心鈍し。どんな。

心劣りす(松一、玉十三) 其の事物についてのゆかしさがなくなる。見劣りがしてゆかしさが失はれる。

心しらひ(琴九)(泊三) 心がまへ。心づかひ。心さま。心術。

心知れらん人(樂八) わけを知つてゐる人といふ意。

心づきなし(檜七) 自分の心に其の事が快くうけ入れられぬ様だ。氣にそまぬ。何とな

くいやである。面白くない。

心づくしなる(松七) 氣のもめる。萬事にひどく心を勞させる。

心なき身(鈴四) 物のあはれを感じない者。鈍感なもの。

心の雲をはらす(琴十四) 心中のあこがれを晴らす。心中の思をはらす。

心のなしにや(玉十五) 心からであらうか。氣のせいであらうか。

心ゆく(樂六) 心に満足を感ずる。非常に慰みになる。

心ゆくわたり(檜十二) 興味の深い箇所。面白いところ。

心をやる(琴二)(玉十一) 氣を晴らしやる。心をなぐさめる。

心をよす(文三) 或る物事に氣をむける。後生願ふ(梅二) 死後の世に善所(極樂)に生れる様にと佛にねがふこと。

ことぞ(檜十八) 去年。昨年。

ことかへて(さえおふ) 花十二) 物事を反對にしながら、それで自分の才學をほこる。

ことぐさ(松四) 事ぐさ。仕事。

ことぐさ(琴九)(泊三) 雑事。様々のこと。ことさらめく(玉十五) 態とするやうな様子

わざ／＼さうするやうな風。

事そぐ(琴七) 物事の足らぬがちであること。簡略であること。

詞にあやあり(琴六) 詞に飾がある。言語がリズムカルになると、詞がうるはしくなる

と、を兼ねていふ。

ことばの外なる心(花三) 言外の意や言外の情趣をいふ。

詞の道(琴四) 詩歌文章に關係した道。ことわざ(琴二) 事業の意。する事。

ことわり(閑文二) 理窟ばつて来る。ことよな(樂八) ことよなくの音便。

ことよなく(鈴四) 此の上なく、非常に。

さ の 部

帚灑(梅三) 掃きすゝぎ。掃除。灑は水で洗ふこと。帚は掃くこと。

さうし(檜十七) 卷子本に對して、綴じた書冊をいふ。

さうどく(藤五) 騒ぐ。

才(文五) 學問。智識。才能の意には用ひない。

ざえおふ(花十三) 才學に誇る。

さが(琴十三) ならはし。習ひ。世のさがし



らぬ―世上のならはしなどを超越してゐる人。

さが(うけ六) 性質。うまれつき。

防人(秋四) 上代に西海道の邊要の地を守つてゐた兵士。三年毎に交替することになつてゐた。

槩(花三) 矛。ほこ。

さざなみや(うけ一) 志賀の枕詞。

さゞやか(鈴二) さゞやかに同じ。小さい。

さち人(秋二) 幸人。幸福な人。好運者。

さとびたる(琴四) ひなびるといふに同じ。田舎くさい。下品な。

さはらふ(泊三) さはる。觸れる。

さへらる(秋六) さまたげられる。

棹の歌(秋三) 舟歌。

さらなり(櫃五)(花二) 勿論のこと。言ふに及ばずの意。

さらにもいはじ(琴九) 今更事新しくはいふまい。

さりとも(鈴四) 左様にありとももの意。それでも。

さるかたに(松五) それ相應に。

さる事(松二) 尤なこと。さる事ぞかし―尤もなことだ。

さるものにて(閑文四) それは言ふまでもなく。勿論。

ざればむ(松一) 不真面目でたはむれてゐる様子。

### しの部

しがらみ(泊五) 水流をせきとめるために杖を打ち渡して横に竹木を結びつけたもの。

このしがらみを作することを「しがらみかける」といふ。柵。

しきる(泊六) 繁くなること。つゞくこと。

時好に投ず(駿二) 其の時代の人々の好む所にうまく従ふこと。

仔細(梅四) 理由。わけ。

したゝむ(閑二) 食べる。

下もえ(琴十二) 冬枯れの草葉の間から、春になつて新しく萌え出した芽。

したり顔(玉十一)(鈴二) 得意顔。

しとゞに(鈴三) ずつくりと、(濡れる)しとゞにぬれ―ずつくりとぬれる。びつしよりと濡れる。

品(琴三)(琴十一) 身分。階級。(琴七) 上品下品の品。

品おくれたる業(琴五) 下品なこと。おろか

しいこと。

指南(梅六)(梅七) 指導。教訓。教誡。

偲ばし(樂八) 懐しい。懐舊する。

偲ぶ(駿四、駿五) 追懐する。

しみさび立つ(うけ四) 木立しげく神々しく立つてゐること。

しめる(花十五) 燈火などの光の衰へうすらぐことをいふ。又消えることもいふ。本文は前者。

下さま(文四) 下の方。下賤なやうな風。劣つたやうな風。

しもと(うけ四) 木の細い小枝。梢などの細い小枝。

鷓鴣(琴三) 莊子にあらはれてゐるのは、「みそさゞえ」のこと、いふ。

述懐(梅七) 自分の意中をのべる。轉じて、自己の内心の不満などをくどくどといふことを述懐といふ。

宿儒(駿二) 老儒に同じ。老熟した儒者。

儒分内の事(駿二) 儒者としての本分の中の事。儒者としてやるべき事。

如才なくなりゆく(梅七) 都合よくなつてゆく。うまくなつてゆく。

初夜の鐘(櫃十七) 初夜を告げる鐘の音。夕

方から夜半までを初夜といふ。又一説に午

後八時頃を初夜ともいふ。

白襲(琴二) 襲の色目のことで、表裏共に白い着物。四月の更衣の時の着物。

白駒の隙過ぎやすく(駿四) 歳月の早く過ぎ

さること。白駒の馳せ過ぎるのを、壁の隙

間から、ちらりと見る如くに、人の一生の

過ぎやすうことをいふ。

白玉の五百つ集ひ(うけ一) 五百(数の多い

こと)の白玉を糸などで貫いてあつめたも

の。飾りに用ふ。

しらまなご(藤五) 白砂。しらまきご。白眞

砂。

しれん(し藤一) 馬鹿々々しい。しれん(痴

なこと。

しれ者(秋一) 愚かな者。痴人。

心術(閑五) こゝろだて。心ばへ。

搢紳家(駿三) 公卿。搢はさしはさむ、紳は

大帯。笏を大帯にさしはさむ人といふ意。

### すの部

すがの根の長き(秋四) 「菅の根の」は「長し」

といふ語の枕詞。

すさまじ(櫃九)(琴二) 興のないこと。物さ

びしい。興のさめること。

すさみ(琴二) すさびに同じ。しぐさ。手な

ぐさみ。

すゞきはつ(櫃十五) すつかり洗ひ流してし

まふ。

すゞろ(秋三) そゞろに同じ。何となく。

すゞろに(藤七) 何となく。

すそわの田居(うけ四) すそわ―山の麓のあ

たり。麓のあたりの田圃。

簀子(櫃十五) 家の縁側。もとは竹又は細板

で、雨水などのたまらぬ様に作つた縁。

### せの部

生質(梅六) うまれつき。

清談の露しげし(駿五) 清談―俗世間をはな

された事柄を話し合ふこと。露は清いもの。

故に清談の縁語として出す。しげしは露の

縁語。

せこ(秋四) 夫のこと。「せ」ともいふ。

世話(駿一) 世間のいひぐさ。世のことわざ。

善根(梅二) 佛語、死後に善い果報を得ること

の出来る所業。善き行をすれば後生に善

果を得る故に、現世でする善行を善根とい

前栽(鈴二) 庭園の植ゑこみ。もとは草や小

などを植ゑたものである。

せんなし(花三) 仕方がない。無益だ。

### その部

そがひ(うけ四) 後ろの方。背面の方。

俗流(閑三) 俗人ども。こゝでは風流を解せ

ぬものをさす。

そこなひのすぢ(玉七) そこなひ―損害。そ

こなひのすぢ―誤つてゐる方面。

そこはかとなく(櫃六、櫃二)(うけ四) どこ

となく。何となく。ぼんやりと。何處をあ

てといふこともなく。

そゝのかす(櫃十八) 誘ひすゝめること。

そゞろごと(泊七) 漫言。氣のむくにまかせ

そゞろをかはれ(梅七) そゞろ言を言はれの

意。

外をせむ(花八) あらはなるをせめる。外面

にあらはれた所を責める。

そばつき(松一) 見た所の様。形。そばつき

のつきは手きつ、目つきのつきと同じ。

そばつきざればみ(松一) 形がしやれてゐて。



そらだきもの(櫃十一) そらだき一香を室内  
などをかをらせるために焚くこと。そらだ  
きもの一薫香。

そらにうかぶ(泊三) 暗記する。暗誦する。

### たの部

滞貨(閑五) 賣れ残り。

頼鈴家(駿三) 頼は弓袋。鈴は矛の柄。頼鈴  
家一兵法家。軍の大將。武將。

たぎつ(泊四) 瀧のやうに流れる。

高きみじかき(玉四) 身分の高いと低いと。

たけきこと(松四) せい一ばいの事。自分で  
やれる最大級の事。

たしなむ(梅三) つゝしむ。心がけてゐる。

たゝずまひ(鈴四) 立つてゐる様子。

たちゐ(駿四) 起きたりすわつたりすること。  
起居動作。

たづぬ(花九) 研究して見る。

たてぬき(櫃五) 縦横。

たど／＼(櫃六) たしかではない。はつき  
りしない。ぼんやりしてゐる。

たなつ物(松五)(閑文二) 田より生ずる物。  
すなはち稻。轉じて穀類をもいふ。

玉ざき(鈴三) 篠の美稱。

玉ぬく(花十五) 露の玉を貫くことをいふ。  
谷の戸の初音(琴十二) うぐひすの初音をい  
ふ。

恃む(樂二) たよりにする。あてにする。

給ふ(鈴四)(秋五) 下二段活用の動詞で、自  
己動作につけて卑下の意をあらはす。

玉水(花十五) 雨だれのこと。

魂も身にそはず(閑文一) 心が遠くあこがれ  
ゆくこと。何かのことに氣をとられてしま  
つてぼんやりしてゐること。本文は、美景  
を思つて茫然としてゐること。

民をあらたにす(駿二) 民心を一新する。

たゆむ(泊六) 「しきる」の反対。怠る。とだ  
え／＼になる。

### ちの部

近劣り(花十三) 遠くから見ても美しくても、  
近寄ると却つて美しさが減ること。

ちぎる(櫃十) 約束をする。

直をうる(花九) 自己の剛直なことを衒ひ示  
すこと。

### つの部

つかさ(文三) 官職をいふ。つかさ、かうぶ

リ一官職と位階。つかさ人一官人。  
つか短き筆(泊七) つか一筆の柄一柄の短い  
筆。こゝは自分の才の短いことを含んで言  
つてある。

月うとかれ(琴十四) 月よ顔を出さないであ  
てくれ。

つきしろふ(櫃十八) つゝき合ふ。互に膝な  
どをつゝきあふ時にいふ。

つき／＼(琴二)(櫃十) 似合はしい。

つきなし(櫃八) 似合しくない。つりあはぬ。  
不相應である。

月花のなげきのほまれ(藤三) 月花に對して  
詠じた歌の譽。歌人としての名聲。

付親(閑二) 幼鳥に鳴く音を學ばせるために  
傍につけて鳴かせる親鳥。

土さへ裂く(閑文四) 極暑の形容である。土  
でも裂けるといふ意。

厨子(泊一) 櫃を立てた様な形をして棚など  
が付いてゐて、其の上には、書物や器具類  
を置くもの。

つゝましき(琴七) 慎しむべき、氣がおける。  
つど／＼(梅一) 其の度毎に。

つみ置ける言葉(泊一) 自分の記憶にをさめ  
られてゐる言葉。我ものとなりきつてゐる

言語。

つばら(うけ四) つばらかと同じく、つまび  
らかの意。

壺(うけ六) 殿舎の間、又は垣の内などにあ  
る一地域。こゝでは前栽といふ程の意。程  
なきつば」とは狭い庭のこと。

つゆ(櫃十六) 少しも、全く。

つら(鈴一) 列。おなじつら一同列、同類。

追福(閑一) 死者の冥福を祈ること。追善。  
つれ／＼(樂三) 退屈でなすこともなくて。

てうず(花十一) 調ず。薬てうず一調劑する。  
薬をあはせる。

調度(松一) 道具。主に、手まはりに使ふ手  
道具をいふ。

朝陽の鳳鳴(駿三) 言行のすぐれて美しいこ  
と。朝陽とは山の東をいふ。鳳鳴は鳳凰の  
なく聲。

手ぶり(琴四)(うけ七) 風習。ならばし、

解きさく(うけ一) 解きはなす。さく一はな  
す。

### ての部

時にかをる(琴十一) 其の時代に全盛をきは  
めること。

時にそむく(琴二) 時世にあはぬ。

度外に置く(駿二) 氣にとめない。心にかけ  
ない。度一法度の意。

常世の國(うけ二) 昔、遠い所にあると想像  
した國。又一説に、黄泉の國ともいふ。「常  
世の雁」といふと、常世の國から渡つて來  
た雁の意。白露のきえにし人の秋まつとと  
こ世の雁も鳴きてとひけり(齋宮集)

常世のまれ人(秋三) 常世の國から來た客人。  
雁のこと。

所せきまで(樂六) 所が狭いほど。一ばいに。  
所せし(鈴三) 一面に。

年木(藤六) 新春を迎へる時のために準備す  
る薪木である。

年なみ(琴四) 年並の意。年といふに同じ。  
多くの年なみを渡る一多年を経過する。

殿守のとものみやつこ(藤五) 主殿伴御奴。  
主殿寮の下司で、祭庭の掃除などをする者。  
とばかりありて(鈴二) 暫く經て。やゝたつ  
て。

とみのいたづき(花十二) 俄の病、急病。  
とむ(うけ六) 尋む。たづぬるたづね行く。

### との部

とめくれば(藤七) 尋ねて來ると。

とめつゝ來なく(櫃十七) あとをたづねなが  
ら來て鳴く。

鶏の八聲(閑文一) 鶏が曉方にしば／＼なく  
聲。曉告ぐる鶏の聲。

とりまかなひ(玉二) 取扱ふ。處理する。

ななかく／＼(櫃十六)(玉七)(藤二) 却つて、  
反對に。

なき面かけ(梅一) 故人の生前の様子。  
名くはしき(うけ六) 名高い。「くはし」一美  
しい。立派な。

名だて(秋四) 名を立てること。評判ばかり  
で。

など(玉十三) どうして。  
七十ち八十ち(鈴一) 七十歳、八十歳。  
何くれ(櫃十) 何やかや。あれやこれや。  
なに心地かせまし(櫃十五) どんな氣持がす  
るであらう。



なのために(鈴一) 一通りに、普通に。よのつねに。

なべて(樂八) おしなべての意。一般に。なべての花。すべての花。

なまじひの(文五) おろそかの。

なまなか(琴五) 未熟な。中途半ばな。

なまめかしう(櫃六) 優婉に。

なめきやう(玉十二) 失禮にあたるやう。なめし。無禮なこと。

奈良の都のふること(花三) 奈良朝時代の古語。萬葉集などにはあらはれた歌語。

なりのぼり(玉九) 立身出世といふ意。成りあがる意。

なり弾の音(うけ五) 弓を射た時に、弓弾が音高く鳴る音。なり弾の音をきかず。世が太平でるとの意。

なりはひ(櫃十六) 生業。生活してゆくためにする仕業。

### にの部

賑はしきにより(琴十一) 賑はしい方に屬し。庭涼(花十五) 雨が降つて一時的に溜まり流れる水。

にほひふかう(櫃六) 匂ふかく。にほひ。色

光などの映えること。にほひ深う。光のおくゆかしく感じられることをいふ。匂ひ(花十四) 光又は色などがてり映えること。

### ねの部

ねたば(梅六) 寐刃。刀の切味の鈍くなったもの。ねたばをつける。刃た刃を研いで良く切れる様にする。

年賀(閑一) こゝでは還暦や古稀などの祝。念なし(閑四) 無念なり。口惜し。

念ず(櫃十三) 堪へる。辛抱する。

### のの部

能書(梅二) 薬の効能を書いたもの。のしりて(松五) 大聲で語り合ふ意。野分(櫃七) 秋に吹くはげしい風。

### はの部

はえ(鈴二) 光彩。てりはえて美しいこと。はかなき(文三) とるにたらぬ。くだらない。はかなき(琴八) 一寸した。かりそめの。はかなげ(櫃十六) 頼りにならぬ様。心ぼそい様子。

はかん(しき心(琴五)) たしかな考。しつかりした心。白眼にして見る(樂三) だらむ。睨むやうな目つきで見る。

薄酒(駿五) 味うすき酒。粗酒。こゝでは謙遜していふ。

はげて(花三) 矢はげて。矢を弓弦につがへて。はげ。つける。はめる。

蕨姑射の山(藤三) 支那で仙人の住むといふ想像の山をいふ。我國では上皇の御所を祝し奉つて云ふ。仙洞といふと同じこと。

はしたなく(鈴三) どうにもならぬやうに。「雨はしたなく降る」雨がひどく降る(そのために困る。情なく思ふといふ意がふくまれてゐる)。

端居(樂六)(松六)(閑文四) 家の端。即ち縁先などに出てゐること。端居の風。端居してゐる所へ吹きくる風。

管にあふ(梅三) 矢のはすが弦によく合ふこと。轉じて、うまく適合する等の意となる。

はた(玉十二、玉十五) ……も又。

はたご馬(櫃十四) 驛馬。昔の道中で、旅人や荷物をのせてあるいた馬。

はたつもの(閑文二) 柵つ物。畑に作る作物。

菜や大根など。

旗手のなびき(うけ五) 旗旗のなびきこと。

戦争の時には旗がなびく故。旗手のなびきを見ず」といふと天下太平といふ意になる。

はつかに(櫃十二)(閑文四) わづかに。かすかに。ほのかに。

葉月(うけ三) 陰曆八月の稱。

花田の色(うけ三) 薄い藍色。あさぎ色。

花の面をふす(琴十四) 花の面目をつぶす。

花の心をとふ(琴十四) 花のおもむきをたづねる。

花のしがらみかけて思はぬにはあらぬものから(泊五) 花が集つて水の流れを止めるのを柵に見立て、花の柵といふ。花の柵をかけるといふ意味でかけての枕詞に用ひてある。全く考へぬでは無いけれどもの意。

はふらかす(鈴一) 捨て放れしむといふ原意。零落させる。打ち捨ててしまふ。

濱木綿(文二) 紀州などの海岸に生ずる石蒜料の植物。莖は芭蕉のやうに皮が幾重にも重なり葉は萬年生に似て長く、花は木綿四手を折りかけた様である。皮の幾重も重ることから、百重の枕詞とした。

春のまうけ(藤六) 新年をむかへる準備。

はりありの聲(閑四) 蹴鞠の時に、まりを蹴り渡し又うけとめる時の掛聲。はりや、はり。ありや、ありい。といふ。

晩節(樂七) 晩年の節義。

### ひの部

ひが心得(玉六) 間違つた解釋をしてゐること。誤解。

ひがごと(梅六) 僻事。間違つたこと。

ひがもの(玉九) 性質のねちけひがんだもの。光しめりたる(花十五) 光が明るくなく、うすぼんやりしてゐること。

光を頼み跡をかくす(琴九) 自分の才能をつゝみかくして、目立たぬ様にしてゐること。引色(閑二) 鳴いた後にひく餘聲をいふ。

ひきはふ(秋三) ひきのばす。ひきひろげる。久かたの(うけ六) 「天」の枕詞。

ひたぶる(琴六) 一つのことゝ専念になること。ひどく切なること。

ひたぶるに(玉三) 一途に。全然。ひたぶるに捨つ。全く捨ててしまふ。

ひぢ(櫃八) 泥をいふ。

人草しげき(琴二) 住民の多い。人くさ。人。ひとゝなる(梅六) 大きくなる。成長する。

一むきに(玉四) 一途に。いちづに。

一わたり(玉三) 一べん通り。一應。

人わるし(玉三) 人目わるし、人聞わるし。體裁のわるいこと。

火とり(藤四) 香爐の類。薰爐。

ひみづ(琴二) 氷水。こほり水。

氷室(閑文二) 古昔に、氷を夏までたくはへておく所の室。山かげに穴をうがつてたくはへたものであつて、陰曆六月一日には宮中で氷室の節會が行はれる。

百味の飲食(梅二) 佛語で、諸種の珍味。數々の馳走。

紐ときはじむ(琴十四) 綻びをさめる。花の開くことを紐とくといふ。

### ふの部

風教(駿二) 人民の教化。風教を維持する。人民を教化して美風に赴かしめて、世の人心の頹廢することを防ぐ。

深き心ばへあるくだりも(櫃十六) 意味の深遠な條々も。

腹稿(秋六) 詩文などを作らんとして、あらかじめ心中に組み立てる仕組み。

ふし(秋五) 節。時。



ふつゝか(閑三) ぶしつけな、無骨な。ふつゝかにあらゝしき人。無骨で動作などが荒々しい人。

筆のしりとるはかせ(鈴四) 筆のしりー筆の軸のもの。筆のしりとるー筆持つ手を持ちそへて手習を教へること。筆のしりとる博士ー自分の作の悪い所を訂正し直してくれる人物知り人。

書卷(櫃十二) 書物のこと。むかへる書卷ー今讀みつゝある書物。

ふり(花三) 風。ならばし。

ふること(櫃九) 古人の言つた言葉。

ふん月(藤七) ふみ月の音便。陰曆、七月の稱。

### ほの部

ほい(梅六) ほんい。本意。

ほころびいづ(樂五) 咲き出でること。

ほどゝに付けて(藤六)(玉四)(秋一) 身分々々に従つて、めいゝの程度につれて。

ほどを得しみやび(花三) 中庸を得たる風流。

ほのめく(鈴一) うつすりと見える。ほんのりと見える。

ほめものす(花一) 賞める。「ものす」動作

するといふ意で、廣く漠然とした語で、よ他の語の終についてゐる語。

### まの部

まかせやる(櫃十五) 流しやる。導きやる。まかなひありく(櫃十三) あちこちへ行つてとりまかなふ。

眞木(うけ二) まー美稱。木といふに同じ。檜をいふ。

まごゝろ(玉四) 實情。ほんとうの心。

まくらがみ(櫃十一) 枕元。まくらもと。

ますみのかぢみ(秋六) 眞澄の鏡。すみ渡りしかがみ。こゝでは月のことを指してゐる。

まだしき(樂七) いまだしきの略。まだ其の時期に達してゐないこと。

まだしき程(櫃六) 未だ其の時期になつてゐない時分。

まち人(秋二) 貧窮な人。轉じて、不幸な人。

まどしき(閑文二) 貧しき。

まねぶ(琴十一) 語る。話す。

まねぶ(花一) 學ぶ。

まねぶる(秋二) 眞似をする。

まのあたり(文一) 目前、面とむきあつて。

まほら(うけ四) 丘山にかこまれこまれる土

地。國のまほらとは國の中といふほどの意。

まめやかに(文三) 忠實に。

まめやか(琴一) 其の業について誠實なこと。

まゆ(櫃五) 眉、本文は柳の眉をいふ。柳の枝に芽の萌え出たのを、やなぎのまゆといふ。

まらうど(櫃十) まれ人と同じ、客人。

まれ(鈴一) 「にもあれ」の意。「何わざにまれ」ーどんなことでも。

まれ人(文四)(藤四) 客人。まらうど。まれびと。などゝもいふ。

まる(玉十六) 古代に自己をよぶ時の稱。我。おのれ。

満ちの金(樂四) 萬一三四斗入りの籠。これに一げいの黄金、即多量の黄金の意。

みのおす(藤二) こちらを見る。

見おとさる(文四) 見くだされる。侮りの眼で見られる。

御格子(藤五) 御殿の格子戸。これは開く時には外上方につりあげて開く。閉ぢる時はこれをおろす。

みざり(松七) 砌、軒下の雨だれのおちる所

### みの部

見おこす(藤二) こちらを見る。

見おとさる(文四) 見くだされる。侮りの眼で見られる。

御格子(藤五) 御殿の格子戸。これは開く時には外上方につりあげて開く。閉ぢる時はこれをおろす。

みざり(松七) 砌、軒下の雨だれのおちる所

普通石などをしく。

三越路(うけ二) 越前、越中、越後の三國。

三は接辭で意味はない。

みしぶ(琴九) 水溢。水上にうかんでゐる赤黒いかす。みづあか。

みそぎ(閑文三) 夏六月晦日に、川口に出で、身を洗つて、身の罪けがれをばはらふこと。「なごしのはらへ」ともいふ。「一般に「みそぎ」といへば、河原で身を洗ひ罪けがれをばはらふこと。

みちゝしきすぢ(櫃二) 經世、實務に關係したる方面。經傳などの方面。

瑞枝(うけ一) みづゝしい若枝

みな月(樂六)(藤五) 陰曆六月のこと。

南面(櫃十) 南にむいてゐる室。

水沫(うけ三) 水の泡。

身は黒くやつす(藤三) 身體は僧となつて墨染の衣をきる。

見はやす(閑文二) 見物してもてはやす。見て賞翫する。

見まさり(松一) よく見れば見るほど、益々立派に見えること。

耳順ふ(花二) 學問經歷圓熟して、聞く所耳にさからはぬやうになること。

都の大路のたてぬきに(櫃五) 都の大通りの縦横に、

みやび(琴四)(花三) 風流。風雅。

みやび所せし(泊一) 風流心の少ない。

みるめ(うけ二) 海松布。海藻を總稱していふ。元來は「みる」といふ一種の海藻の名。

未練(駿六) 未熟なこと。修養のたぬこと。身を操にもてつく(泊四) 高潔な操のまゝに身をもてなすこと。

### むの部

無縁(閑一) 何等の縁故のない。

むかしおぼゆ(樂八) 昔の事が思はれる。

むかへて聞く(梅七) 聞かぬ前からかういふ意味ときめて聞きにかゝる。繼母の事故惡いものときめて聞きにかゝる。

むぐら(樂四) 雑草のひどく生ひしげりたるをいふ。

むぐらの宿(松四) 葎のしげつてゐる家、賤が家隠栖などもいふ。

葎生の門(琴十) 葎など雑草のはえ繁つてゐる門。伏屋の門。轉じて自家の卑稱。

むすぶ(樂六) 掬する、手ですくふこと。

むつかし(鈴二) 鬱陶しい、氣持のくしゃく

しやする。

陸月(琴十二) 陰曆、正月の稱。

むとくに(鈴二) 役にたゝぬこと。

むねとおぼゆれ(閑文五) 眼目と思はれる。

むねー主要なこと。

むべ(梅一) うべに同じ。

むやひ(櫃十七) むやふー船と船をつなぎあはせること。

### めの部

めづらか(琴二) 愛づらかの意である。稱美すべき。

めでたし(樂八)(藤六) 賞翫するねうちがある、立派である。結構である。

### もの部

もてなし(文四) とりなし。待遇。

もとづく(梅六) 身を入れて精出す。

物おろそか(琴八) 「事そぎ」と同意。すべての物事に簡略なこと。

ものから(うけ三)(玉三其他) ものながら。ものではあるが。けれども一方では等の意を示す。

物す(櫃十八) 一般の動作を廣く言ふ語であ



るから、その前後の文の關係によつて種々の意味をなすのである。「舟より物す」―舟で行く。「如何に物す」―如何に暮す。ものゝあはれ(松二) 情趣。ものふり(閑文二) 古くなること。木立ものふり―老木がしげつてゐること。物へゆく(鈴三) 外出する。ものまねび(花三) 眞似。ものむつかしげ(松六) むつかしげと同じこと。何となく気分のはれぬしなないこと。氣がどことなく、くしや／＼すること。百の司(うけ一) 百の司人。百官。多くの朝廷の官人。

### やの部

やがて(櫃十六) 直に。そのままに。柳の糸のくりかへし(琴十三) 「柳の糸の」は「くりかへし」の枕詞。單に「くりかへし」といふと同じ。八重むぐら(櫃七) いやが上にも繁つてゐる葎。むぐら―雜草の一種であるが、殆ど雜草の總名の如く用ひられてゐる。山鳥の長々し云々(秋四) 「足引の山鳥の尾のしだり尾の」は「長々し」の序詞で、意

味がない。長々しいといふ秋の夜の意。

山の端(櫃十八) 山のきは、やんごとなき人(花十二) 貴き人。高貴の方。遣水(樂七)(閑文二) 庭園の中につくる流れ。八百日ゆく濱の眞砂云々(藤三) 「澤山の日数が掛つて行く長い濱路の砂の中には、玉として拾ひあげたものもあらう」といふことで、内意は「長い／＼旅の中には、いろいろ感興を詠じた立派な歌もあらう」との意。「眞砂」は歌。「玉」は其の中の名歌をさす。

### ゆの部

ゆあみ(閑文四) 沐浴。入浴。ゆゑづけて(鈴一) 一かどある様にする。ゆゑづく―奥ゆかしい事。ゆきかひ(櫃九) 往來。ゆきま。ゆきかひぶみ(琴七) 消息文。手紙。往來する文の意。ゆはた(うけ一)(泊五) しほり染。絞染。夕やみ(松六) 日暮れて月の出るまでの間。よひやみともいふ。ゆほびかに(藤六) ゆたかに。ゆつたりしたこと。

### よの部

ようある事(櫃一) 用あること。必要なこと。ようなき(鈴一) 用のない。つまらない。洋々乎(梅一) そのあたりに満ちあふれてゐる心持をいふ。原意は廣大な貌をいふ語。よごまれる(鈴一) 生ひさきのこもること。年の若いこと。春秋に富む意。よしある(玉十七) 由緒ある。よしめきて(玉十一) 由緒ありげに。容態ぶつて。よすが(秋四) 手だて。たより。よそにす(駿一)(駿二) 疏外する。よそ／＼しくする。冷淡に知らん顔をする。よそやにはとて(櫃十八) 「よそにやはせん」との意味。見ないで捨て、置かうか、いや見ないではゐられぬといつて。よそふ(琴九) なぞらへる。比較する。くらべて見る。世にたがひ(琴九) 時勢に逆行する。世の風習に反抗すること。世のならはし(琴三) 世間の習俗。慣例。よはひ(樂二) 年齢。よろぼふ(松四) よろ／＼とする。倒れさう

になつてゐること。

### らの部

らうがはし(玉十七) みだりがはしい。亂雑な。

### ろの部

六尺(閑一) 駕籠かき。

### わの部

わがたてたるすぢ(櫃一) 自分の主義としてゐる方面。吾がよ(鈴一) 自分の生存してゐる間。残りの年。わくらははに(松八) たまさかに。稀に。わざと(鈴一) 別段に、殊さらに。特別に。私にひかれて(文二) 萬事につけて、自分が關係したことは、(即自分の考へたこと、したこと等) 自分の眞面目で良く思はれることを「私にひかれる」といふ。

私の心(花六) 私にひかれる心。渡る(櫃十) 通る。あゆみゆくこと。わびし(樂四) 心憂い。いやである。やりきれない。

わらふだ(樂六)(うけ一) 藁の圓座。昔の敷物の一種である。

### めの部

遺外(駿三) 度外視すること。忘れて意にかけること。痿疾(駿四) 手足のしびれなへて自由にならぬ病氣。中風のごときもの。

### ゑの部

ゑりもとにつく(駿一) 襟元につく。權勢ある者に詣ひつくこと。

### をの部

をかしき(鈴三)(琴二) 興趣ある。風情のある。をこがましく(玉十一)(玉十六) 馬鹿らしい。長しき異見(梅七) 長上の者らしい異見。めうへらしい異見。異見は訓へさすとすこと。をさ／＼(玉八) 殆。「をさ／＼なし」―殆んどない。

尾上(琴三) 山の峰。山のいたゞき。女郎花の一時(駿六) 永續しないことが、丁度女郎花の咲く間が一時に過ぎぬに似てる

るからいふ。



大正十四年十二月二十三日印刷納本  
大正十四年十二月二十七日初版發行

近世擬古文新鈔改訂版  
大正十五年度 定價金七拾錢

不	許
複	製

著者 吉澤義則  
能勢朝次  
發行兼 株式會社文獻書院  
印刷者 代表者 武藤欽  
印刷所 文獻書院印刷所  
京都市下長者町油小路西入  
紹巴町二十一  
京都市下長者町堀川東入

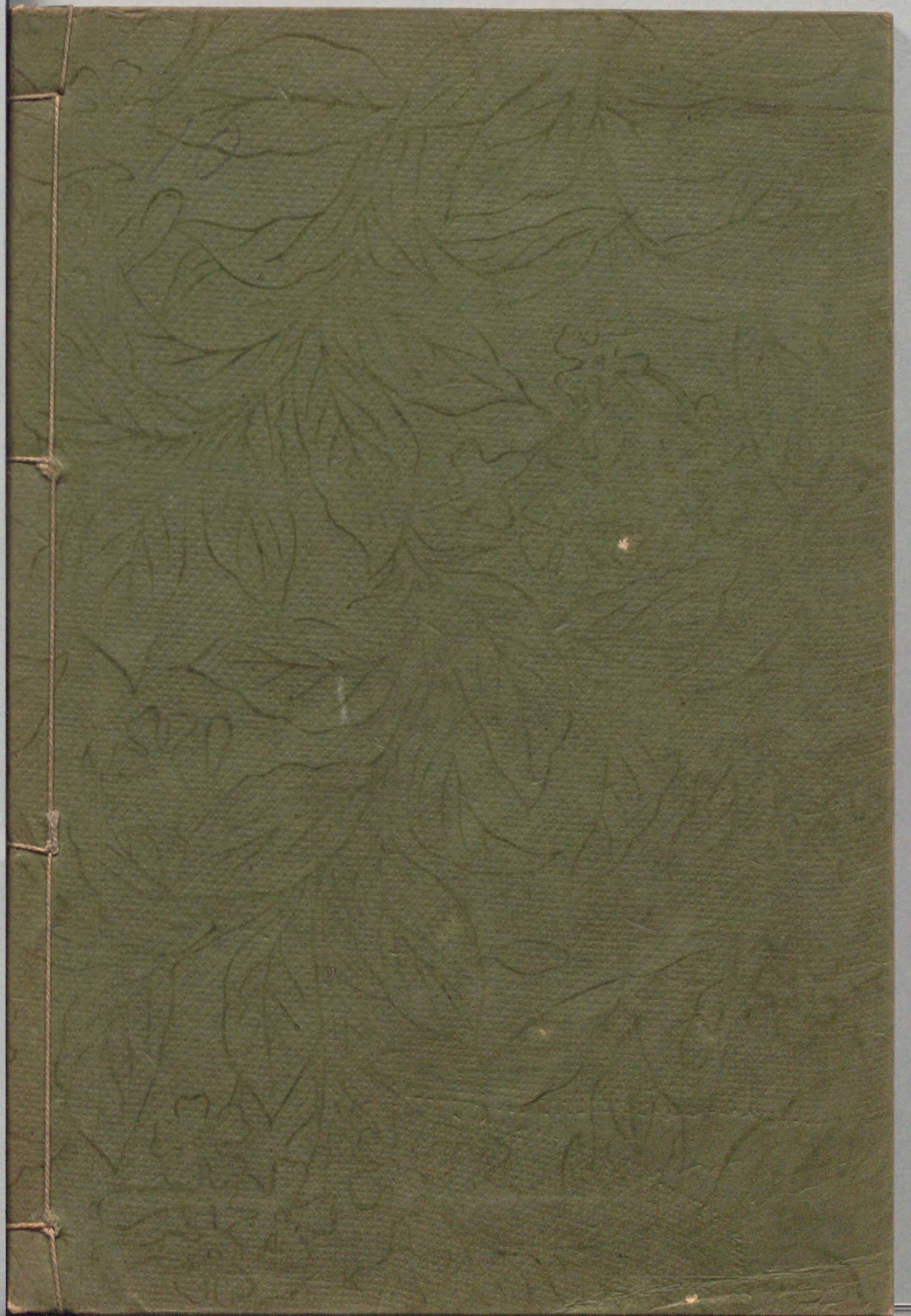
發行所

文獻書院

京都市下長者町油小路西 (振替口座大阪六三〇九二)  
京都市神田區表神保町三 (振替口座東京七一九四五)

1874  
1890-1915







近世擬古文新鈔

810.78  
Y956k  
(t)



00336433



